宮古市埋蔵文化財調査報告書72

牛沢（うしざわ）遺跡・大付（おおづけ）遺跡第11次調査

― 市内遺跡発掘調査報告書７ ―

２００７．３

岩手県宮古市教育委員会

宮古市埋蔵文化財調査報告書72

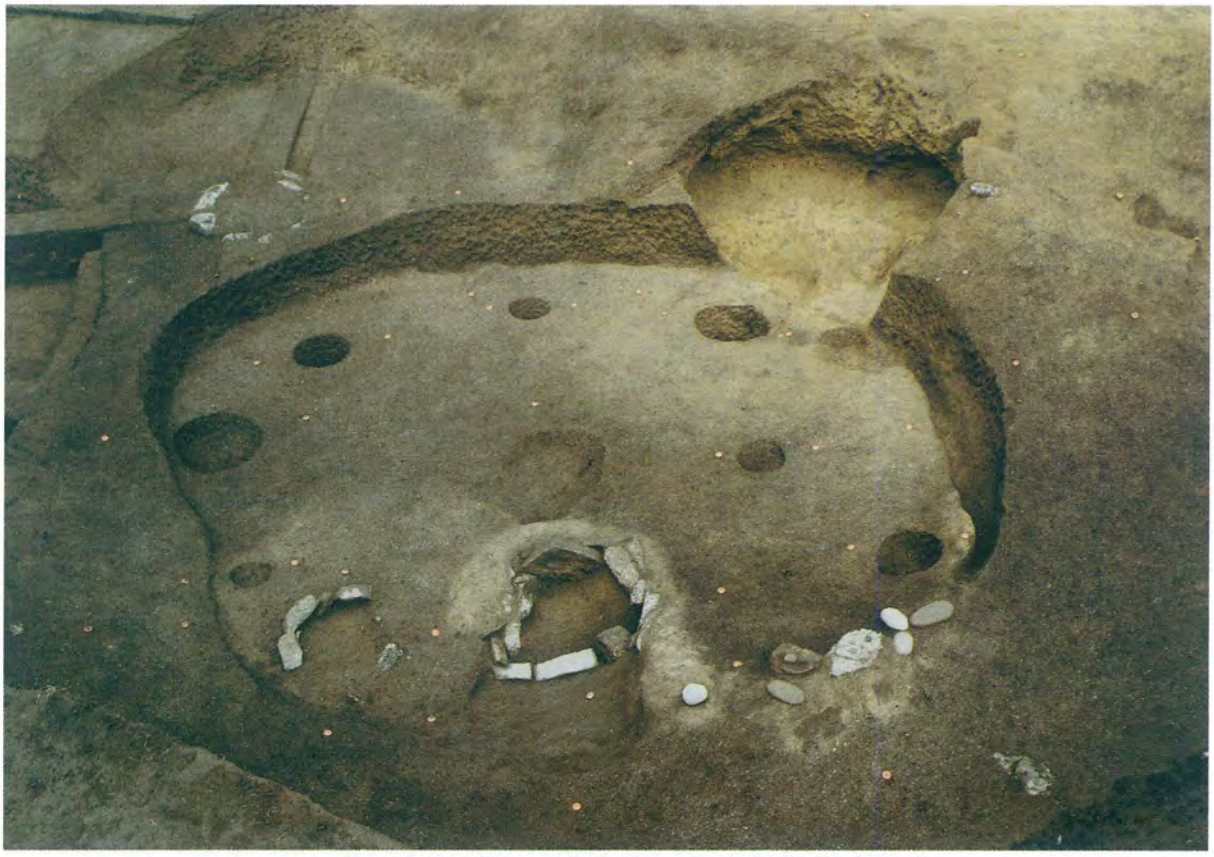
牛沢（うしざわ）遺跡・大付（おおづけ）遺跡第11次調査

― 市内遺跡発掘調査報告書７ ―

２００７．３

岩手県宮古市教育委員会

1．牛沢遺跡　遺構検出状況（西→）



2．牛沢遺跡　第１号竪穴住居跡　完掘状況（南→）

3．牛沢遺跡　第６号竪穴住居跡　完掘状況（東→）

4．牛沢遺跡　第４号竪穴住居跡　遺物出土状況（北→）

5．大付遺跡第11次調査　第22号土坑土器出土状況

6．大付遺跡第11次調査　第22号土坑出土土器

序

本州最東端の市である宮古市には、５８０を超える遺跡が分布しています。教育委員会では遺跡の周知・保存に努め、住宅建築や道路建設などの開発に伴う発掘調査で掘り起こされた遺構や遺物を記録・整理し市民へ普及・公開を行っている所存でございます。

本報告書は山口地区で調査された牛沢遺跡と崎山地区で調査された大付遺跡の成果をまとめたものです。牛沢遺跡では今から約５千年前、縄文時代中期と呼ばれる時期の竪穴住居跡が６棟検出されました。中からは多くの土器や石器が出土し、複式炉と呼ばれるこの時期特有の炉跡が発掘されました。大付遺跡は昭和53年の調査では今から約３千年前の縄文時代晩期の屈葬人骨が出土したことで知られていますが、今回の第11次調査では晩期中ごろの土坑が発掘されています。

この度の調査により発掘された遺構・遺物が今後宮古市内に留まらず、市の内外を問わず活用されていくことを願っております。

最後に、発掘調査から報告書刊行にあたりご指導・ご協力を賜りました関係各位に対し、心から感謝を申し上げ、本書の序文といたします。

平成19年３月

宮古市教育委員会

教育長　中　屋　定　基

例　言

1．　本書は宮古市山口地区に所在する牛沢遺跡と崎山地区に所在する大付遺跡の第11次調査についての発掘調査報告書である。

2．　本書は「Ⅰ概説編」と「Ⅱ本編」から成る。概説編では主として調査報告の要旨である。本編は通常の報告書である。

3．　牛沢遺跡と大付遺跡第11次調査は個人住宅の建築工事に伴う事前調査であり、牛沢遺跡は平成17年度の市内遺跡発掘調査事業、大付遺跡第11次調査は遺跡発掘調査事業として実施されたものである。

4．　調査主体は宮古市教育委員会である。本書の執筆・編集は牛沢遺跡が文化課の長谷川が、大付遺跡第11次調査は文化課の江口が担当した。また、その他、文化課担当職員がこれを補佐した。

5．　調査座標については牛沢遺跡が任意で設定したもので、大付遺跡第11次調査は公共座標第Ｘ系を基準としたものである。大付遺跡第11次調査の座標値はＸ＝－35,800.00m、Ｙ＝＋97,000.000mを原点とした。また、図版中は調査用の局地的な座標であることを明示するためにＲを冠した。レベル数値は標高値を表わす。

6．　土層観察及び文中の色調表記にあたっては、『新版標準土色帖』（小山正忠、竹原秀雄編著　1990年度版）を使用した。

7．　図版中のスクリーントーン表示は図版中で定めない限り以下の通りである。

遺構図版　・　石　・　焼土

遺物図版　・　繊維混入　・　磨石、敲打磨石の機能面

8．　図版中の記号、略号の表記は以下の通りである。

牛沢遺跡　　ＳＩ…竪穴住居跡　ＳＫ…土坑　Ｐ…ピット　ｐ…竪穴住居跡内ピット　Ｓ…石

大付遺跡第11次調査　Ｋ…撹乱　Ｐ…土器

9．　遺物の観察は全て肉眼観察によるものである。

10．　本書に収録した調査記録及び出土資料は、宮古市教育委員会で保管している。

目　次

序文
例言
目次　図版目次　写真図版目次　表目次

Ⅰ　概説編…… 1
Ⅱ　本　編…… 6
　第１章　立地と環境…… 6
　　第１節　宮古市の位置と環境
　　第２節　遺跡の位置と立地
　　第３節　周辺の遺跡
　第２章　牛沢遺跡…… 13
　　第１節　調査に至る経緯と調査体制
　　第２節　調査の方法と調査経過
　　第３節　基本土層
　　第４節　遺構と遺物
　　竪穴住居跡（20）　土坑（60）　焼土遺構（65）　遺物包含層（70）
　　ピット（76）　遺構外出土遺物（76）
　　第５節　まとめ
　第３章　大付遺跡…… 147
　　第１節　調査に至る経過
　　第２節　調査の経過とこれまでの調査概要
　　第３節　調査内容
　　第４節　遺構と遺物
　　炉跡（155）　土坑（157）　遺構外出土遺物（165）
　　第５節　まとめ
　報告書抄録…… 192

図版目次・写真図版目次・表目次

巻頭カラー
1．牛沢遺跡　遺構検出状況（西→）
2．牛沢遺跡　第１号竪穴住居跡　完掘状況（南→）
3．牛沢遺跡　第６号竪穴住居跡　完掘状況（東→）
4．牛沢遺跡　第４号竪穴住居跡　遺物出土状況（北→）
5．大付遺跡　第11次調査　第22号土坑土器出土状況
6．大付遺跡　第11次調査　第22号土坑出土土器

Ⅰ　概説編

写真１　牛沢遺跡　航空写真
写真２　第１号竪穴住居跡の完掘状況
写真３　炉跡
写真４　縄文土器の出土状況
写真５　第５号土坑の断面
写真６　遺物包含層の堆積状況
写真７　大付遺跡空中写真
写真８　第１次調査で検出された屈葬人骨
写真９　炉跡の検出状況
写真10　炉跡から出土した縄文土器
写真11　遺構と出土した土器
写真12　土器のアップ写真
写真13　土器のアップ写真
写真14　底面から出土した土器と同一の土器片が出土した様子
写真15　出土した縄文時代晩期の土器
写真16　断面がフラスコ形をした土坑
挿図１　牛沢遺跡　遺構配置図
挿図２　遺物包含層　断面図
挿図３　大付遺跡位置図
挿図４　大付遺跡第11次調査範囲図

Ⅱ　本編

第１章　立地と環境
第１図　遺跡位置図・・・・・・・・・・・・・・・・6
第２図　地形分類図・・・・・・・・・・・・・・・・7
第３図　周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・9

第２章　牛沢遺跡
第４図　遺跡周辺の地形・・・・・・・・・・・・・17
第５図　調査区全体図・・・・・・・・・・・・・・18
第６図　基本土層　断面図・・・・・・・・・・・・19
第７図　第１号竪穴住居跡　平面図・断面図・・・21
第８図　第１号竪穴住居跡　ピット断面図・・・・22
第９図　第１号竪穴住居跡　炉跡 平面図･断面図・23
第10図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（１）・・・25
第11図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（２）・・・26
第12図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（３）・・・27
第13図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（４）・・・28
第14図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（５）・・・29
第15図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（６）・・・30
第16図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（７）・・・31
第17図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（８）・・・32
第18図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（９）・・・33
第19図　第２号竪穴住居跡　平面図・断面図、炉跡　平面図・断面図・・・・・・・・・・35
第20図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（１）・・・37
第21図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（２）・・・38
第22図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（３）・・・39
第23図　第３号竪穴住居跡　平面図・断面図・・・40
第24図　第３号竪穴住居跡　出土遺物・・・・・・41
第25図　第４号竪穴住居跡　平面図・断面図、１号炉跡・２号炉跡　平面図・断面図・・43
第26図　第４号竪穴住居跡　出土遺物・・・・・・44
第27図　第５号竪穴住居跡　平面図・断面図、炉跡　平面図・断面図・・・・・・・・・・46
第28図　第５号竪穴住居跡　出土遺物・・・・・・47
第29図　第６号竪穴住居跡　平面図・断面図・・・48
第30図　第６号竪穴住居跡　ピット断面図・・・・49
第31図　第６号竪穴住居跡　炉跡 平面図･断面図・50
第32図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（１）・・・53
第33図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（２）・・・54
第34図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（３）・・・55
第35図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（４）・・・56
第36図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（５）・・・57
第37図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（６）・・・58
第38図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（７）・・・59
第39図　第１号～４号土坑　平面図・断面図・・・62
第40図　第５号～７号土坑　平面図・断面図・・・64
第41図　土坑　出土遺物（１）・・・・・・・・・・66
第42図　土坑　出土遺物（２）・・・・・・・・・・67
第43図　土坑　出土遺物（３）・・・・・・・・・・68
第44図　土坑　出土遺物（４）・・・・・・・・・・69
第45図　第１号・２号焼土遺構　平面図・断面図・70
第46図　遺物包含層　分布範囲図・断面図・・・・71
第47図　遺物包含層　出土遺物（１）・・・・・・72
第48図　遺物包含層　出土遺物（２）・・・・・・73
第49図　遺物包含層　出土遺物（３）・・・・・・74
第50図　遺物包含層　出土遺物（４）・・・・・・75
第51図　第１号ピット群　平面図・断面図・・・・77
第52図　第２号ピット群　平面図・断面図・・・・78
第53図　遺構外出土遺物（１）・・・・・・・・・79
第54図　遺構外出土遺物（２）・・・・・・・・・80
第55図　遺構外出土遺物（３）・・・・・・・・・81
第56図　宮古市内の複式炉（１）・・・・・・・・92
第57図　宮古市内の複式炉（２）・・・・・・・・93
第58図　牛沢遺跡　床面出土遺物集成図・・・・・95

写真図版

1　牛沢遺跡　航空写真（南→）・・・・・・・・・99
2　牛沢遺跡　航空写真（昭和54年）（東→）・・・99
3　牛沢遺跡遠景（南→）・・・・・・・・・・・・100
4　調査前状況（東→）・・・・・・・・・・・・・100
5　牛沢遺跡全景（東→）・・・・・・・・・・・・101
6　遺構検出状況（西→）・・・・・・・・・・・・101
7　調査区南壁深掘セクション（東→）・・・・・102
8　調査区南壁深掘セクション（北西→）・・・・102
9　調査区南壁深掘セクション（北→）・・・・・102
10　調査区南壁深掘セクション（北→）・・・・・102
11　調査区西壁深掘セクション（南→）・・・・・102
12　第１号竪穴住居跡　完掘状況（南→）・・・・103
13　第１号竪穴住居跡　遺物出土状況（南→）・・103
14　第１号竪穴住居跡　炉跡検出状況（南→）・・104
15　第１号竪穴住居跡　１号炉跡セクション(西→)・104
16　第１号竪穴住居跡　２号炉跡セクション(南→)・104
17　第１号竪穴住居跡　炉跡掘方検出状況(南→)・104
18　第１号竪穴住居跡　堆積状況（南→）・・・・104
19　第２号竪穴住居跡　完掘状況（北→）・・・・105
20　第２号竪穴住居跡　炉跡検出状況（北→）・・105
21　第２号竪穴住居跡　炉跡セクション（東→）・105
22　第２号竪穴住居跡　堆積状況（東→）・・・・105
23　第２号竪穴住居跡　遺物出土状況（南→）・・105
24　第３号竪穴住居跡　完掘状況（南西→）・・・106
25　第３号竪穴住居跡　検出状況（南東→）・・・106
26　第３号竪穴住居跡　遺物出土状況（南西→）・106
27　第３号竪穴住居跡　遺物出土状況（北→）・・106
28　第４号竪穴住居跡　完掘状況（北→）・・・・106
29　第４号竪穴住居跡　遺物出土状況（北→）・・107
30　第４号竪穴住居跡　堆積状況（東→）・・・・107
31　第４号竪穴住居跡　遺物出土状況（北→）・・107
32　第４号竪穴住居跡　１号炉跡検出状況(南→)・107
33　第４号竪穴住居跡　２号炉跡検出状況(南→)・107
34　第５号竪穴住居跡　完掘状況（南→）・・・・108
35　第５号竪穴住居跡　炉跡セクション(東→)・・108
36　第６号竪穴住居跡　完掘状況（西→）・・・・108
37　第６号竪穴住居跡　堆積状況（東→）・・・・108
38　第６号竪穴住居跡　堆積状況（南東→）・・・108
39　第６号竪穴住居跡　炉跡検出状況（南→）・・109
40　第６号竪穴住居跡　炉跡セクション(東→)・・109
41　第６号竪穴住居跡　炉跡掘方検出状況(東→)・109
42　第６号竪穴住居跡　柱穴配置（北→）・・・・109
43　第１号土坑　完掘状況（南→）・・・・・・・109
44　第１号土坑　遺物出土状況（東→）・・・・・109
45　第２号土坑　完掘状況（南→）・・・・・・・109
46　第３号土坑　完掘状況（北→）・・・・・・・109
47　第４号土坑　完掘状況（北→）・・・・・・・110
48　第５号土坑　完掘状況（東→）・・・・・・・110
49　第５号土坑　堆積状況（南東→）・・・・・・110
50　第５号土坑　遺物出土状況（南→）・・・・・110
51　第６号土坑　完掘状況（南→）・・・・・・・110
52　第６号土坑　堆積状況（南→）・・・・・・・110
53　第７号土坑　完掘状況（北→）・・・・・・・110
54　第７号土坑　遺物出土状況（北→）・・・・・110
55　第１号焼土遺構　完掘状況（南→）・・・・・111
56　第１号焼土遺構　セクション（南→）・・・・111
57　第２号焼土遺構　完掘状況（南→）・・・・・111
58　第２号焼土遺構　セクション（南→）・・・・111
59　遺物包含層　堆積状況（南東→）・・・・・・111
60　遺物包含層　遺物出土状況（南東→）・・・・111
61　第１号ピット群周辺完掘状況（南→）・・・・111
62　調査風景（西→）・・・・・・・・・・・・・111
63　出土土器（１）・・・・・・・・・・・・・・112
64　出土土器（２）・・・・・・・・・・・・・・113
65　出土土器（３）・・・・・・・・・・・・・・114
66　出土土器（４）・・・・・・・・・・・・・・115
67　出土土器（５）・・・・・・・・・・・・・・116
68　出土土器（６）・・・・・・・・・・・・・・117
69　出土土器（７）・・・・・・・・・・・・・・118
70　出土土器（８）・・・・・・・・・・・・・・119
71　出土土器（９）・・・・・・・・・・・・・・120
72　出土土器（10）・・・・・・・・・・・・・・121
73　出土土器（11）・・・・・・・・・・・・・・122
74　出土土器（12）・・・・・・・・・・・・・・123
75　出土土器（13）・・・・・・・・・・・・・・124
76　出土土器（14）・・・・・・・・・・・・・・125
77　出土土器（15）・・・・・・・・・・・・・・126
78　出土土器（16）・・・・・・・・・・・・・・127
79　出土土器（17）・・・・・・・・・・・・・・128
80　出土土器（18）・・・・・・・・・・・・・・129
81　出土土器（19）・・・・・・・・・・・・・・130
82　出土土器（20）・・・・・・・・・・・・・・131
83　出土土器（21）・・・・・・・・・・・・・・132
84　出土土器（22）・・・・・・・・・・・・・・133
85　出土土器（23）・・・・・・・・・・・・・・134
86　出土土器（24）・・・・・・・・・・・・・・135
87　出土土器（25）・・・・・・・・・・・・・・136
88　出土土器（26）・・・・・・・・・・・・・・137
89　出土土器（27）・・・・・・・・・・・・・・138
90　出土土器（28）・・・・・・・・・・・・・・139
91　出土土器（29）・・・・・・・・・・・・・・140
92　出土土器（30）・・・・・・・・・・・・・・141
93　出土石器（１）・・・・・・・・・・・・・・142
94　出土石器（２）・・・・・・・・・・・・・・143
95　出土石器（３）・・・・・・・・・・・・・・144

第３章　大付遺跡

第59図　大付遺跡第11次調査範囲図・・・・・・148
第60図　大付遺跡周辺地形図・・・・・・・・・149
第61図　大付遺跡第３・７～11次調査位置図・・150
第62図　大付遺跡第11次調査全体図・・・・・・152
第63図　大付遺跡第11次調査土層断面図・・・・153
第64図　第１号炉跡、第19号土坑平面図・・・・156
第65図　第１号炉跡平面図・断面図・・・・・・156
第66図　第１号炉跡出土土器・・・・・・・・・157

第67図　第19号土坑平面図・断面図 ・・・・・・158
第68図　第19号土坑出土土器 ・・・・・・・・・158
第69図　第20号～第23号土坑平面図 ・・・・・・159
第70図　第20号、第21号土坑平面図・断面図、
　　第20号土坑出土土器 ・・・・・・・・・159
第71図　第22号土坑平面図・断面図 ・・・・・・161
第72図　第22号土坑土器出土状況図 ・・・・・・162
第73図　第22号土坑出土土器 ・・・・・・・・・163
第74図　第23号土坑平面図・断面図 ・・・・・・164
第75図　第23号土坑出土土器 ・・・・・・・・・164
第76図　遺構外出土遺物（1）・・・・・・・・・166
第77図　遺構外出土遺物（2）・・・・・・・・・167
第78図　遺構外出土遺物（3）・・・・・・・・・168
第79図　遺構外出土遺物（4）・・・・・・・・・169
第80図　大付遺跡第7・8・10・11次遺構位置図・・171

写真図版

1．大付遺跡　航空写真1 ・・・・・・・・・・175
2．大付遺跡　航空写真2 ・・・・・・・・・・175
3　第1号炉跡内完掘状況（西→）・・・・・・・176
4　第1号炉跡土層堆積状況（北西→）・・・・・176
5　第1号炉跡内炉体土器検出状況1（南東→）・176
6　第1号炉跡内炉体土器検出状況2（西→）・・176
7　第23号土坑土層堆積状況（北西→）・・・・・176
8　第22号土坑埋納土器出土状況（北東→）・・・177
9　第22号土坑C2、C3層出土埋納土器出土状況（北東→）・177
10　第22号土坑土器出土状況1（北東→）・・・・178
11　第22号土坑土器出土状況2（南→）・・・・・178
12　第22号土坑土器出土状況3（北東→）・・・・178
13　調査前全景（南→）・・・・・・・・・・・・179
14　調査区設定状況（北東→）・・・・・・・・・179
15　調査区内完掘時全景（北東→）・・・・・・・180
16　第10次調査区内土層堆積状況（北西→）・・・180
17　調査区内完掘状況（南→）・・・・・・・・・181
18　調査区南西部第20～23号土坑近景（北東→）・181
19　第11次調査区内土層堆積状況1（南→）・・・182
20　第11次調査区内土層堆積状況2（北→）・・・182
21　調査区西部堆積土完掘（北東→）・・・・・・183
22　調査区中央部堆積土完掘（南東→）・・・・・183
23　調査区南西部堆積土完掘（北東→）・・・・・183
24　調査区南部堆積土完掘（北東→）・・・・・・183
25　第1号撹乱完掘（南東→）・・・・・・・・・183
26　第2号撹乱完掘（南東→）・・・・・・・・・183
27　第3号撹乱完掘（南西→）・・・・・・・・・183
28　調査区南西部撹乱確認状況（北東→）・・・・183
29　第1号炉跡炉体土器検出状況（南→）・・・・184
30　第1号炉跡埋土断面（南東→）・・・・・・・184
31　第1号炉跡埋土断面（南西→）・・・・・・・184
32　第1号炉跡完掘（南東→）・・・・・・・・・184
33　第1号炉跡炉体土器出土状況（南西→）・・・184
34　第1号炉跡焼土層断面（南西→）・・・・・・184
35　第1号炉跡掘り方完掘（西→）・・・・・・・184
36　第19号土坑土層堆積状況（北東→）・・・・・184
37　第20号土坑土層堆積状況（北東→）・・・・・185
38　第21号土坑土層堆積状況（北東→）・・・・・185
39　第22号土坑土器出土状況（北東→）・・・・・185
40　第22号土坑検出状況（北東→）・・・・・・・185
41　第22号土坑近景（北西→）・・・・・・・・・185
42　第22号土坑土器出土状況1（北東→）・・・・186
43　第22号土坑土器出土状況2（南東→）・・・・186
44　第22号土坑土器出土状況3（北東→）・・・・186
45　第22号土坑土器出土状況4（東→）・・・・・186
46　第22号土坑土層堆積状況（北東→）・・・・・186
47　第22号土坑調査区内完掘（北東→）・・・・・187
48　第23号土坑上面完掘（北西→）・・・・・・・187
49　第23号土坑土層堆積状況（北西→）・・・・・187
50　基本土層Ⅳ層石核出土状況（南東→）・・・・187
51　調査区西部深掘り土層堆積状況（北東→）・・187
52　遺構内出土土器1 ・・・・・・・・・・・・188
53　遺構内出土土器2 ・・・・・・・・・・・・189
54　遺構外出土遺物1 ・・・・・・・・・・・・190
55　遺構外出土遺物2 ・・・・・・・・・・・・191

表目次

1　遺跡地名表・・・・・・・・・・・・・・・・9
2　牛沢遺跡出土遺物観察表（1）・・・・・・・82
3　牛沢遺跡出土遺物観察表（2）・・・・・・・83
4　牛沢遺跡出土遺物観察表（3）・・・・・・・84
5　牛沢遺跡出土遺物観察表（4）・・・・・・・85
6　牛沢遺跡出土遺物観察表（5）・・・・・・・86
7　牛沢遺跡出土遺物観察表（6）・・・・・・・87
8　牛沢遺跡出土遺物観察表（7）・・・・・・・88
9　牛沢遺跡出土石器観察表・・・・・・・・・・89
10　ピット計測表・・・・・・・・・・・・・・・89
11　第1号炉跡出土土器観察表 ・・・・・・・・157
12　第19号土坑出土土器観察表 ・・・・・・・・158
13　第20号土坑出土土器観察表 ・・・・・・・・159
14　第22号土坑出土土器観察表 ・・・・・・・・163
15　第23号土坑出土土器観察表 ・・・・・・・・164
16　遺構外出土土器観察表 ・・・・・・・・・・169
17　遺構外出土石器観察表 ・・・・・・・・・・170
18　遺構外出土銭貨観察表 ・・・・・・・・・・170

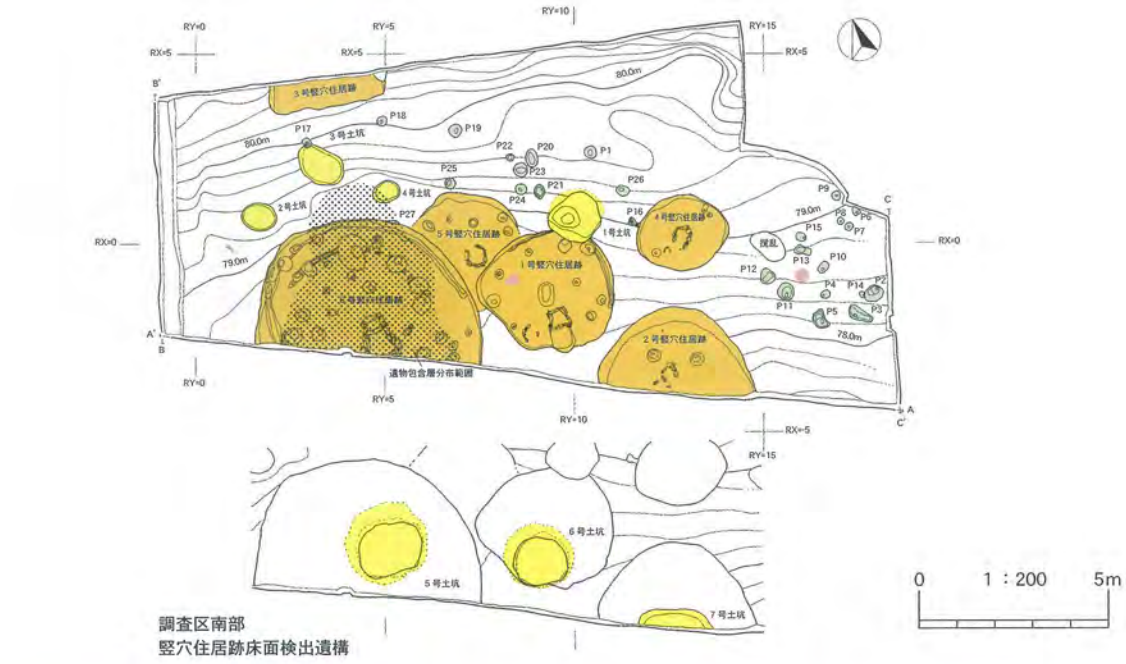
Ⅰ　概説編

(1) 牛沢遺跡

牛沢遺跡は宮古市大字山口字牛沢に所在し、山口川右岸の尾根先端部にある平坦地に立地しています。発掘調査は倉庫建築に伴い実施されたもので、平成16年度に試掘調査（どのような遺構・遺物があるのかを調べる調査）を行った結果、縄文土器が多量に出土したために、平成17年度に本調査を行いました。調査面積は約148m²です。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡６棟、土坑７基、焼土遺構２基、縄文時代後期の遺物包含層、ピット27基が検出されました。

写真１　牛沢遺跡　航空写真（南→）



挿図１　牛沢遺跡　遺構配置図

○竪穴住居跡は、地面を掘りくぼめて床を作りその上に屋根をかけたもので、今回の調査では縄文時代中期末（約4,000年前）に造られた住居跡が６棟確認されました。

住居跡の中には煮炊などをする炉が構築されていました。石を円形や四角形に並べて作ったものが多く、その石で囲まれた部分は火を使用したために地面が赤く焼けています。

写真２　第１号竪穴住居跡の完掘状況

写真３　炉跡

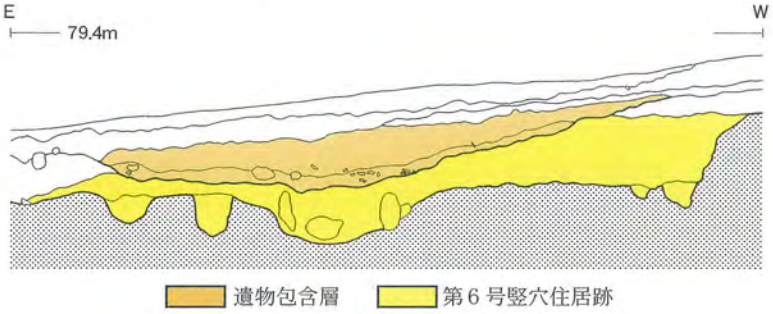
写真４　縄文土器の出土状況

○土坑は７基検出されました。土坑とは人為的に掘られた穴のことで、今回の調査では、底面が広がり穴の上の部分がすぼまっている形のいわゆる「フラスコ状土坑」といわれているものが見つかっています。このような形の土坑は、貯蔵のために掘られたと考えられています。

写真５　第５号土坑の断面
（土坑の半分を掘って横からみた写真になります）

○遺物包含層は第６号竪穴住居跡埋土の上層から検出されています。遺物の出土状況や検出状況から推察すると住居跡が使われなくなったあとにできた窪地を利用した土器の捨て場と考えられます。出土した土器から縄文時代後期の初め頃のものと考えられます。

写真６　遺物包含層の堆積状況



挿図２　遺物包含層　断面図

(2) 大付遺跡第11次調査

大付遺跡は国道45号線沿いの崎山公民館から東へ約1.5km離れた所にあります。近くには日出島漁港がほぼ真西に位置していますが、遺跡の標高は100m近くあるため、段丘上から大平洋を見下ろす眺望を有します。周辺には国指定史跡の崎山貝塚や10棟を超える竪穴住居跡が検出された白石遺跡などの遺跡が所在しています。大付遺跡の立地は段丘上と東向きの緩斜面からなり、段丘と緩斜面の間には谷が入り込んでいます。

これまで大付遺跡の発掘調査は試掘調査を含め10次にわたります。遺跡の発見は明治時代末期と古く、特に現在大付集落のある緩斜面には貝塚が残されていたため、骨角器などの遺物が出土していました。また、昭和53年に行われた第１次の発掘調査では縄文時代晩期の屈葬された人骨がほぼ完全な形で検出され、大付遺跡の名が市の内外を問わず知られています。

今回の発掘調査は個人住宅建築に伴う緊急調査です。遺跡の西側にあたる段丘上の建築工事部分を調査の対象範囲とし平成17年６月から８月まで調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代の遺構が６基検出され、縄文時代の遺物が出土しました。

写真７　大付遺跡空中写真

挿図３　大付遺跡位置図

写真８　第１次調査で検出された屈葬人骨

検出された遺構と遺物

検出された６基の遺構のうち３基を紹介します。左下は縄文土器を斜めに寝かせた状態で検出された写真です。炉跡と呼ばれる火を焚くための遺構で、土器と周辺の土が熱を受け赤く変色していました。縄文時代中期から後期に見られる炉の形です。

写真９　炉跡の検出状況（周りの赤い所が焼土です。）

写真10　炉跡から出土した縄文土器

次に、一個体の縄文土器片が集中して出土した遺構です。遺構は奥の調査区外へ続いています。遺構の全てを調査していないため遺構の性格は分かりませんが、土器を納める目的等々、興味深い出土例です。土器は縄文時代晩期の中頃、今から2,600年頃前のものとされています。第１次調査で検出された屈葬人骨よりも少し新しい遺構です。出土した土器は接合しほぼ完全な形に復元することができました。

写真11　　（右上）遺構と出土した土器
写真12、13（中段左右）土器のアップ写真
写真14　　（右下）底面から出土した土器と
同一の土器片が出土した様子。

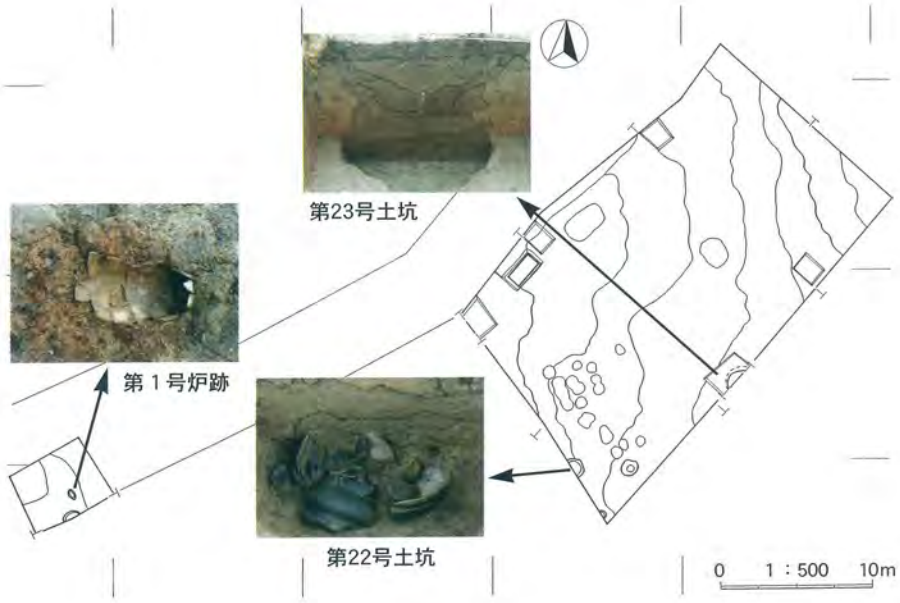
写真15
出土した縄文時代晩期の
土器

最後は当時の人が貯蔵用に掘った穴として考えられている遺構です。遺構は調査区外へ続いていて調査区内は狭く、穴が深くなるにつれ掘りづらくなりました。調査区内の調査を続行するためには周りの土も掘り下げながら遺構を断ち割るしかありませんでした。少しずつ断ち割った結果右の写真の状態になりました。断面が「く」の字に括れをもち、底面はほぼ平らで広いことがこの遺構の特徴で「フラスコ形土坑」と呼ばれています。

写真16　断面がフラスコ形をした土坑

深さは約1.2mあります。底からは何も出土しませんでしたが、中の土から縄文土器片と黒く炭になった木の実が出土しました。

大付遺跡の発掘調査は今回で11回目を迎えました。調査では竪穴住居跡こそ検出されませんでしたが、集落の広がりがより詳細に分かるようになった他、周辺では検出されていなかった縄文時代晩期の遺構が新たに検出されたことが調査の成果としてあげられます。



挿図４　大付遺跡第11次調査範囲図（１：500）

Ⅱ　本　編

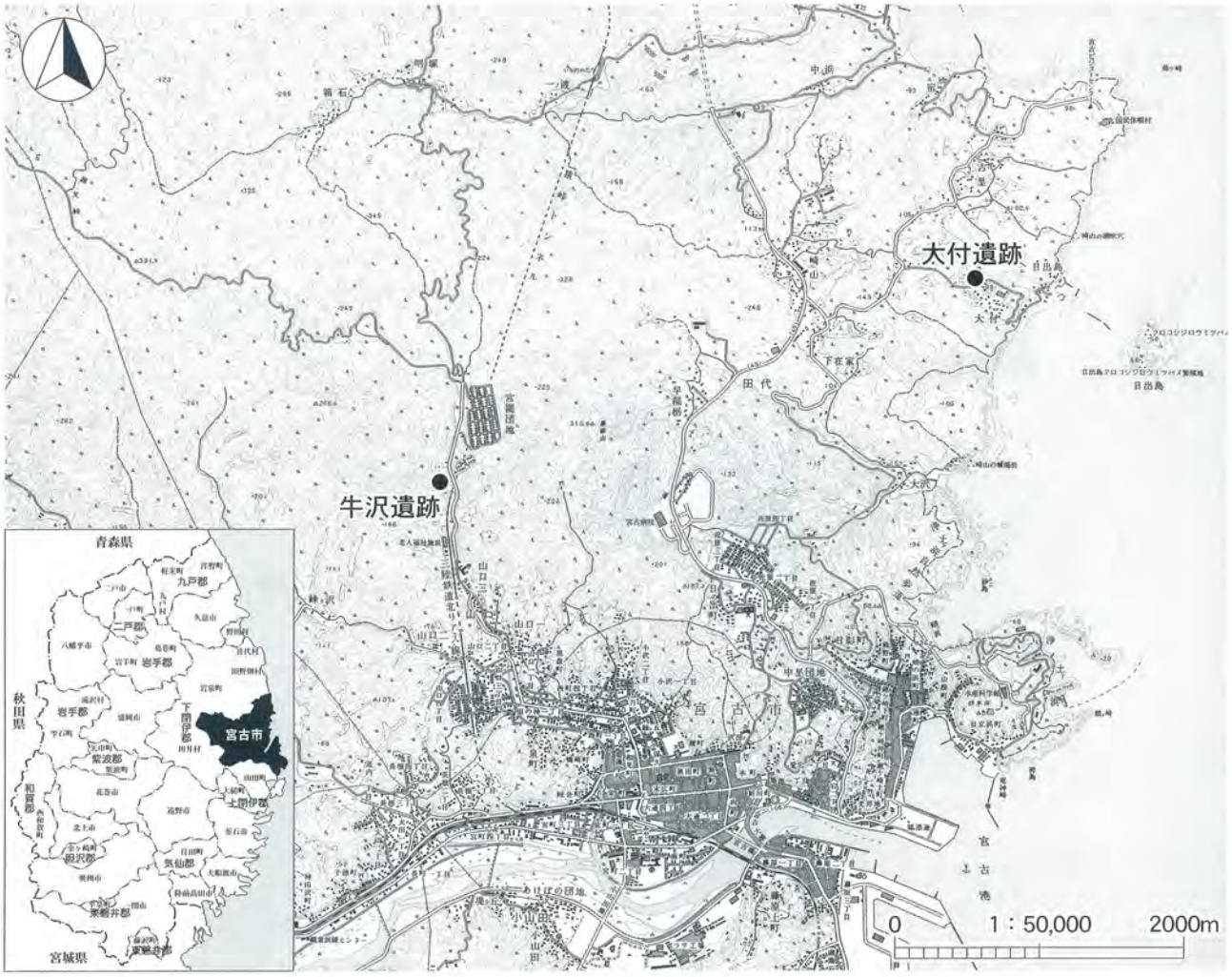
第１章　立地と環境

第１節　宮古市の位置と環境

岩手県宮古市は三陸沿岸のほぼ中央に位置し、北は岩泉町、西は川井村、南は山田町と隣接し、東は大平洋に面している。市域の総面積は696.82㎢、人口約60,000人の漁業と観光の都市である。

市域の西側は標高1,914mの早池峰山を最高峰とする北上山地の山々が連なり、東側は大平洋を望む。特に北東方向に突き出す重茂半島の鮭ヶ崎は本州における最東端となっている。宮古市周辺の海岸は岩手県指定名勝「浄土ヶ浜」や国指定名勝「崎山のローソク岩」「崎山の潮吹き穴」など岩手県随一の景勝地を有し、また「日出島クロコシジロウミツバメ繁殖地」などの国指定天然記念物がみられるなど自然豊かな景観をみることができる。

市内を流れる河川は、北上山地を源流とする閉伊川、その支流で市街地を流れる山口川、近内川、



第１図　遺跡位置図

小本丘陵
大付遺跡
牛沢遺跡
黒森山山地
千徳丘陵
閉伊川低地
閉伊川
宮古湾
八木沢丘陵
花輪山地
0　1：50,000　2000m

中起伏山地　小起伏山地　山麓地及び他の緩斜面　丘陵地Ⅰ　砂礫段丘Ⅰ　砂礫段丘Ⅲ　扇状地　崖錐性扇状地

谷底平野及び氾濫平野　自然堤防　旧河道　浜及び河原　礫　人工改変地　崖

第２図　地形分類図

長沢川、さらに宮古湾に注ぎ込む津軽石川など大小の河川がある。それらの河川によって樹枝状に延びた尾根を有する千徳丘陵や八木沢丘陵、豊間根丘陵などが閉伊川低地や津軽石川低地などの低地に面している。河川に面した丘陵の周囲には小起伏山地である黒森山山地や花輪山地、十二神山山地などの山地が広がり、その背後にはサンボトジ頭山地や峠ノ神山山地などの中起伏山地や大起伏山地が連なっている。

第２節　遺跡の位置と立地

牛沢遺跡

牛沢遺跡は、岩手県宮古市大字山口第13地割字牛沢に所在し、ＪＲ山田線宮古駅の北西約2.8㎞の所に位置している。遺跡周辺の地形は黒森山山地に区分され、遺跡は閉伊川の支流である山口川の右岸に広がっている樹枝状に延びる尾根の先端部に立地している。この尾根は南東方向に延びており、その先端部には南北約80m、東西約60mの平坦地が広がっている。平坦地の南には東流して山口川に合流する沢が流れ、比高差約４mの急峻な崖になっている。さらにこの平坦地は北西から南東に向かって傾斜しており、最も高いところで標高約82m、低いところで標高約70mを測る。今回調査した地点は標高約80m～78mで尾根斜面と平坦地との境にあたり、調査する前の表土面で北西から南東へ10～15°、地山面でも20～35°の角度で傾斜している。

現在、牛沢遺跡の立地する平坦地は畑として利用され、縄文土器や石器などの散布状況などから地形の改変は少なく、遺跡は良好に残っていると思われる。

大付遺跡

大付遺跡は宮古市崎山地区に所在し、直線距離で宮古市役所から北北東におよそ3.8㎞、県立宮古病院からおよそ2.8㎞の所にある。崎山地区は小本丘陵と呼ばれる海岸段丘が開析された標高80m～100mを越す丘陵地にあり、東端は緩斜面が続き海岸へ到達する。崎山地区には現在28の遺跡が所在しているが、そのほとんどは小河川や沢によって侵食して開析が進んだ樹枝状の台地上にある。また、崎山地区の遺跡は地質的に砂岩や安山岩質岩石を含む原知山層が基盤層で、堆積土はあまり発達せず、基盤岩が露出した所もみられる。崎山地区の遺跡の一つである大付遺跡は崎山地区の東端、東西500m、南北200mからなる舌状台地に立地しほぼ中央には谷が入り込み、東側を除いては谷により周辺の遺跡と区切られている。

第３節　周辺の遺跡

・牛沢遺跡

山口川流域に位置する牛沢遺跡の周辺には河岸段丘、丘陵上に縄文時代から中世の遺跡が集中している。牛沢遺跡と同じく山口川右岸に位置する遺跡に高根遺跡、赤畑遺跡がある。高根遺跡は牛沢遺跡の南600m先に位置し、縄文時代中期初頭から前半の集落遺跡である。竪穴住居跡が７棟検出された他、貯蔵穴、墓坑が検出されている。遺物では斧状土製品や黒曜石製の石器が出土している。赤畑

番号	遺跡名	主な時代	遺跡の概要
1	牛　沢	縄文（中期～後期）	集落跡
2	大　付	縄文（前期～晩期）、弥生（前・後期）	集落跡、貝塚
3	小平Ⅰ	縄文（中期～後期）	集落跡
4	高根	縄文（中期）	集落跡
5	赤畑	縄文（中期～晩期）、弥生（後北式）、中世	集落跡
6	山口館跡	古代（平安）、中世（戦国）	集落跡（古代）、城館遺跡
7	狐崎	縄文、弥生（前期）、古代（奈良）	集落跡
8	青猿Ⅰ	縄文、古代（平安）	製鉄炉跡（古代）
9	長根Ⅰ	縄文、弥生（後期）、古代（奈良）	古墳群
10	近内中村	縄文（中期～晩期）	集落跡
11	崎山貝塚	縄文（早期～晩期）	集落跡、貝塚、低湿地
12	白石	縄文（中・後期）	集落跡
13	トロノ木Ⅰ	縄文（中期）、近世	集落跡
14	トロノ木Ⅳ	縄文（中期）	集落跡
15	萩沢Ⅱ	縄文（前・中期）、古代	製鉄炉跡・炭窯（時期不明）
16	下在家Ⅰ	縄文（中期）、近世	集落跡
17	早稲栃Ⅱ	縄文（早期～晩期）	集落跡
18	早稲栃Ⅲ	縄文（前・中期）、平安	集落跡

第３図　周辺の遺跡

遺跡は竪穴住居跡などの遺構は検出されないものの、縄文時代中期から晩期の遺物が出土し、弥生時代後期の後北式土器が出土していることが特筆される。また、壁際に６本の柱穴をほぼ等間隔に配置した中世の竪穴住居跡が２棟、柱穴群などが検出されている。山口川左岸に位置する遺跡には小平Ⅰ遺跡がある。小平Ⅰ遺跡は牛沢遺跡の対岸に位置し、縄文時代中期中葉から末葉の竪穴住居跡が11棟検出され、４もしくは５棟に複式炉を伴っている。この他、後期中葉から後葉の土器が出土している。山口川周辺の丘陵上には山口館跡などがある。山口館跡は平成８年から12年の調査で古代の竪穴住居跡が16棟、竪穴状遺構が１棟、中世の竪穴住居跡が２棟、土坑14基検出され、竪穴住居跡からは鐘鈴、三鈷鏡、錫杖頭と呼ばれる密教法具が出土している。また、近年調査された山口館では堀跡、竪穴建物跡、溝跡、工房跡、墓跡が検出され、戦国時代前後の城館遺跡として評価されている。山口川・閉伊川・近内川に囲まれた丘陵上には長根Ⅰ遺跡、青猿Ⅰ遺跡、狐崎遺跡などがある。長根Ⅰ遺跡は沿岸地方で初めて古墳群が調査されたことで知られ、28の古墳と２基の方形周溝墓が調査された。古墳の副葬品として、蕨手刀（６号墳）、直刀（９号墳）、太刀（27号墳）、立鼓刀（28号墳）、ガラス玉（２・16号墳）、錫製釧（９号墳）などが出土している。青猿Ⅰ遺跡は縄文時代の陥し穴状遺構、古代の製鉄炉跡が検出されている。狐崎遺跡では縄文時代の土坑、弥生時代前期の竪穴住居跡１棟、古代の竪穴住居跡５棟が検出され、古代の竪穴住居跡からは奈良時代後半の土師器の他、土製の紡錘車、鉄鏃が出土している。以上の遺跡の他、牛沢遺跡の南西1.5km先に位置する近内川左岸の近内中村遺跡があり、縄文時代中期から晩期の集落跡として知られている。

・大付遺跡

大付遺跡が所在する崎山地区には丘陵上に縄文時代を主体とする遺跡が集中している。崎山地区を代表とする遺跡として国指定史跡の崎山貝塚がある。崎山貝塚は舌状台地に集落跡が、斜面には早期末葉から中期に積み上げられた貝塚が形成され、周辺には低湿地が広がっている。集落跡では中期中葉から後期初頭の遺構が濃密に分布している。崎山貝塚周辺には大付遺跡を含め中小規模の遺跡が所在する。大付遺跡の西に位置する白石遺跡は縄文時代中期末葉から後期前葉の竪穴住居跡が26棟、土坑跡77基などが検出されている。大付遺跡の北西１km先には縄文時代の竪穴住居跡が検出されたトロノ木Ⅰ、トロノ木Ⅳ遺跡が位置する。トロノ木Ⅰ遺跡では複式炉を伴う中期中葉の竪穴住居跡が３棟検出され、トロノ木Ⅳ遺跡では竪穴住居跡に伴うと考えられる石組炉が検出されている。崎山地区の南西、鍬ヶ崎地区には崎山地区ほど遺跡は集中していないが、縄文時代の集落遺跡が調査された早稲栃Ⅱ、早稲栃Ⅲ遺跡などがある。早稲栃Ⅱ遺跡は７次にわたる調査が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡が６棟、晩期から弥生時代前期の竪穴住居跡が２棟、石組炉２基、土坑25基が検出されている。早稲栃Ⅲ遺跡では縄文時代中期、古代の竪穴住居跡が調査されている。この他、古代以降では大付遺跡北西隣の萩沢Ⅱ遺跡で時期不明の製鉄炉跡と炭窯跡が、先のトロノ木Ⅰ遺跡で近世の建物跡・井戸跡が、崎山貝塚の南に位置する下在家Ⅰ遺跡で近世の掘立柱建物跡が７棟検出されている。

牛沢遺跡

第２章　牛沢遺跡

第１節　調査に至る経緯と調査体制

牛沢遺跡は、岩手県宮古市大字山口第13地割字牛沢に所在し、現況は畑地である。平成16年７月16日付けで地権者の摂待孝男氏から倉庫建築に係る「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会があり、それを受けて市教委では平成16年７月22日に現地確認を行った。現地確認の結果、当該地は埋蔵文化財包蔵地「牛沢遺跡」の区域内であり、さらに周辺の畑土から縄文土器が表採されたことから、発掘調査が必要である旨、平成16年７月29日付け教生第208号で地権者に回答した。その後地権者と事前協議を行い、地権者側からの建築場所の変更はできず早急に倉庫建築に着手したいとの意向を受け、市教委で日程調整し、試掘調査を実施することが決定された。地権者から平成16年８月20日付けで文化財保護法第57条の２第１項の規定による「埋蔵文化財発掘の届け出について」が提出され、市教委では平成16年８月31日付け教文第244号で岩手県教育委員会へ進達した。それを受けて岩手県教育委員会では平成16年９月２日付け教生第7-235号「埋蔵文化財の発掘届け出について」を通知し、工事着手前に発掘調査を実施するようにとの指導がなされた。

試掘調査は平成16年９月６日から同月９日まで約28m²を調査し、その結果、竪穴住居跡と思われる落ち込みや縄文時代の遺物包含層が確認された。そのため、調査途中の９月８日に地権者と現地において協議を行い、本調査が必要であること、さらに調査開始は来年度以降になることを伝えた。なお、市教委では岩手県教育委員会に文化財保護法第58条の２第１項の規定による「発掘調査の報告」を行っている。

平成17年度の本調査に先立ち、平成17年３月30日に再度地権者と調査範囲や調査の進め方について協議を行った。本調査は平成17年４月７日から６月24日まで実施され、整理作業は平成17年10月５日から平成18年３月30日まで行い、翌年度の平成18年度は６月６日から本報告書の作成を行った。

調査体制

（～平成17年６月５日）

調査主体	宮古市教育委員会	教育長	中屋定基
調査統括	佐々木剛	宮古市教育委員会	生涯学習課長（～平成17年６月５日）
事務担当	佐藤慎一郎	〃	生涯学習課長補佐兼係長
調査員	竹下將男	〃	生涯学習課主査
	高橋憲太郎	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	鎌田祐二	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	加納由美	〃	生涯学習課主任文化財調査員
	安原誠	〃	生涯学習課文化財調査員
	長谷川真	〃	生涯学習課文化財調査員（調査・報告書担当）
	阿部豊	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員
	江口邦泰	〃	生涯学習課埋蔵文化財発掘調査員

（平成17年６月６日～）

調査主体　宮古市教育委員会　教育長　中屋定基

調査統括　関沢敏　　宮古市教育委員会文化課長

調査員　竹下將男　　〃　　文化課文化財係長

高橋憲太郎　　〃　　文化課文化財係主査

鎌田祐二　　〃　　文化課主任文化財調査員

加納由美　　〃　　文化課主任文化財調査員

安原誠　　〃　　文化課主任文化財調査員

長谷川真　　〃　　文化課文化財調査員（調査・報告書担当）

阿部豊　　〃　　文化課埋蔵文化財発掘調査員

江口邦泰　　〃　　文化課埋蔵文化財発掘調査員

発掘調査及び整理作業にあたり、次の方々から多大なご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（50音順）

〈発掘調査〉

在原正利　扇田正義　大沢裕明　大下義文　坂本晃　島田義道　鈴木祥一　鳥居義文　中居勝二　三浦功　山根保行　米澤豊

〈整理作業〉

大沢裕明　大下義文　越田真理子　鳥居義文　三浦功　村松光子　掘内良子

第２節　調査方法と調査経過

グリッド設定

調査グリッドは調査区周辺に基準となる座標杭がなかったため、試掘調査で用いた基準杭を原点とし任意に設定した。調査内には３ｍ～５ｍ間隔で測量杭を打ち、平面図などを作成する際にはそれらを基準に１ｍ方眼の水糸を張り実測した。

実測・写真撮影・土層注記

遺構平面図の実測は、遺構上に１ｍ方眼の水糸を設定し作図した。平面図の縮尺は１/20を基本とし、炉跡や遺物の出土状況などは１/10で作図した。遺構断面図は１/20を基本とし、炉跡については平面図と同様に１/10で作図した。レベルは周辺の１級登記基準点（№202105）をもとに調査区内に基準高を設定した。写真撮影は35㎜の一眼レフカメラを使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル、カラーフィルムの３種類を用いた。さらに参考資料としてデジタルカメラも併用した。土層注記は「新版標準土色帖」を用いて肉眼による観察を行った。観察項目は色調・土性・しまり・粘性・混入物などである。

整理の方法

遺構の実測図及び全体図は、平面図・断面図相互の整合性についてチェックし、第２原図の作成とトレースを行った。撮影した写真は、現場で記録した写真台帳を基にして白黒フィルムはネガアルバムに、カラースライドファイルはスライドファイルに収納し、それぞれ写真１枚ごとに番号を付した。

出土した遺物は現場での取上げ後、埋蔵文化財調査室で水洗いを行い、袋ごとに番号を付し遺物袋台帳を作成した。この段階で袋内における遺物の接合と注記を行った。接合は遺構ごとに行ったが各遺構内出土の遺物だけでなく、遺構検出面や遺構上面の表土中から出土した遺物についても目を通した。遺物接合が全て終了した時点で遺物台帳を作成し、整理作業の基本台帳とした。

本遺跡から出土した遺物は、大きさ64cm×39cm×14.5cmのコンテナで10箱分あったため、限られた紙数の中では全ての遺物を掲載することはできなかった。そのため、本報告書に掲載されている遺物は、整理作業の中で設定した基準に基づき選別したものである。その選別の基準は以下のとおりである。

a．土器類

土器の総数は、破片数10,705点、重量132.46kgを測る。これらの全てを図化することはできないため、①床面及び柱穴内出土のもの、②口縁部や底部が残存しているもの、③概ね破片の大きさが５cm以上のもの、④時期決定できる特徴的な文様をもつものを抽出し、図化した。図化した遺物は計529点である。

b．石器類

石器類は50点出土し、全点について図化した。

調査経過

〈試掘調査〉

平成16年９月６日に、倉庫建築予定地において市教委と地権者の２者で調査対象範囲について協議を行った後、すぐに試掘調査を開始した。

９月６日　調査対象範囲内に14m×２mのトレンチを設定し、掘り下げを開始した。表土を下げると縄文土器が多数出土し、さらにトレンチ東端からは土坑もしくは竪穴住居跡と思われるプランが検出された。

９月８日　平板を用いてトレンチ平面図を作成し、併せて断面図も作成した。

９月９日　トレンチの埋め戻しを行った。

〈本調査〉

本調査は平成17年３月30日の現地協議を経て、平成17年４月７日から開始した。

４月７日　調査対象範囲を確定させるため、杭を打ち調査区を設定した。さらに試掘調査で用いた基準杭を基に幅50cmの東西ベルト１本、南北ベルトを３本設定し、まず調査区の南壁から北へ２mの範囲でトレンチ状に掘り下げを行った。この部分は畑と尾根裾部との境になっており、さらに水路が流れていた場所になるため、当初は遺構の可能性が薄いと想定していたところになる。そのため、この水路部分を先に調査し、もし遺構などが確認できなかったときは埋め戻しを行い、土置き場にする計画で調査を進めた。

４月８日　調査区南端の２m幅トレンチの掘り下げを行った。トレンチ中央部分から竪穴住居跡のプランが検出され、さらにその周辺の表土中からは縄文土器や石器が多量に出土した。

４月11日　検出された竪穴住居跡プランを調べるためにトレンチを北側へ拡張し、さらにプランの確認を行った。第１号焼土遺構が検出された。

４月12日　当初予定していた調査区南端を土置き場にする計画は、竪穴住居跡プランが検出された

ため断念し、調査区全体の調査に変更した。調査区を覆う表土及び盛土の除去を行った。

4月19日　東西ベルト、南北ベルトの断面図を作成し、ベルトを除去した後、遺構検出を改めて行った。その結果、第1号～4号竪穴住居跡や調査区東側のピット群が検出された。

4月20日　第2号・4号竪穴住居跡の精査を開始した。

4月26日　当初判断しづらかった1号竪穴住居跡のプランが確定したため、精査を開始した。

5月10日　第1号土坑が検出され精査を行った。また、1号竪穴住居跡の掘り下げ途中で、西壁プランから1.5m離れた地点で石囲炉が検出されたため、急遽第5号竪穴住居跡を設定し精査を行った。

5月12日　第2号竪穴住居跡の石囲炉の掘り下げを行った。第1号土坑の平面図を作成した。

5月17日　第2号・4号竪穴住居跡の完掘状況写真を撮影した。第1号竪穴住居跡の埋土から多量に出土した縄文土器の出土状況写真撮影及び遺物の取り上げを行った。調査区西側の遺物包含層は表土を取り除いた時点ですでに検出していたが、その範囲が明確ではなかったため、再度検出作業を行い範囲を確定した。

5月20日　遺物包含層の精査が終了すると、その部分だけが窪地のようになり、さらに周辺の土とも土色が異なるため、竪穴住居跡などの何らかの遺構がまだ下層にあると想定された。そのため、さらに検出作業を行ったが縄文土器が集中して出土する反面、プランがつかめず、土層上面をきれいにしては確認するという作業を何回も繰り返した。

5月24日　遺物包含層下層の検出作業の結果、第6号竪穴住居跡が確認され、十字ベルトを設定し、掘り下げを行った。第1号竪穴住居跡の完掘写真撮影及び平面図作成を行った。

5月26日　第6号竪穴住居跡の複式炉を検出した。第5号竪穴住居跡の精査を開始した。

6月6日　調査区全景写真を撮影した。第4号竪穴住居跡の石囲炉を精査した。

6月10日　第1号・6号竪穴住居跡の複式炉を構成する炉石をはずし掘方を精査している途中で、それらの炉と重複する第5号土坑と第6号土坑を検出した。

6月12日　第5号・6号土坑の掘り下げを行い、土層の注記と断面写真を撮影した。

6月14日　調査区西端・南端・東端の壁において深掘調査を行い、遺構検出面下層の状況や基本土層について観察を行った。

6月21日　調査区壁における断面図や地形図などの図面補足を行い、調査は終了した。

6月23日　調査区内の埋め戻しを開始した。

6月24日　調査区内の埋め戻しが終了。機材を撤収し、現場での作業は終了した。

第3節　基本土層

調査区内堆積土の土層観察は、調査区の東壁、西壁及び南壁で実施した。調査区は東方向に延びる尾根の裾部に位置し、南面する緩斜面となっている。そのため、調査区内の土層は北側においては約20cmと薄く、南側に向かって次第に厚くなり、最も厚いところで約1.7mを測る。以下、基本土層について記述する。

A層　：調査区の南に広がる畑で利用している水路の底面に堆積したもので、硬質で粘性がある。縄文土器が混入している。

B・C・D層：畑で利用している水路のわきにある土手状の盛り土である。黒色及び黒褐色を呈する壌土・埴壌土でやや灰色を帯びている。

E・F・G層：表土である。E層・F層は調査区東側、G層は調査区西側において主に堆積し、G層はさらにG１層・G２層に細別される。E層・F層の土性はともにやや砂質を呈しており、５㎜大の小礫が多量に含まれている。一方、G１層・G２層は硬質で粘性があり、硬くしまっている。

H層　：調査区南壁周辺の中央部分にのみ堆積している層である。黒褐色を呈する埴壌土で、硬質で粘性がある。

I層　：調査区東側に堆積している黒褐色を呈する砂壌土で、砂質が強くぼそぼそしている。I１層・I２層に細別され、I１層には５㎜大のマサ土塊、I２層には５㎜大の小礫が含まれている。

J層　：調査区西側に堆積している層で、暗褐色を呈するシルト質壌土で、しまりがあり硬い。縄文時代後期の遺物包含層の下層に堆積し、第６号竪穴住居跡の検出面より上層に堆積しているため、縄文時代中期末葉～後期前葉にかけて堆積したものと考えられる。

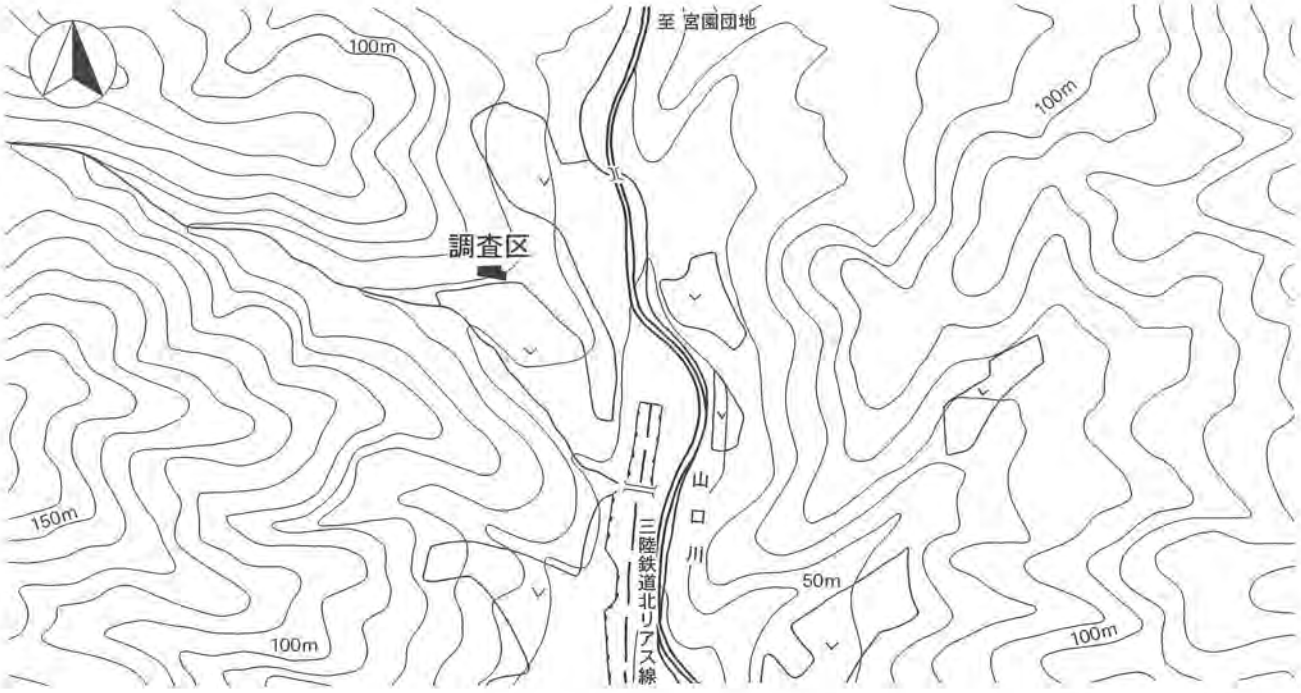
K層　：調査区南壁の中央部分に堆積しており、黒褐色を呈する埴壌土である。第１号・２号竪穴住居跡はこのK層上面で検出されている。また、K層下層であるM層上面では第６号竪穴住居跡が検出されていることから、第１号・２号竪穴住居跡と第６号竪穴住居跡との構築時期には、K層が堆積するまでの時間差を有していると考えられる。人為堆積か自然堆積かについては判断できなかった。

L層　：調査区東側に堆積している層で、この層の上面で第２号竪穴住居跡の東側を検出している。黒褐色を呈する砂質埴壌土で、L層を含めそれより下層から遺物の出土はみられない。

M層　：調査区西側に広く堆積している黒褐色を呈するシルト質埴土で、硬質で粘性がある。第６号竪穴住居跡はM層上面で検出されている。

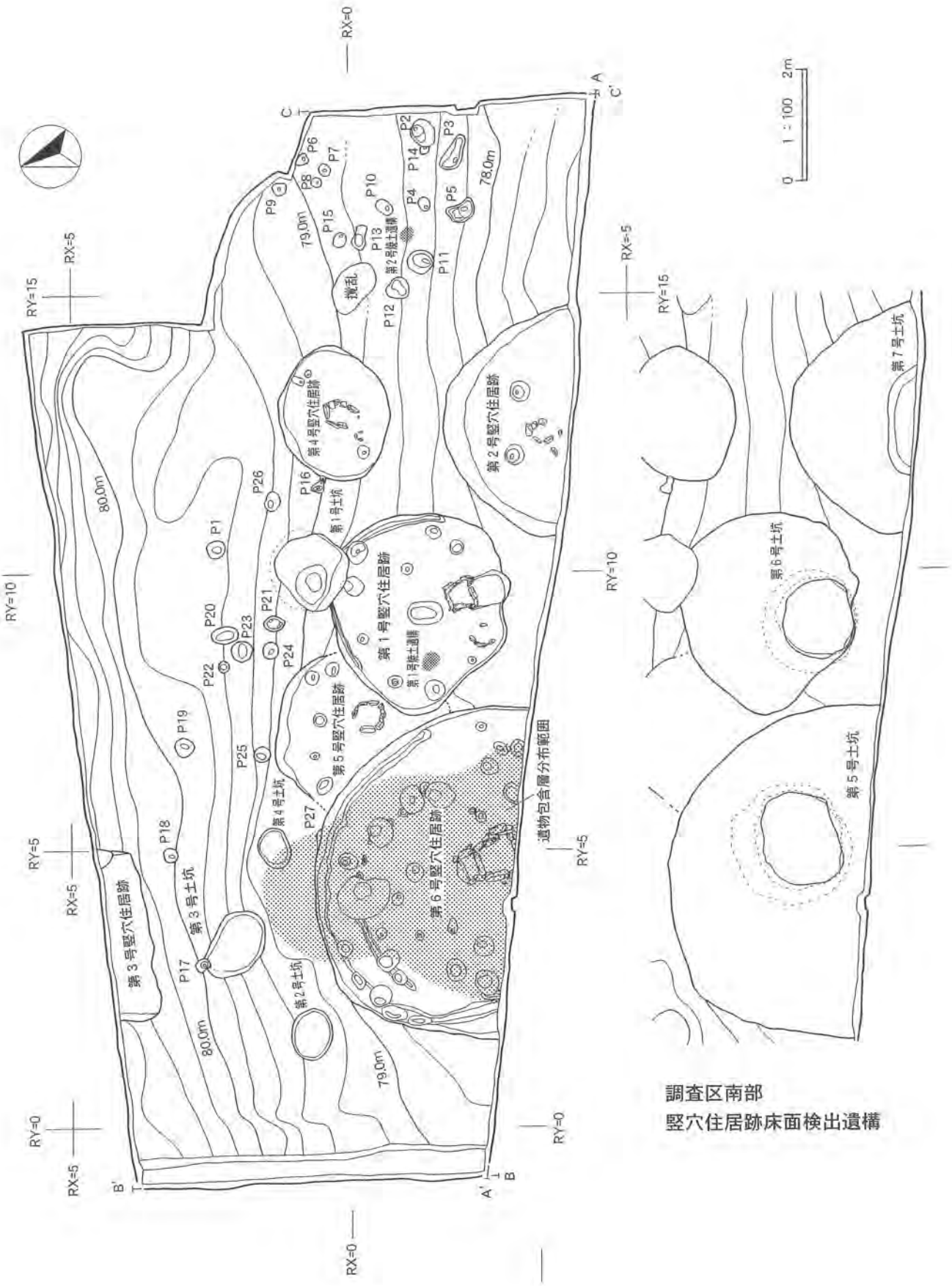
N・O層　：N層は黒褐色を呈するシルト質埴土、O層は暗褐色を呈するシルト質埴土で、ともに硬質で粘性がある。

P・Q層　：地山漸移層である。調査区南側において部分的にみられる。P層は褐色を呈する砂壌土、Q層は褐色を呈するシルト質埴土で、ともに他の土層と比較して明るい土色をもつ。



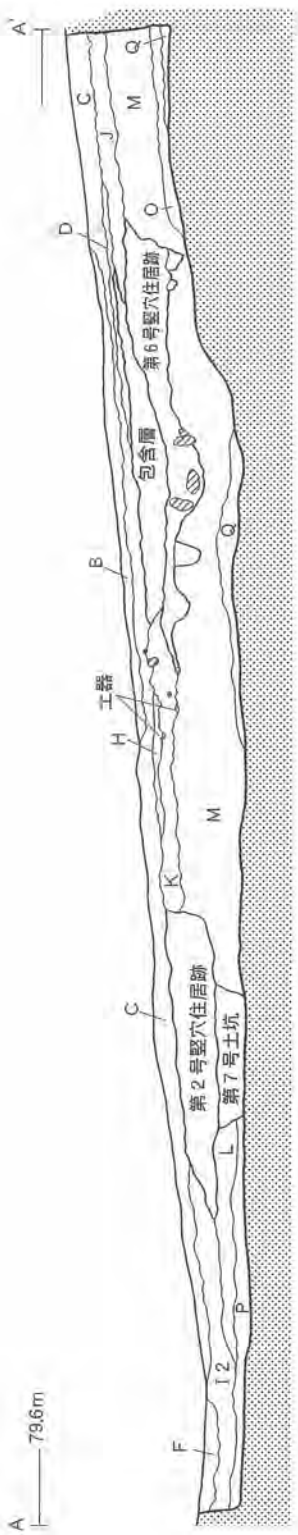
第４図　遺跡周辺の地形

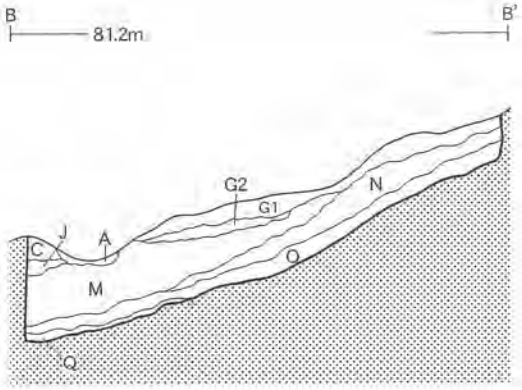
0　1：5,000　200m

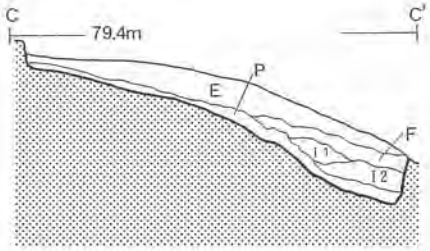


調査区南部
竪穴住居跡床面検出遺構

第5図　調査区全体図







0　1：100　2m

牛沢遺跡　基本土層観察表

層名	基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
A	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土3％塊状	硬質、粘性あり
B	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10％塊状	やや硬質、粘性ややあり
C	10ＹＲ3/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土10％塊状	硬質、粘性あり
D	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ3/2 黒褐色埴壌土5％塊状	やや硬質、粘性ややあり
E	10ＹＲ3/3 暗褐色砂壌土	10YR5/6 黄褐色砂土10％塊状 10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土10％塊状	軟質、粘性ややあり 5mm大の小礫多数
F	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5％塊状	やや硬質、粘性ややあり
G1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土10％塊状 10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色シルト質埴土5％塊状	硬質、粘性あり
G2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5％塊状	硬質、粘性あり
H	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土20％塊状	硬質、粘性あり
I1	10ＹＲ2/3 黒褐色砂壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色砂壌土20％塊状	軟質、粘性ややあり 5mm大のマサ土塊
I2	10ＹＲ2/3 黒褐色砂壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色砂壌土30％塊状	やや硬質、粘性ややあり 5mm大の小礫
J	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土20％塊状 10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土5％塊状	硬質、粘性あり
K	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土5％塊状	硬質、粘性あり 礫
L	10ＹＲ2/2 黒褐色砂質埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色砂質埴壌土15％塊状	硬質、粘性あり
M	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土20％塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒多量
N	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10％塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒少量
O	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土5％塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒少量
P	10ＹＲ4/6 褐色砂壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色砂壌土5％塊状	やや硬質、粘性ややあり
Q	10ＹＲ4/6 褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/4 褐色シルト質埴土10％塊状	硬質、粘性あり

第６図　基本土層　断面図

第４節　遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

竪穴住居跡は６棟検出されている。調査区北端で検出された第３号竪穴住居跡を除き、全て調査区中央部から南部において検出され、標高約78～79mの南面する緩斜面に集中している。出土した土器から全て縄文時代中期末葉に構築された住居跡で、６棟のうち３棟において重複関係がみられたため、その中でもさらに時期差があったと考えられる。

第１号竪穴住居跡（ＳＩ１）（第７～18図、写真図版12～18・63～70・93）

第１号竪穴住居跡は調査区中央部で検出され、**遺構検出面**は基本土層Ｋ層上面である。遺物が集中的に出土するため当初から竪穴住居跡と捉えていたが、プランが不明瞭であったために確定するまで長時間を要した。本住居跡は第５号竪穴住居跡・第１号土坑と重複し、第５号竪穴住居跡よりも新しく、第１号土坑よりも古い。

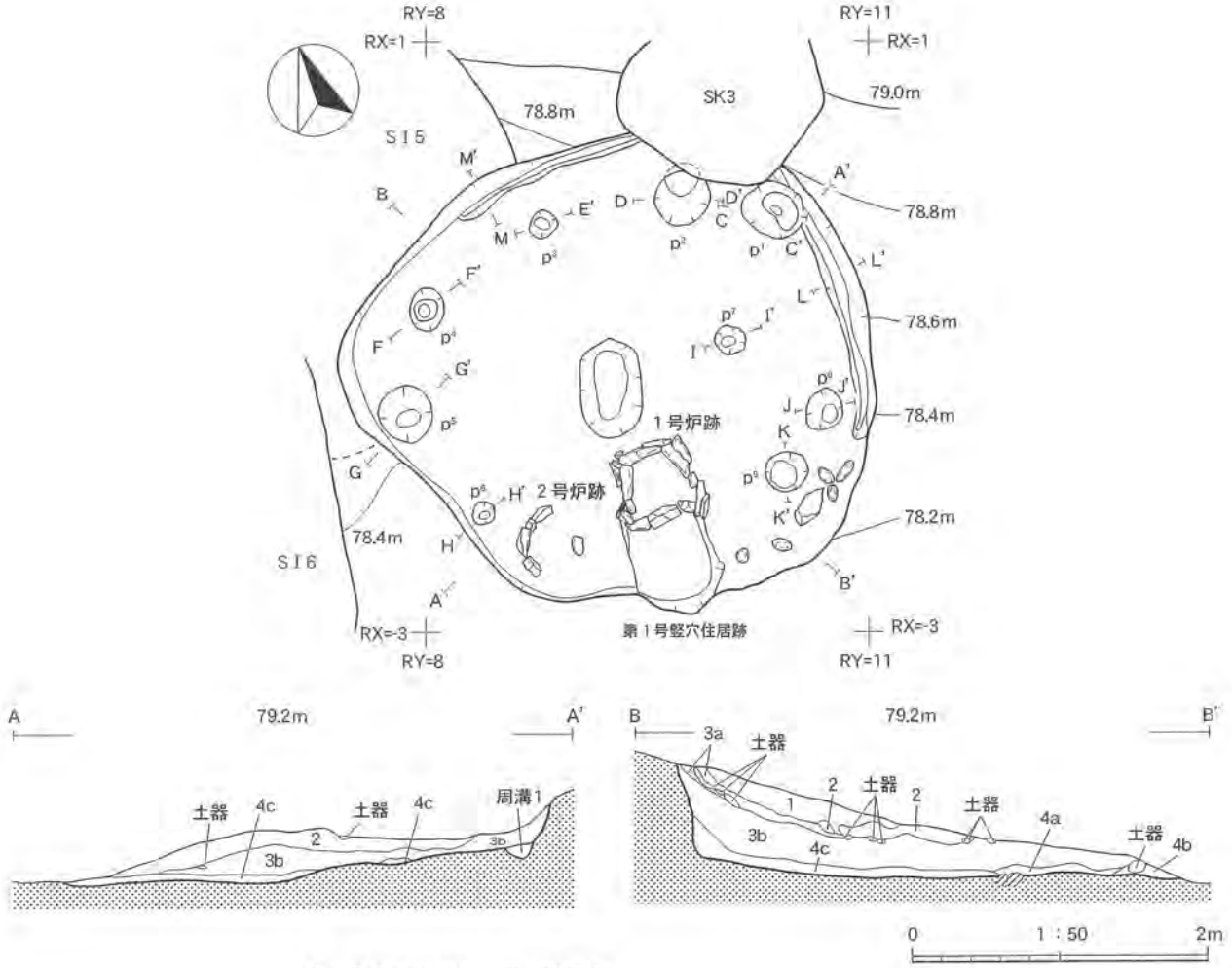
平面形は不整な円形で、西壁の一部がやや張り出している。**規模**は長径3.6m、短径3.24m、検出面から床面までの深さは北西壁において0.6mを測る。北壁は約72°、西壁は約80°と垂直気味に立ち上がるが、東壁及び南壁においては層厚が薄く、壁の立ち上がりは約50°と緩やかに立ち上がる。床面は北から南へ約５°傾斜し、比高差は約28cmである。

堆積土は１～４層に大別され、さらに３ａ・３ｂ層、４ａ～４ｃ層に細別される。堆積土は堆積状況や土性から大きく３つに区分することができる。まず１つは１・２層である。１層は暗褐色を呈する壌土で住居跡の西側にのみ分布し、堆積状況から自然堆積と考えられる。２層はにぶい黄褐色砂壌土を基本土とし、住居跡の検出段階で確認され住居跡プランに重複するように広く分布しているため、当初この土層は他遺構の埋土と想定していた。しかし、ベルトを設定し２層の掘り下げを行い、断面を観察した結果、遺跡周辺の地山であるマサ土の住居跡内への二次堆積であると判断した。層中には遺物や混入物がみられないため、第１号竪穴住居跡廃絶後にできた窪地に何らかの理由で人為的に堆積されたものと考えられる。その時期については不明である。

２つ目は３ａ・３ｂ層である。３ａ層は住居跡の西側にのみ堆積し、それに対して３ｂ層は住居跡のほぼ全域に堆積している。３ａ層は黒色を呈する埴壌土を基本土とし層厚は最大でも約９cmと薄く、３ｂ層は黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし層厚は最大で約30cmと厚い。ともに炭化物が少量含まれている。３ａ・３ｂ層の特徴はその遺物出土状況にある。３ａ層中からは大型の土器（第15図　84）がつぶれた状態で出土しており、さらに３ｂ層からは第１号住居跡の出土遺物の中で最も多量に縄文土器が出土している。これらの土器は床面出土ではないことから、後述する４ａ～４ｃ層堆積後、すなわち住居跡廃絶後にできた窪地を利用した土器の廃棄と推測され、またさらに３ｂ層は層厚が最大で約30cmと他の層と比べて厚いという特徴をもち、出土した土器も同時期に属するものが多いことから、３ｂ層から３ａ層・２層への堆積にはあまり時間の幅はなかったと考えられる。

３つ目は４ａ～４ｃ層である。それぞれ床面の直上に層厚６～８cmで堆積し、住居跡廃絶後に堆積したものと考えられる。堆積状況から自然堆積と思われる。

床面から**ピット**が９基検出されている。平面形は楕円形や円形を呈し、規模は長径16～39cm、短径14～36cm、深さ６～48cmを測る。ｐ２～４・８・９においては柱痕跡がみられるため柱穴であると



第１号竪穴住居跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	1	10YR3/3 暗褐色壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
	2	10YR5/4 にぶい黄褐色砂壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土2%斑状	軟質、粘性ややあり
	3a	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%斑状	炭化物少量
	3b	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%斑状	硬質、粘性あり 炭化物少量
	4a	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 焼土塊、黄褐色粒
	4b	10YR4/4 褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	4c	10YR2/2 黒褐色砂壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり

第７図　第１号竪穴住居跡　平面図・断面図

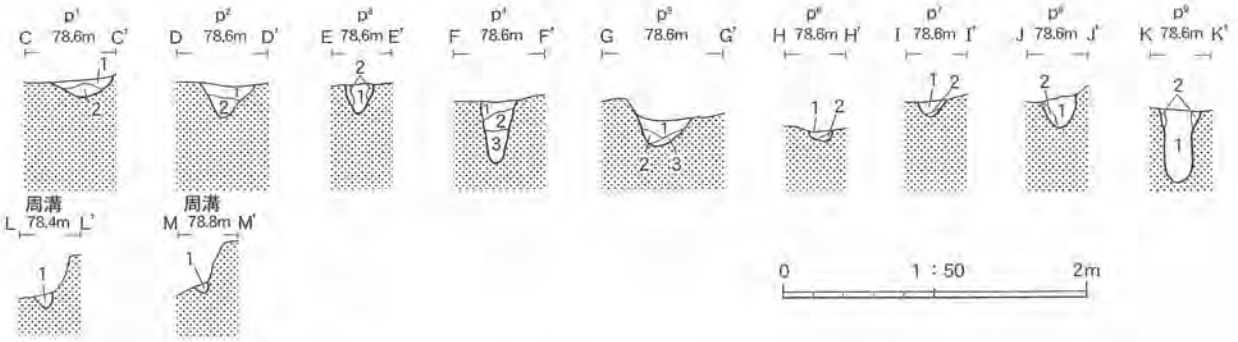
考えられ、またｐ１・５・６についても床面での平面分布から柱穴になると思われる。そのため、合計８本の柱による上屋構造が想定される。床面中央部及び１・２号炉跡周辺には柱穴はみられなかった。

周溝は東壁から北壁にかけて検出されている。北東側の壁は第１号土坑により壊されているため不明である。長さ約3.1ｍの周溝が残存し、幅は５～12cm、深さは４～８cmを測る。

炉跡は、床面の南端部に位置する１号炉跡と、１号炉跡の西約30cmで確認された２号炉跡の２基が検出されている。**１号炉跡**は前庭部付石囲炉で南北軸の長さ58cm、幅61cmを測る南辺を底辺とする台形状を呈する石囲部、そして南北軸の長さ66cm、幅62cmを測る前庭部の２部で構成され、さらに石囲部の北約13cmの位置には長さ66cm、幅42cm、床面からの深さ8.5cmを測る楕円形を呈するピットが確認されている。石囲部は計18個の石を台形状に組み合わせ、南北軸の長さ約35cm、幅40cm、面積約1.4m²の底面を作出している。特に北端を構築する石は長さ31cm×幅27cm×厚さ８cmを測る平板な石を用いている。

１号炉跡の堆積土はＢ～Ｇ層に大別され、さらに14層に細別される。堆積土は堆積状況や土性から大きく３つに区分される。まず１つ目はＢ１～Ｂ４層で、炉の使用が終了した後に堆積した層になる。全て黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし、Ｂ２層には少量の炭化物が含まれる。堆積状況から自然堆積と思われる。２つ目はＣ１・Ｃ２・Ｄ層で、焼土層である。これらは炉の使用時に形成された層になる。Ｃ１層は極暗褐色（7.5ＹＲ2/3）を呈する埴壌土を基本土とし層中には焼土塊が多量に含まれている。そのため、炉跡掘り下げ時において当初はＣ１層のみが炉使用時の焼土層と捉えていたが、しかし、Ｃ１層を掘り下げるとさらに焼土層Ｄ層が検出され、当時の使用面はＤ層上面であることが確認された。Ｄ層は暗褐色（7.5ＹＲ3/4）を呈する埴壌土で層厚約８㎝を測る。その分布範囲は石囲部の北半分に及ぶ。Ｃ２層は石囲部の北端を区画する石の北側において、石に接するように堆積していた。３つ目はＦ１・Ｆ２・Ｇ１～Ｇ５層で、炉の構築土である。これらの堆積の状況から石囲部を構成する石を据えるためにまず大きく掘り込み、そして石を並べた後にＦ１・Ｆ２・Ｇ１～Ｇ５層の土を石の周りに充填したものと思われる。掘方の規模は長軸1.32m、短軸0.83mである。

１号炉跡の北に位置するピットはちょうど本遺構の中央部に位置している。ピット内の堆積土はＡ１・Ａ２層に分けられ、Ａ１層はピット全域に堆積し、Ａ２層は南壁立ち上がりにおいて三角堆積の様相を呈している。堆積土の断面観察から炉の構築土であるＦ１・Ｆ２層を切ってピットが掘られていることが確認され、炉使用時、もしくは炉廃棄後に構築された可能性が考えられる。堆積土中からは遺物が出土していないため明確に時期を特定できないが、住居や炉の廃絶後に堆積したと思われる柱穴の堆積土とは全く異なり、Ａ１層中には地山であるマサ土が塊状になったものが含まれていたため、炉の使用時において何らかの目的で同時に構築され、さらに炉廃棄時には人為的に埋められたものと推測される。



第１号竪穴住居跡　ピット　土層観察表

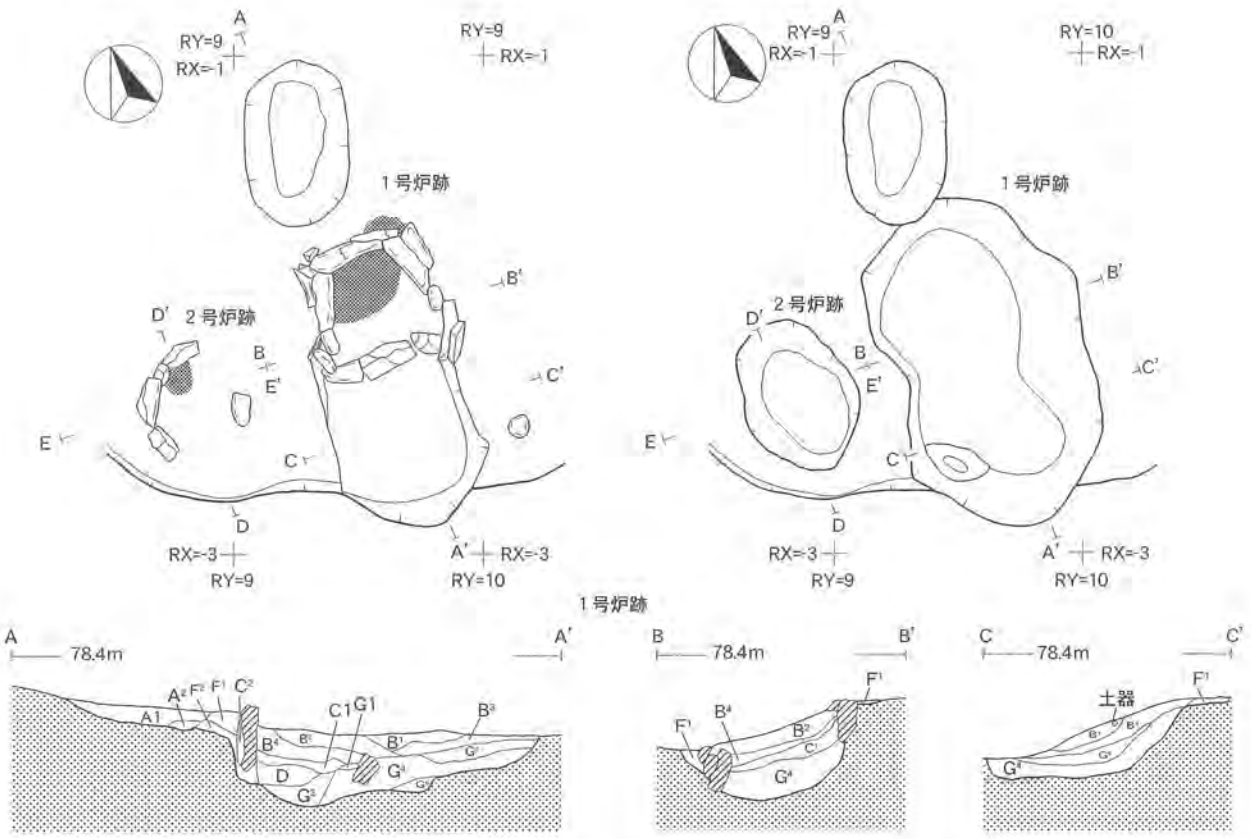
属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p 1 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量、2mm大の小礫
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり マサ土塊ごく微量
p 2 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性なし
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ4/6 褐色埴壌土30%塊状	やや硬質、粘性なし
p 3 埋土	1	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ4/6 褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 黄褐色粒少量
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
p 4 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の小礫少量
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土20%塊状	やや硬質、粘性なし
	3	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/2 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
p 5 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 2mm大の小礫
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	3	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の小礫

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p 6 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の小礫
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
p 7 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土5%塊状・斑状	やや硬質、粘性ややあり
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の小礫
p 8 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
p 9 柱穴	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性なし
p 9 埋土	2	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり

第１号竪穴住居跡　周溝　土層観察表

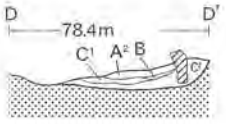
属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
周溝 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の小礫、真砂土塊

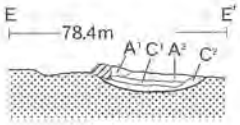
第８図　第１号竪穴住居跡　ピット断面図



第１号竪穴住居跡　１号炉跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	A 1	10Y R3/4 暗褐色シルト質埴土	10Y R2/3 黒褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 10Y R6/6 明黄褐色埴壌土塊状粒
	A 2	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	10Y R5/6 黄褐色埴壌土1%塊状・斑状	やや硬質、粘性ややあり
炉内堆積土	B 1	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	10Y R4/4 褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	B 2	10Y R2/2 黒褐色埴壌土	10Y R2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量
	B 3	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	10Y R4/6 褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	B 4	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	7.5Y R2/3 極暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性なし
焼土塊混入土	C 1	7.5Y R2/3 極暗褐色埴壌土	7.5Y R3/2 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	C 2	5Y R4/4 にぶい赤褐色シルト質埴土	7.5Y R4/4 褐色シルト質埴土1%塊状	やや硬質、粘性あり
焼土	D	7.5Y R3/4 暗褐色埴壌土	5Y R4/6 赤褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
炉構築土	F 1	10Y R4/6 褐色シルト質埴土	10Y R4/4 褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	F 2	10Y R5/6 黄褐色埴壌土	10Y R4/6 褐色埴壌土30%塊状	やや硬質、粘性ややあり
炉構築土	G 1	10Y R2/2 黒褐色埴壌土	7.5Y R2/3 極暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性なし
	G 2	10Y R2/2 黒褐色シルト質埴土	10Y R2/1 黒色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒多量
	G 3	7.5Y R3/2 黒褐色埴壌土	10Y R3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性あり
	G 4	10Y R2/2 黒褐色埴壌土	10Y R2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	G 5	10Y R2/2 黒褐色埴壌土	10Y R2/1 黒色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量





第１号竪穴住居跡　２号炉跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内堆積土	A 1	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	10Y R3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量
	A 2	7.5Y R2/3 極暗褐色埴壌土	10Y R2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
焼土	B	7.5Y R3/4 暗褐色埴壌土	7.5Y R2/3 極暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
炉構築土	C 1	10Y R2/2 黒褐色埴壌土	10Y R3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒微量
	C 2	10Y R2/3 黒褐色埴壌土	10Y R2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量

0　1：30　1m

第９図　第１号竪穴住居跡　炉跡　平面図・断面図

１号炉跡の西側で確認された**２号炉跡**は南北軸の長さ49cm、幅45cmを測る石囲炉で、５個の炉石を用いて不整円形に配し構築されている。しかし、西側の炉石４個と東側の炉石１個の間に炉石は確認されず、途中で分断された円形になっている。炉石を据えるための掘方も確認され、南北64cm、東西45cmと南北を長軸とする楕円形を呈している。

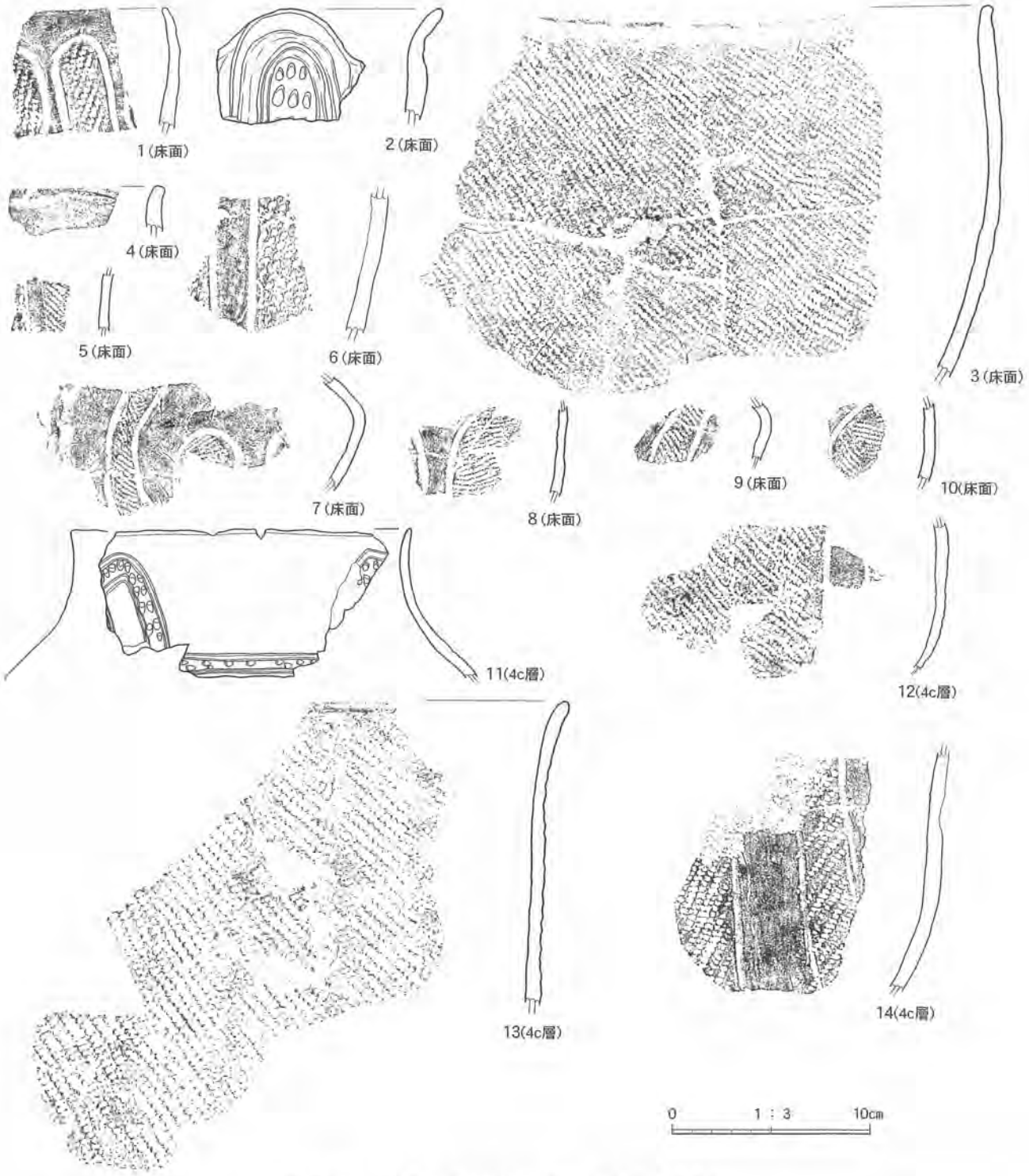
２号炉跡の堆積土はＡ～Ｃ層に分けられ、さらにＡ層はＡ１・Ａ２層、Ｃ層はＣ１・Ｃ２層に細別される。Ａ１・Ａ２層は、炉の使用が終了した後に堆積しているもので、極暗褐色（7.5ＹＲ2/3）を呈する埴壌土を基本土とし焼土塊が含まれている。Ｂ層は焼土層で、締まりはやや硬質で粘性はややある。Ｃ１・Ｃ２層は炉の構築土で炉石の周りに充填されている。

遺物は縄文土器・石鏃・石錐・石匙・掻器・削器状石器・小形磨製石斧が出土している。

縄文土器は2,247点出土し、その中で117点を図示した。１～10は床面から出土したもので、１～４は口縁部の破片である。１の口縁部は内湾気味に立ち上がり胴部には縦位の縄文帯が施文され、縄文帯の中にはＲＬＲ複節縄文がみられる。２は口縁部突起部分の破片で∩字形の隆帯及び沈線がみられ、沈線で区画された中には下方からの刺突が施されている。３は胴部から口縁部にかけて残存し、口縁部は直線的に立ち上がり口唇部において縁を外側に折り返している。ＬＲ単節縄文を地文とする。４は外側に向かって緩やかに開く口縁部の破片で、文様はみられない。５・６は縦位の沈線により地文である縄文を区画し沈線と沈線の間の地文を磨り消したもので、５はＬＲ単節縄文、６はＲＬＲ複節縄文を地文とする。７～10は１号炉跡東側の床面から出土したもので、直線や曲線を描く沈線により縄文帯を作り出し、縄文帯の中には地文であるＬＲ単節縄文が施文されている。７～10は胎土や文様などから同一個体と考えられる。

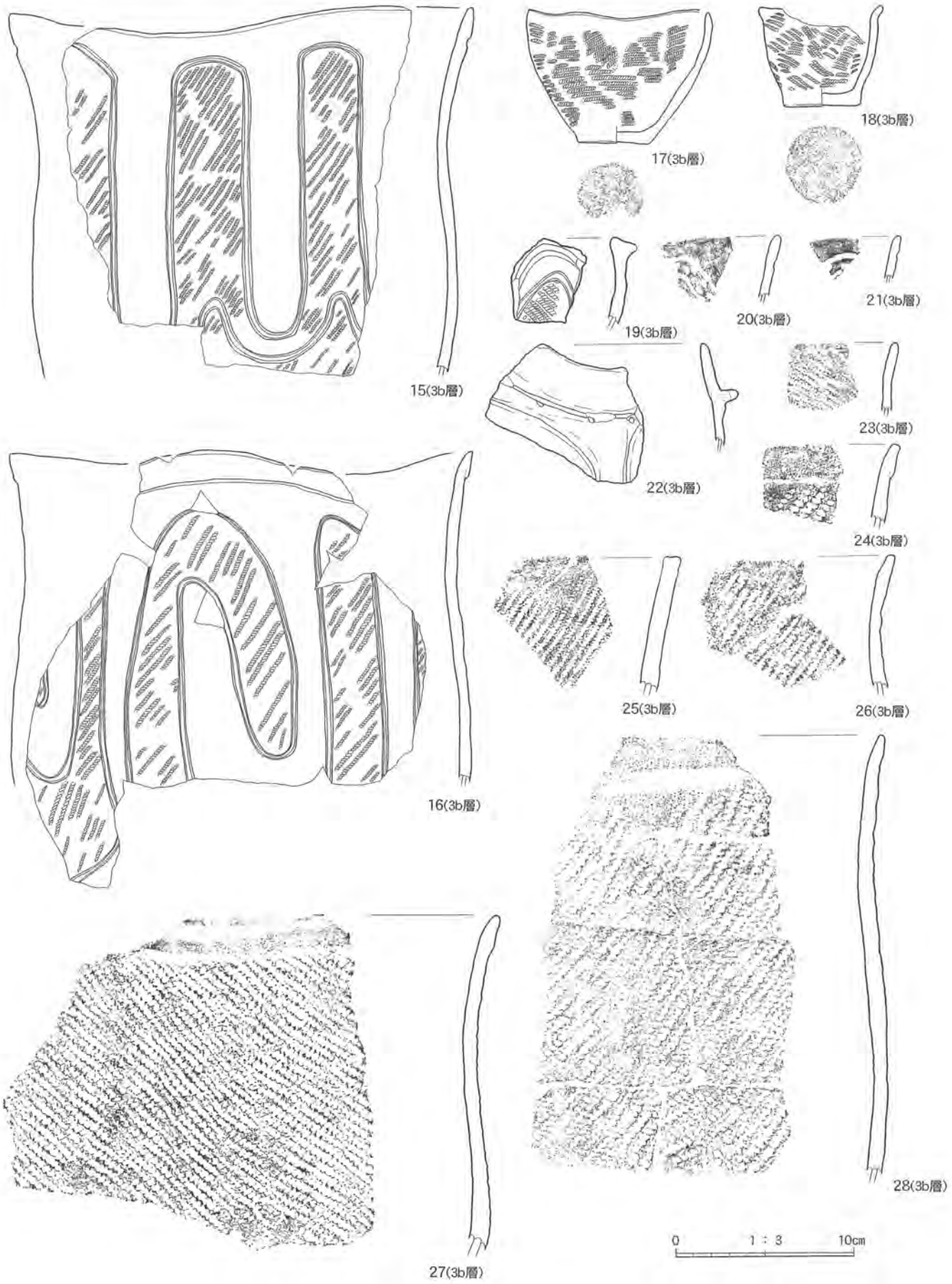
11～14は４ｃ層から出土したもので、11・13は胴部から口縁部にかけて残存している。11は大きく膨らんだ胴部から口縁部にかけてすぼまっていき、口唇部は緩やかに外反する。器厚は４～５㎜と薄く、∩字形や横位の沈線が２条１単位として引かれ、その間には長さ４～６㎜の刺突列が２列ないし１列施される。13の胴部は膨らまず口縁部に向かって直線的に立ち上がり、口縁部は外側に向かって緩やかに開く。ＬＲ単節縄文を地文とする。12・14は胴部の破片で、ともに縦位の沈線により区画された縄文帯が施文されている。12はＬＲ単節縄文、14はＲＬ単節縄文を地文とし、14の外面の一部には剥離がみられる。

15～76は３ｂ層から出土したもので、この層は第１号竪穴住居跡の埋土中で最も遺物出土量が多い。15・16は胴部から口縁部にかけて残存している土器で、口縁部は外側に向かって緩やかに開き波状口縁を呈する。胴部にはＣ字形や縦位の縄文帯が施文され、特に15は胴部中央において縦位の縄文帯が横に連結している。ともにＲＬ単節縄文を地文とする。17は口径10.1cm、器高7.5cm、底径４cmを測る小型土器で、口縁部は内湾気味に立ち上がり外面にはＬＲ単節縄文が施文されている。18は口径７cm、器高5.6cm、底径4.1cmを測る小型土器で、胴部はあまり膨らまず口縁部は外側に向かって緩やかに開く。17と同様、ＬＲ単節縄文が器面全体に施文されている。19～35は口縁部の破片である。19は波状口縁の一部と思われる大きく手前に突き出た隆帯と∩字形に引かれた沈線で縄文帯を描き出している。ＬＲ単節縄文を地文とする。20・21は直線的に立ち上がる口縁部で、∩字形に沈線が引かれその区画された中には刺突がみられる。22は波状口縁の一部で、前面に約0.8cm突き出た横位の隆帯と∩字形の沈線がみられ、隆帯には３箇所において径約３㎜の円形の穿孔が施されている。23～35はＲＬ単節縄文（24～26・28・30・31）、ＬＲ単節縄文（23・27・29・32・34・35）、ＲＬＲ複節縄文（33）

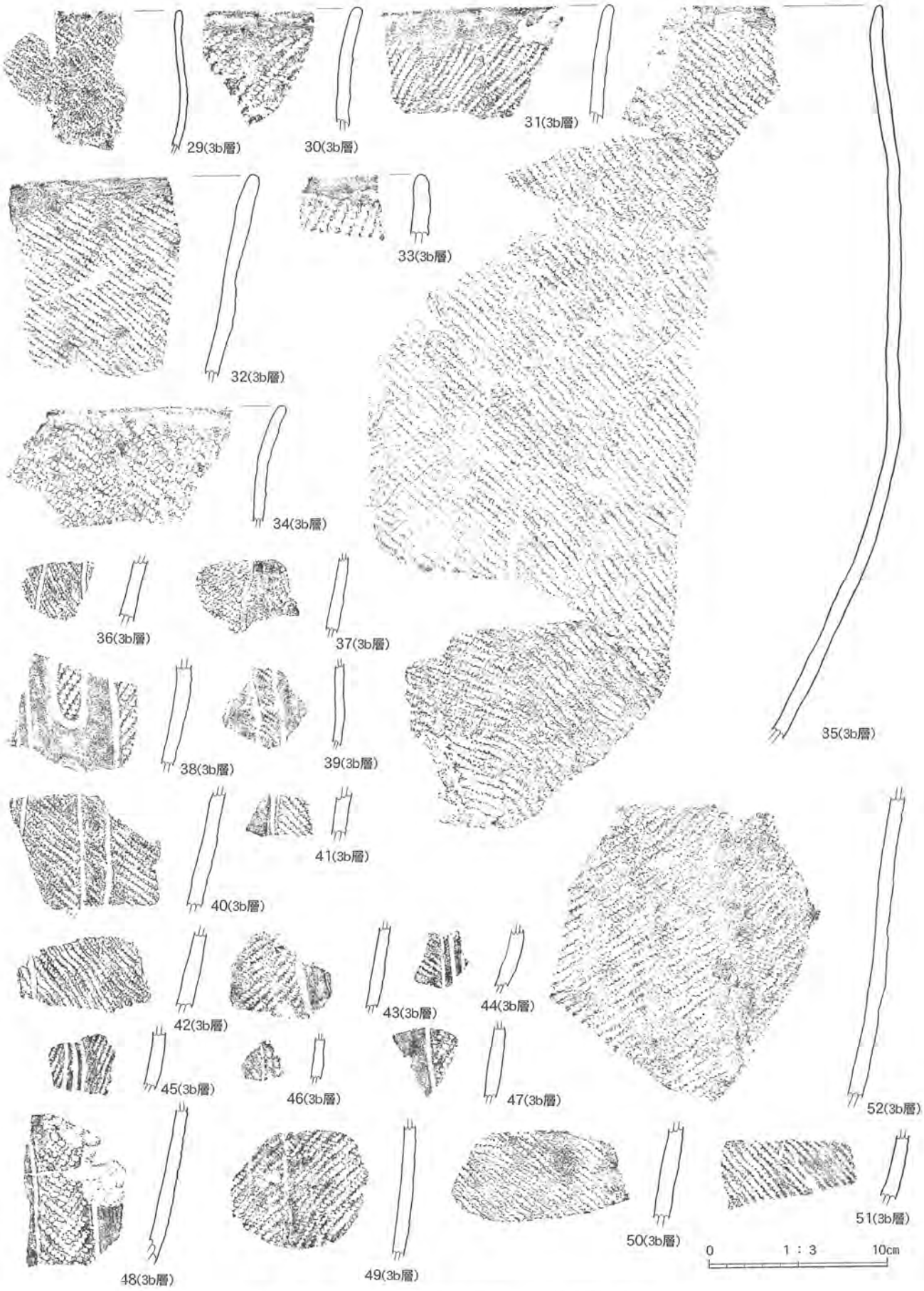


第10図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（１）

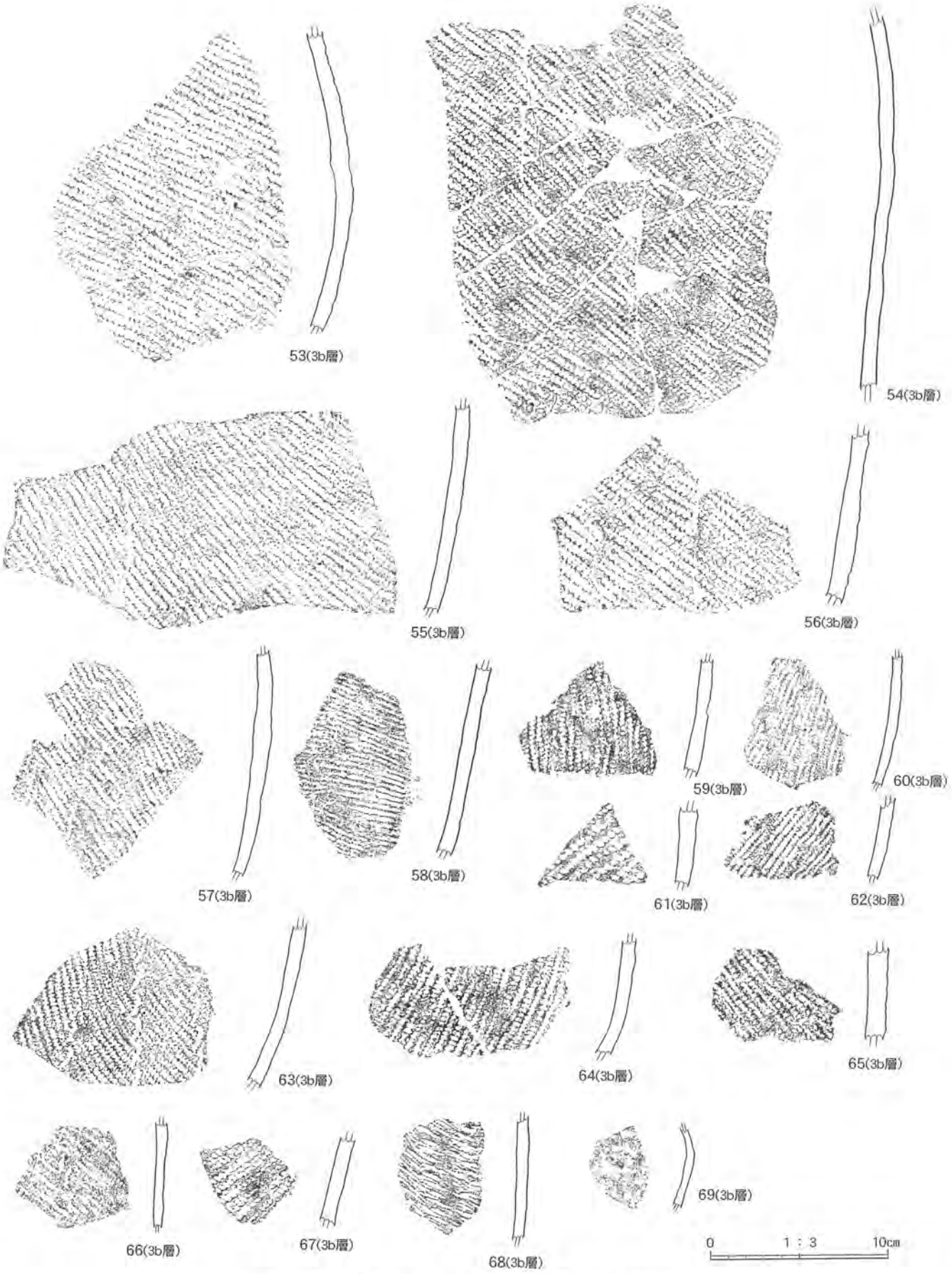
を地文とし、外側に向かって緩やかに開く口縁部である。その中でも35は胴部から口縁部まで残存しているもので、胴部はあまり膨らまず口縁部に向かってやや内側にすぼまったあと口唇部は直線的に立ち上がっている。36～48は胴部の破片で、全て沈線及び隆帯により区画された縦位の縄文帯が施文されている。46・47には刺突痕がみられる。49～70は胴部の破片でＲＬ単節縄文（49・52・59～62・64・67・70)、ＬＲ単節縄文（50・51・53～58・63・65・66）を地文とする。68は不明で、69はナデ調



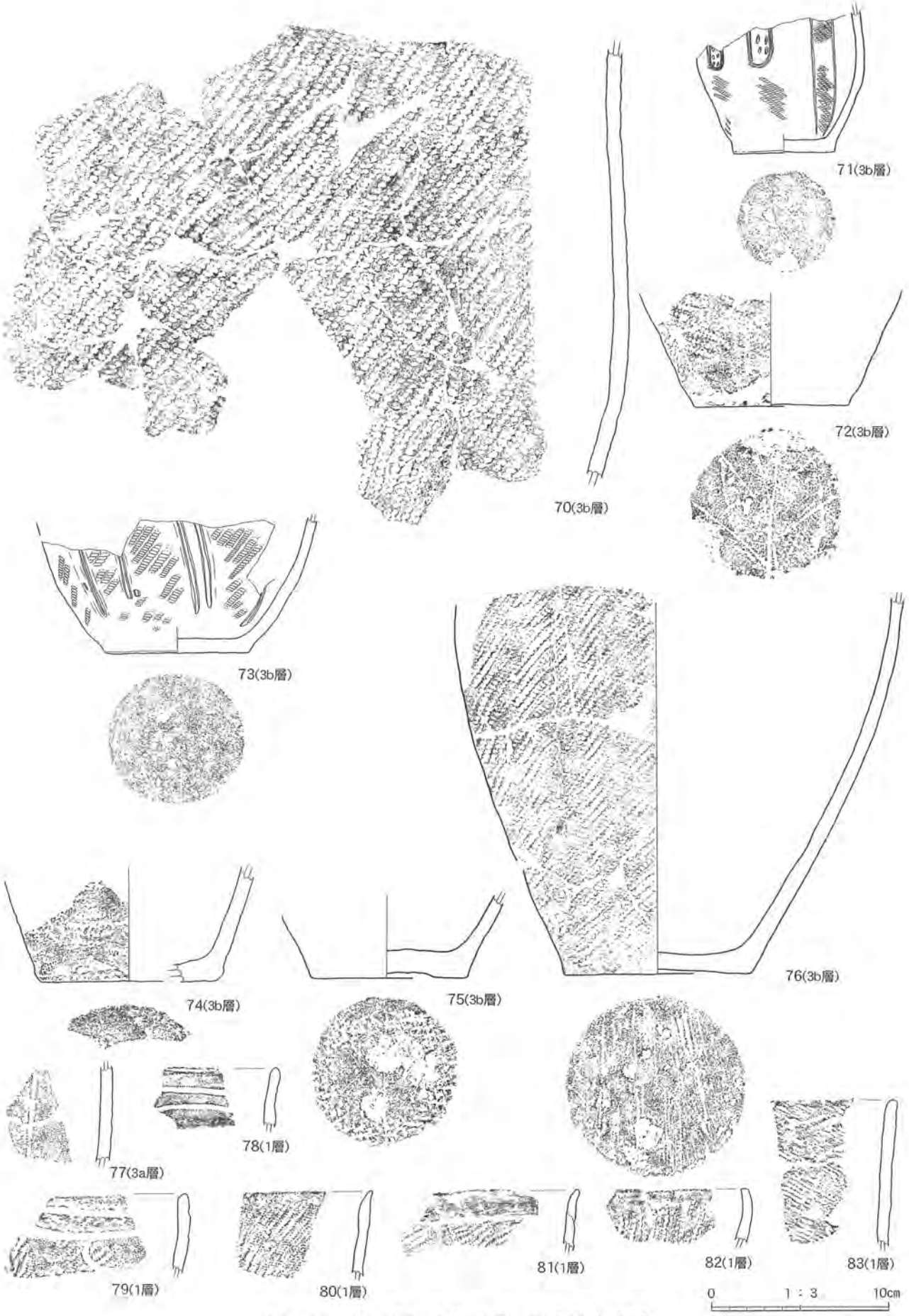
第11図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（２）



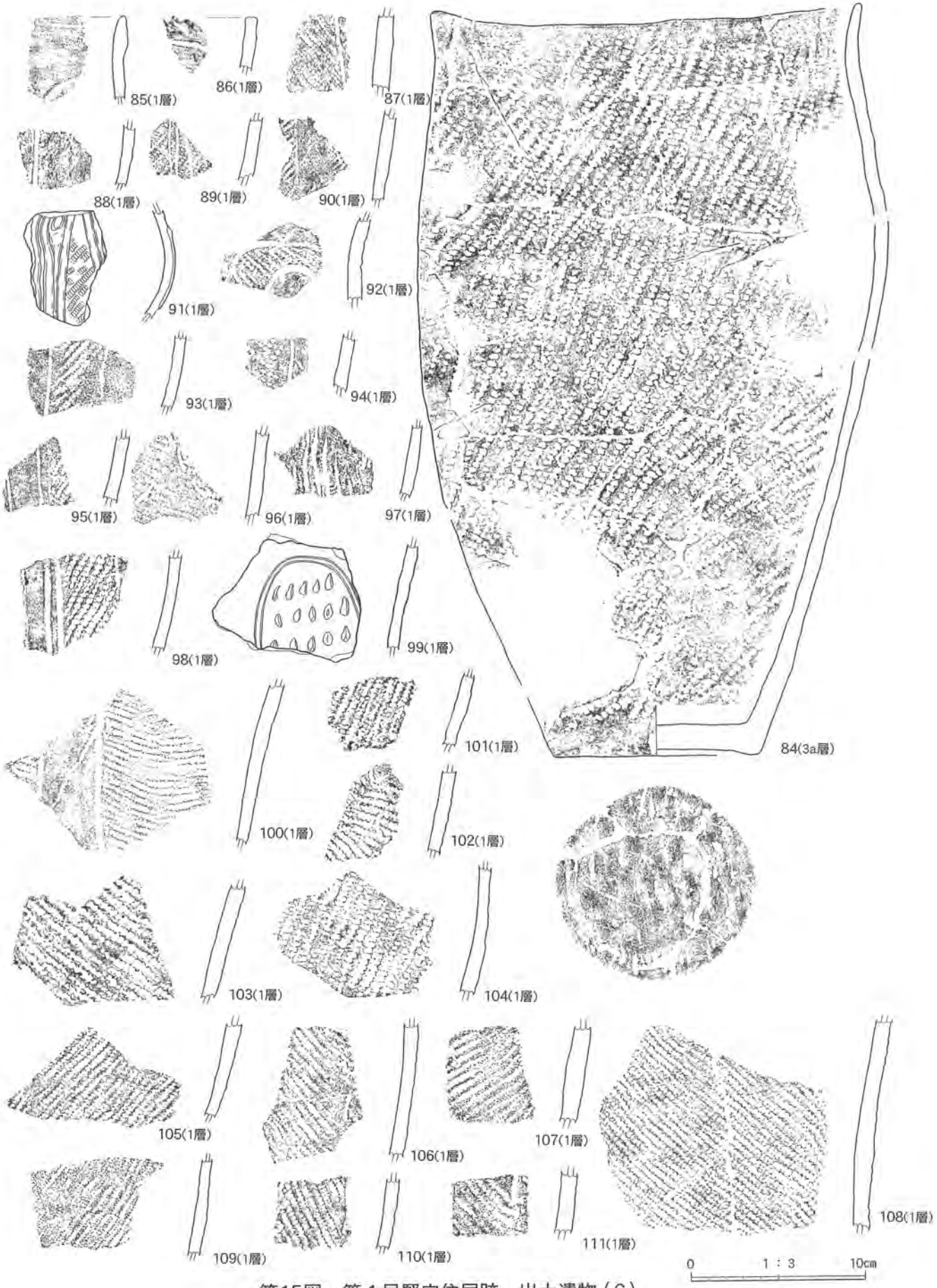
第12図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（３）



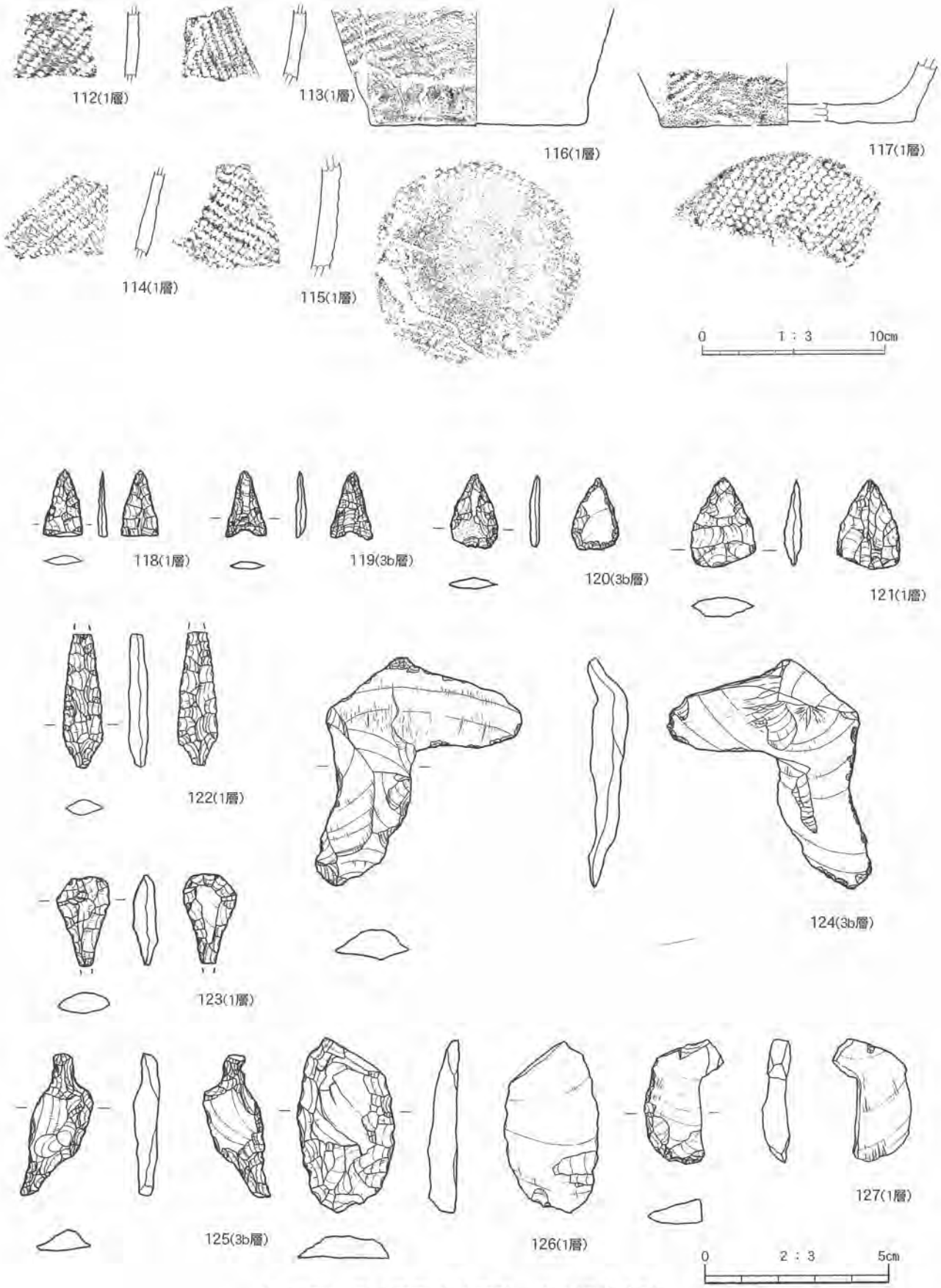
第13図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（４）



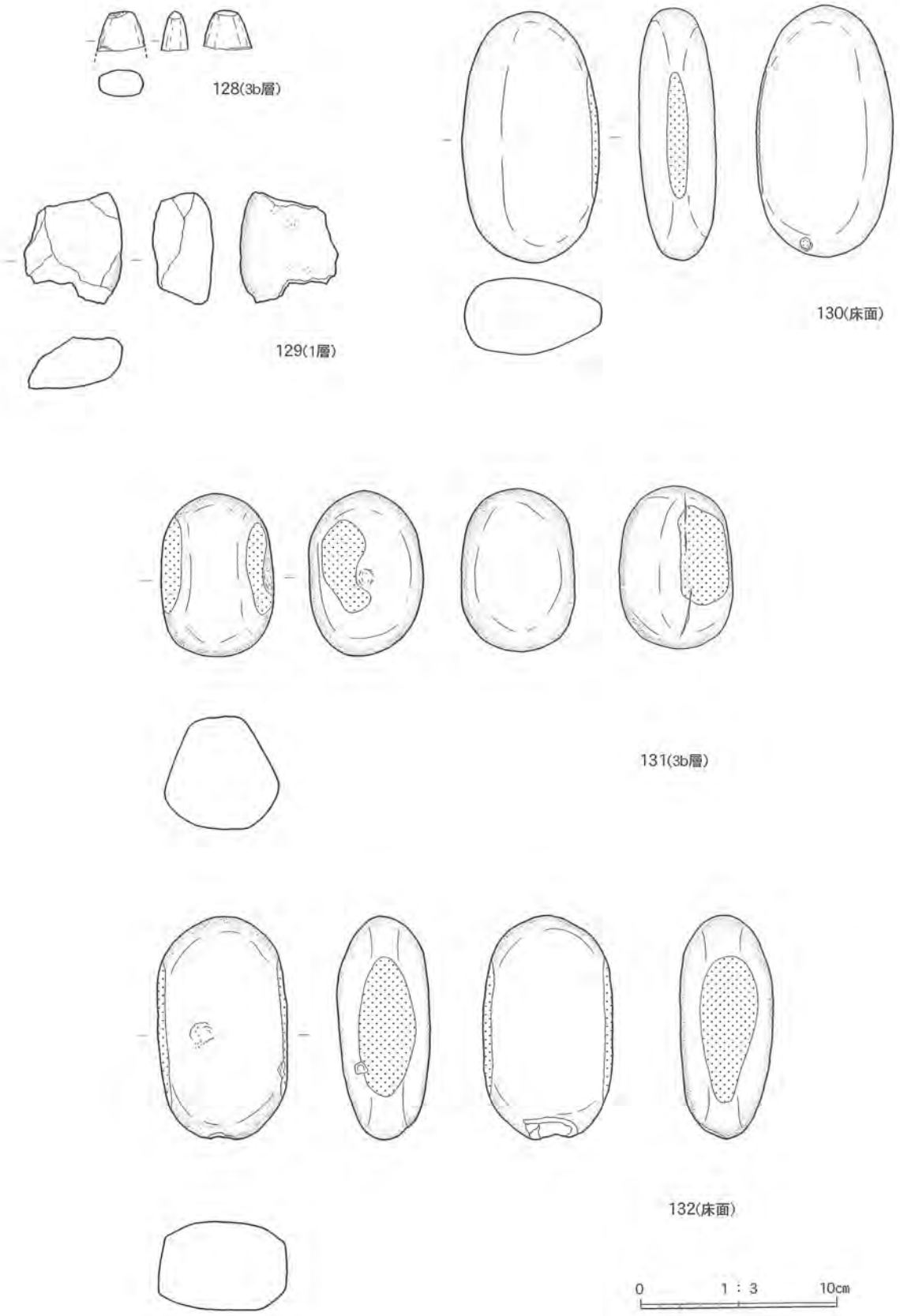
第14図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（５）



第15図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（６）



第16図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（７）



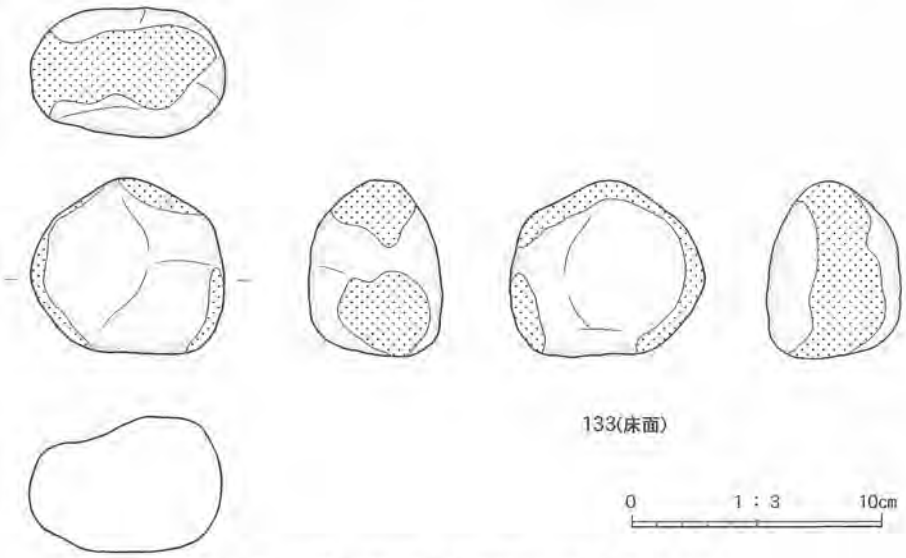
第17図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（８）

整である。63・66には結節がみられる。71～76は底部が残存する破片で、木葉痕やナデ調整がみられ、76にはナデの方向が分かるほど明瞭にナデの痕跡が観察される。71は底径5.8cmを測り、胴部には沈線で区画された縦位の縄文帯が施文されている。縄文帯の中はＬＲ単節縄文及び下方からの刺突が施されている。73の胴部の文様は２本１単位の隆帯が垂下し、その周りにはＲＬ単節縄文の地文が残る。一部隆帯が剥離している。

77・84は３ａ層から出土したものである。77は縦位の沈線が引かれているがその周囲は摩滅しているため詳細は不明である。84は底部から口縁部まで残存している大型の土器で、３ａ層中からつぶれた状態で出土している。口径24.6cm、器高43.1cm、底径11.7cmを測り、胴部はあまり膨らまず、口縁部は外側に向かって直線的に開く。ＲＬ単節縄文を地文とする。

78～83・85～117は１層から出土したものである。78～83・85・86は口縁部の破片である。78・79は外側に向かって緩やかに開き、口唇部下端には横位の沈線が引かれ、85・86は直線的に立ち上がり一部∩字形の沈線が観察される。80～83はＲＬ単節縄文（80・82）、ＬＲ単節縄文（81）、Ｌ無節縄文（83）を地文とする。87～100は縦位の沈線及び隆帯によって縄文帯を描出しているものである。99の∩字形に引かれた沈線により区画された中には上方からの刺突がみられ、横方向に５箇所１単位で３列が残存している。101～115はＲＬ単節縄文（101・104～107・109・112～114）、ＬＲ単節縄文（102・103・108・110・111・115）を地文とする。116・117は底部の破片で、ともに網代痕が残っている。

118～133は石器で、118～122は石鏃である。118は基部が欠損しているため、茎部の有無など形態は不明である。両面に丁寧な調整剥離が施されている。119は凹基無茎鏃で、118と同様両面に細かな調整剥離が施されている。120は凹基無茎鏃で抉入の先端部が欠損しているため基部が丸みを帯びているように見える。腹面に自然面が残存し、背面には一次剥離面が多く残されている。121は凸基無茎鏃で一部細部調整される他は大まかな調整剥離が施されている。122は凸基有茎鏃で先端部が欠損している。幅は狭いが長さがあり、残存値ではあるが長さ3.7cmを測る。123は石錐で、不整円形のつまみ状の頭部が残存し先端部が欠損している。頭部の背面に一次剥離面が残る。124は削器状の石器で、「く」字形に屈曲した剥片の縁辺に細部調整剥離がみられる。調整剥離は両面に施されている。125は縦形の石匙で先端部が欠損している。先端部は棒状に細くなっており両面において一次剥離面



第18図　第１号竪穴住居跡　出土遺物（９）

を残さずに調整剥離が施されている。つまみ部周辺にはアスファルト様の黒色を呈する付着物がみられる。126は掻器で、腹面中央部に一次剥離面を大きく残し縁辺部において細部調整がなされているため断面形は台形状を呈している。摩滅がひどく剥離の切り合いなどは不明瞭である。127は片縁部が欠損しているため逆L字形に屈曲した形態となっている。縁辺部に細部調整がみられ、掻器と思われる。128は小形磨製石斧で、先端部のみ残存している。両縁部には面取りをした痕跡が残っている。129は石皿の欠損品で片面に機能面がみられる。130～133は磨石である。130は片側縁部に磨面をもち、131は両側縁部に磨面をもつ。132は両縁部に磨面をもち、側縁の一部に敲打痕がみられる。133は不整な球形を呈する磨石で、縁部に沿って磨面がみられる。

第１号竪穴住居跡は不整な円形を呈し炉跡を有する８本柱の住居跡と考えられ、時期は他遺構との重複関係や胴部に縦位の縄文帯が施文されている土器が床面から出土していることなどから縄文時代中期末葉に属すると考えられる。

第２号竪穴住居跡（ＳＩ２）（第19～22図、写真図版19～23・70～72・93）

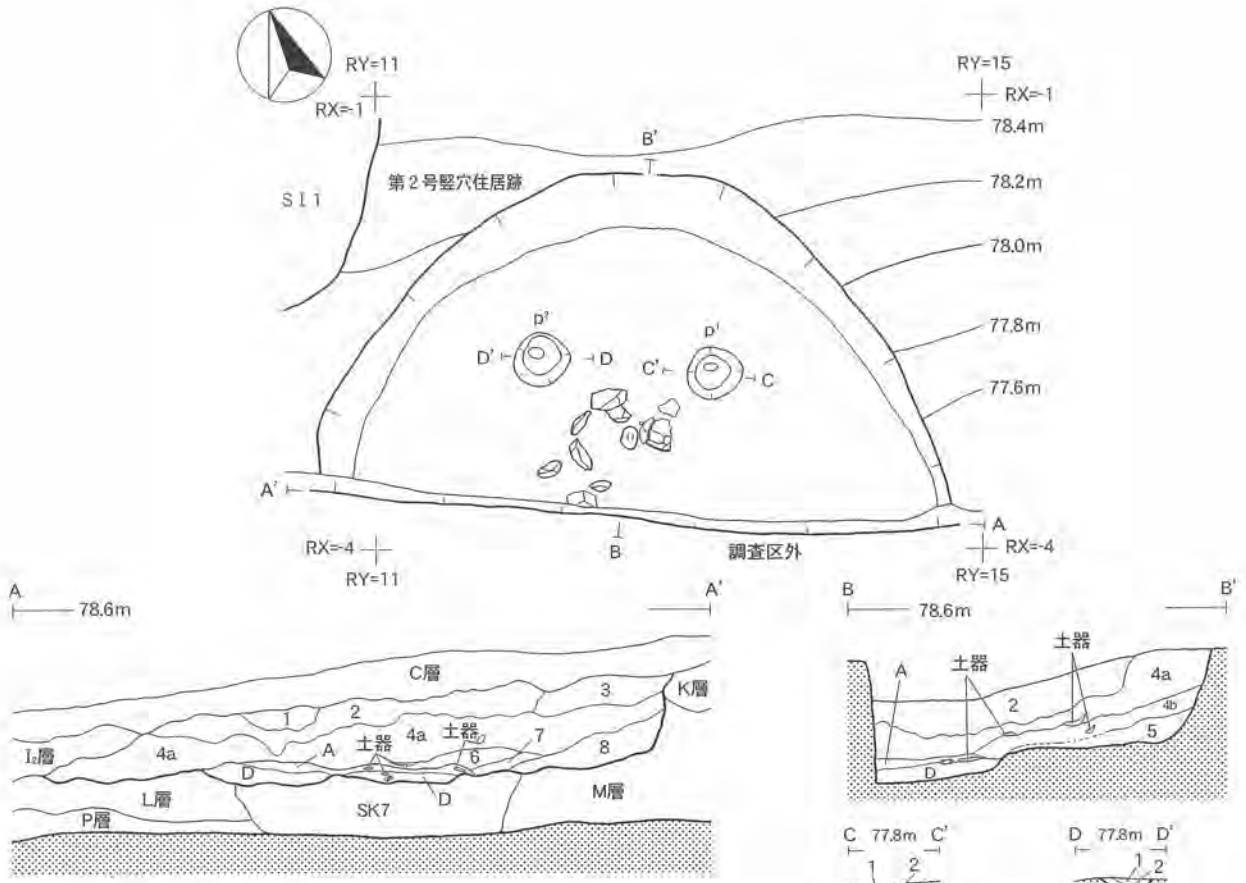
第２号竪穴住居跡は調査区南壁の中央からやや東寄りの地点、第１号竪穴住居跡の約0.5m東で検出され、**遺構検出面**は基本土層Ｋ層及びＬ層である。第７号土坑と重複関係にあり、石囲炉の掘方下層から第７号土坑が検出されていることから、本住居跡の方が新しい。

今回の調査では住居跡北側の一部分のみを検出し、他の部分は調査区外に延びている。そのため、全体の**平面形**は不明であるが、検出された形態から円形を呈していると推測される。**規模**は残存値ではあるが、東西軸で4.18m、南北軸で2.21m、検出面から床面までの深さは北壁で0.62cmを測る。壁は北壁50°、西壁70°と床面から急激に立ち上がるが、それに対して東壁は20°と緩やかに立ち上がり、検出面からの掘り込みも約５cmと浅い。床面は北から南へ約４°傾斜している。

堆積土は１～８層に分けられ、４層はさらに４ａ・４ｂ層に細別される。１～３層は住居跡上層に堆積し遺構検出面で確認された層である。これらの層の平面的な分布が明瞭ではなかったため、住居跡の検出時においてプランを確定するのに時間を要した。４ａ・４ｂ層はともに黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし縄文土器が多量に出土する層である。特に４ａ層は住居跡全域に堆積し層厚も最大約23cmを測る。５～８層は住居跡の壁際において三角堆積の様相を呈しており、壁や住居跡周辺からの崩落土の可能性が考えられる。

炉跡は床面の北端から1.05m、東端から1.95m、西端から1.35mの位置で確認され、推定ではあるがほぼ床面の中央部に位置すると思われる。長さ59cm、幅44cmの楕円形を呈し、北東－南西方向を長軸とする石囲炉である。５個の炉石で構築され冂字状に配置されている。炉の南側には炉石はなく、また炉石が抜き取られた痕跡もみられなかった。炉跡の南西10cmの位置には径14cm×８cmと径18cm×９cmを測る２個の石が出土しているが、これらの石が石囲炉を構築したものか明確に判断できなかった。炉の底面の規模は長さ34cm、幅31cmを図り、面積は約1.05m²である。

炉跡の堆積土はＡ～Ｄ層の４層に大別され、Ｂ層はさらにＢ１・Ｂ２層に細別される。堆積状況や土性から大きく３つに区分される。まず１つ目は炉内堆積土のＡ・Ｂ１・Ｂ２層である。堆積状況から住居跡及び炉跡が廃棄された後、炉内にＢ１・Ｂ２層が堆積しさらに炉跡全体にＡ層が堆積したと考えられる。Ａ層には炭化物が多量に含まれ炉跡検出の鍵になった層である。そして２つ目は炉の使用時に形成された焼土層のＣ層である。炉内の全域にみられる。３つ目は炉構築土のＤ層である。東西1.07m、南北0.89mの掘方を掘りその中に石を据え置き、そして石の周りにはＤ層を充填させ炉を構築していると考えられる。

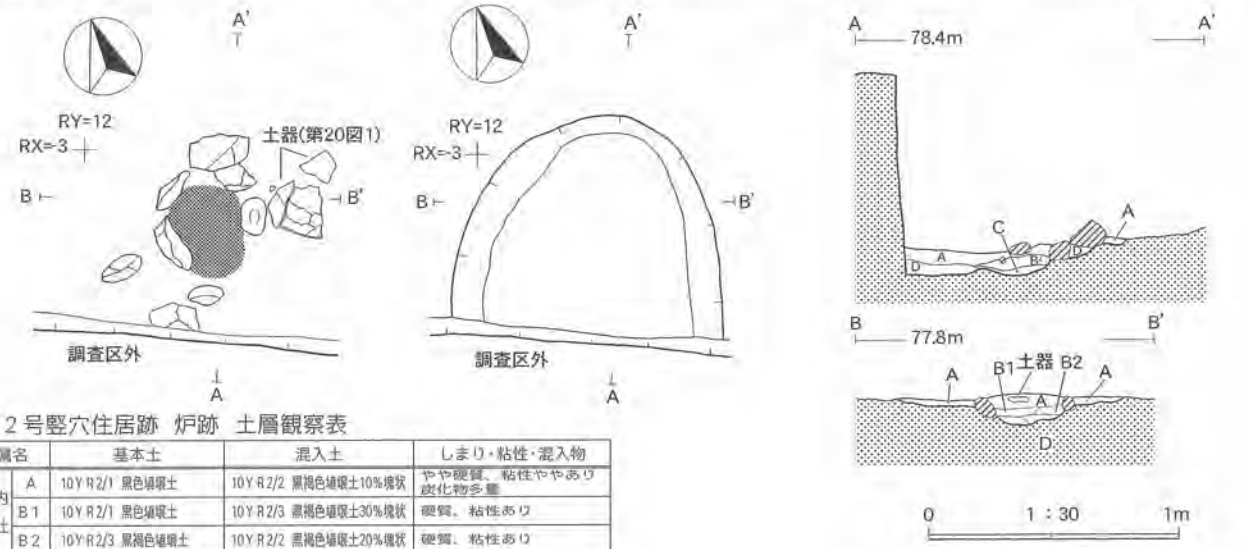


第２号竪穴住居跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土15%粉状	やや硬質、粘性ややあり 炭少量、白色粒微量
	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状 10YR3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	3	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土20%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	4a	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状 10YR3/4 暗褐色埴壌土1%ブロック状	やや硬質、粘性ややあり 白色粒微量
	4b	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	5	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量
	6	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の小礫
	7	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
	8	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり

第２号竪穴住居跡　ピット　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p1	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色小礫
埋土	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の小礫
p2	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
埋土	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり



第２号竪穴住居跡　炉跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内堆積土	A	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物多量
	B1	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土30%塊状	硬質、粘性あり
	B2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土20%塊状	硬質、粘性あり
焼土	C	7.5YR2/3 極暗褐色シルト質埴土	10YR4/6 褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
炉構築土	D	10YR2/2 黒褐色砂質埴壌土	10YR2/1 黒色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 礫

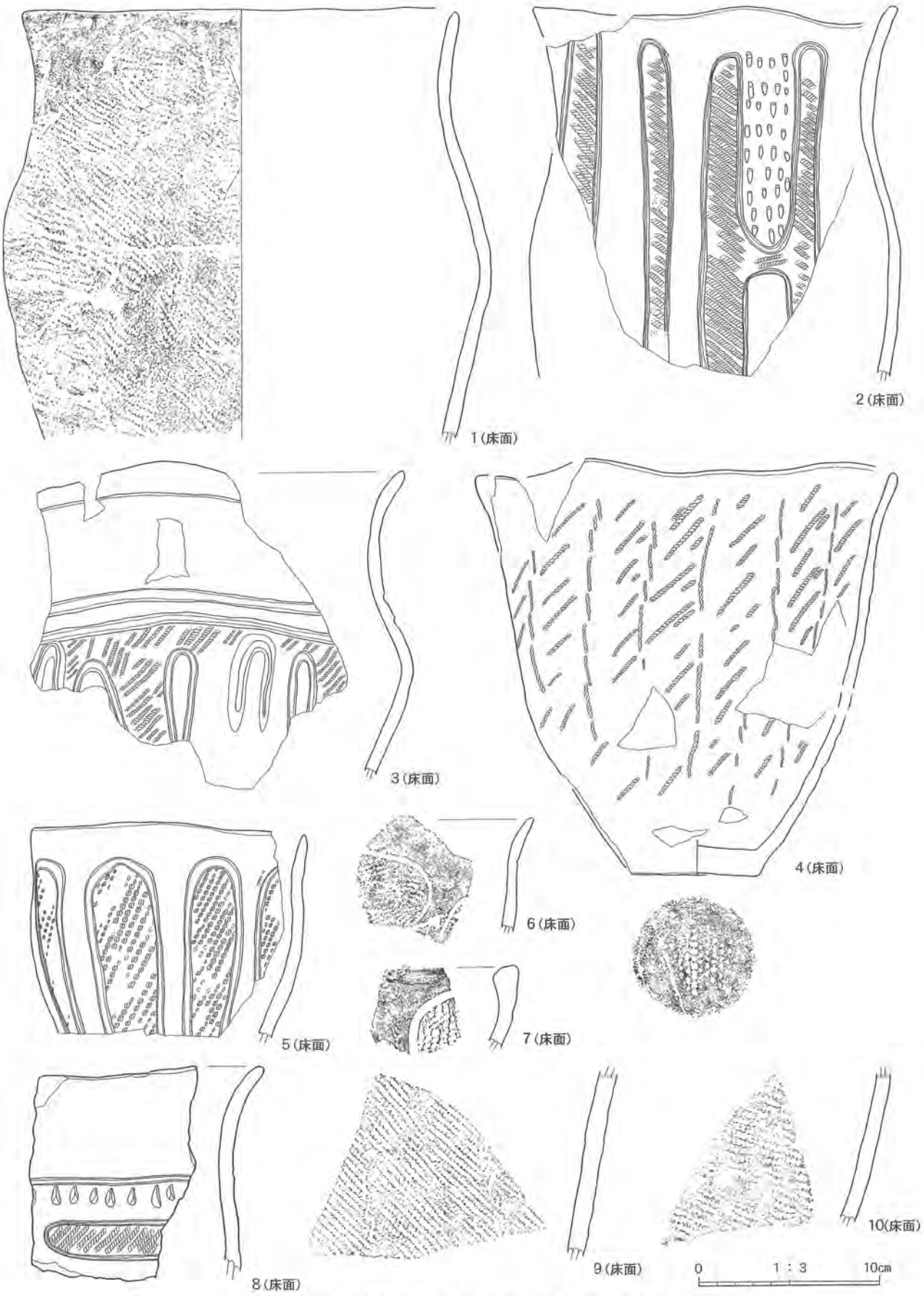
第19図　第２号竪穴住居跡　平面図・断面図
炉跡　平面図・断面図

ピットは２基検出されている。ｐ１は炉跡の東約40cmの位置、ｐ２は炉跡の北約20cmの位置で確認され、平面形はともに円形を呈する。ｐ１の規模は径35cm、床面から底面までの深さ約８cm、ｐ２の規模は径34cm、床面から底面までの深さ約７cmを測り、壁は20°～30°と緩やかに立ち上がる。ｐ１の１・２層には１～２cm大の小礫が含まれている。両ピットは検出位置、平面形のみをみれば柱穴としての要件を満たしているが、床面から底面までの深さが約７～８cmと浅く柱痕跡などもみられなかったため、柱穴と明確に判断できなかった。

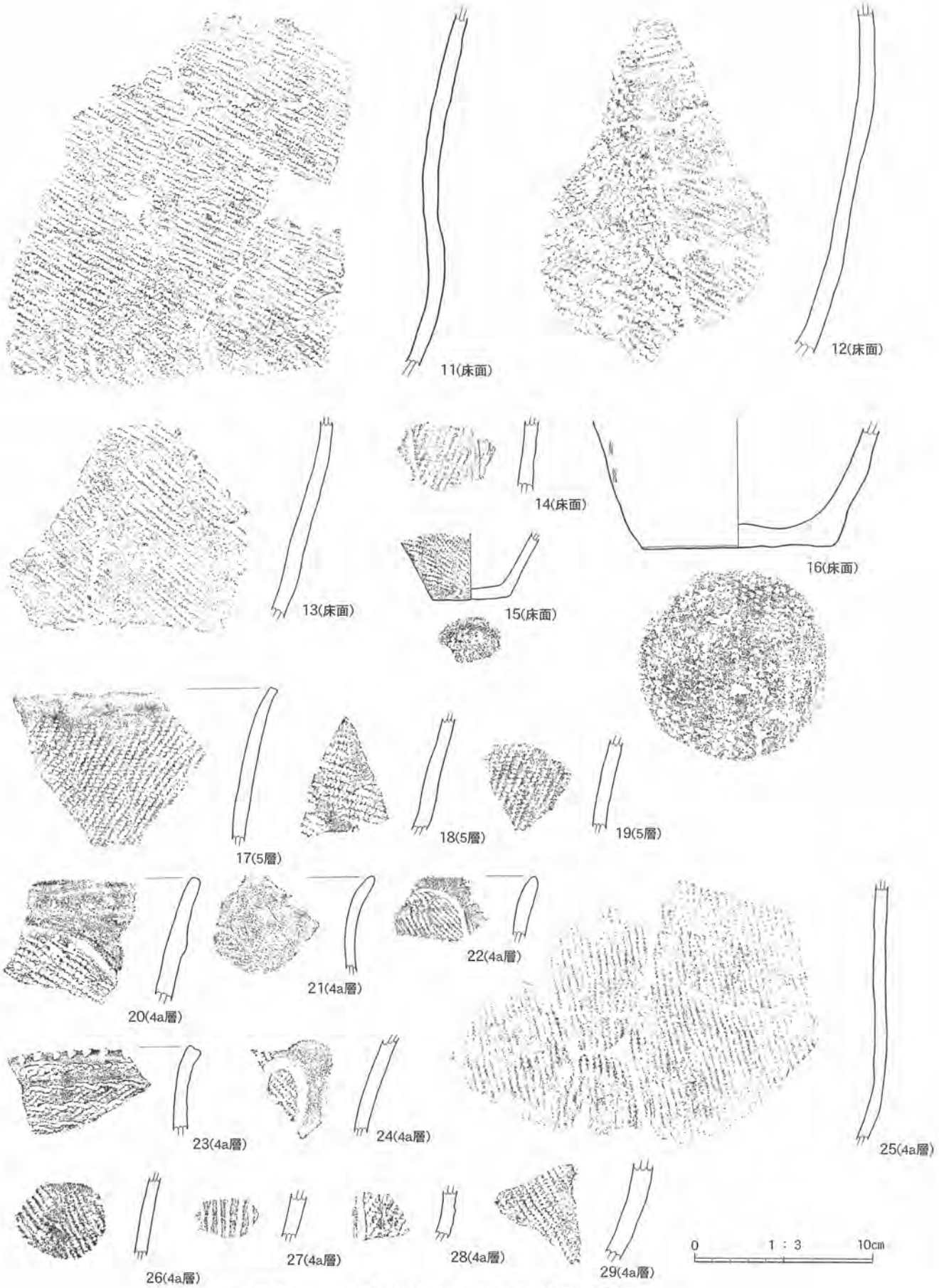
遺物は縄文土器・石鏃・削器が出土している。縄文土器は366点出土し、その中で30点を図示した。１～16は床面から出土したものである。１は石囲炉の東わきにおいてつぶれた状態で出土したもので、胴部から口縁部まで残存している。胴部は大きく膨らみ口縁部は外側に向かって緩やかに開く。ＬＲ単節縄文を地文とし器厚は５～６mmと薄くもろい。２は炉跡の北約20cmの位置から出土したもので、胴部から口縁部が残存している。胴部は緩やかに膨らみ、口縁部に向かって一旦すぼまったあと口縁部は緩やかに外反する。口唇部は波状を呈している。胴部には沈線で区画された縦位直状の縄文帯及びH字形を呈する縄文帯がみられる。沈線で区画された周囲は地文であるＬＲ単節縄文が磨り消されている。H字形を呈する縄文帯の間には、幅２mmの棒状のものを使用した刺突痕が合計34箇所観察される。３は胴部から口縁部が残存し、胴部は大きく膨らみ口縁部は緩やかに外反する。胴部と口縁部の境には横位の沈線が引かれ、その下部には地文であるＲＬ単節縄文が施文されている。それらの地文の上面には∩字形の隆帯や沈線で区画された縄文帯が施されている。４は底部～口縁部が残存し、口径23.3cm、器高23cm、底径7.1cmを測る。底部から胴部にかけ外側に向かって緩やかに開き、口縁部下でやや屈曲しそのまま外側に開く。胴部には結節をもつＲＬ単節縄文が施文されている。５は胴部から口縁部が残存し、胴部はあまり膨らまず口縁部は直線的に立ち上がる。胴部には縦位の細長い縄文帯がみられ、その中にはＲＬＲ複節縄文が施文されている。縄文帯の周辺は胴部においては縦方向に、口縁部においては横方向にナデ調整されている。６～８は口縁部の破片である。６は大きく外反し、口縁部下には沈線で区画された縄文帯が施文されるが摩滅がひどく縄文の詳細な観察はできなかった。７は器厚が厚く土器内面に向かって断面が三角形状に膨らみ、口縁部は内湾気味に立ち上がる。７も６と同様に沈線で区画された縄文帯の一部が観察される。８の口縁部は大きく外反し、口唇部から約５cmの位置に横位の沈線が引かれ、その中にはＬＲ単節縄文と棒状のものを使用したと思われる上方からの刺突痕が８箇所観察される。９～14は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文（９・10）、ＬＲ単節縄文（11～13）及びＲＬＲ複節縄文（14）が施文されている。９には結節、14には縦位の沈線がみられる。15・16は底部の破片で、15の底部側面にはＬＲ単節縄文が施文され、16の底部側面にも一部縄文が確認できるが摩滅のため不明瞭である。16は底部も摩滅しており、網代痕は確認できたが詳細は不明である。

17～19は５層から出土したものである。17は口縁部の破片で、緩やかに外反しＲＬ単節縄文を地文とする。18・19は胴部の破片で、18はＬＲ単節縄文、19はＲＬ単節縄文を地文とする。

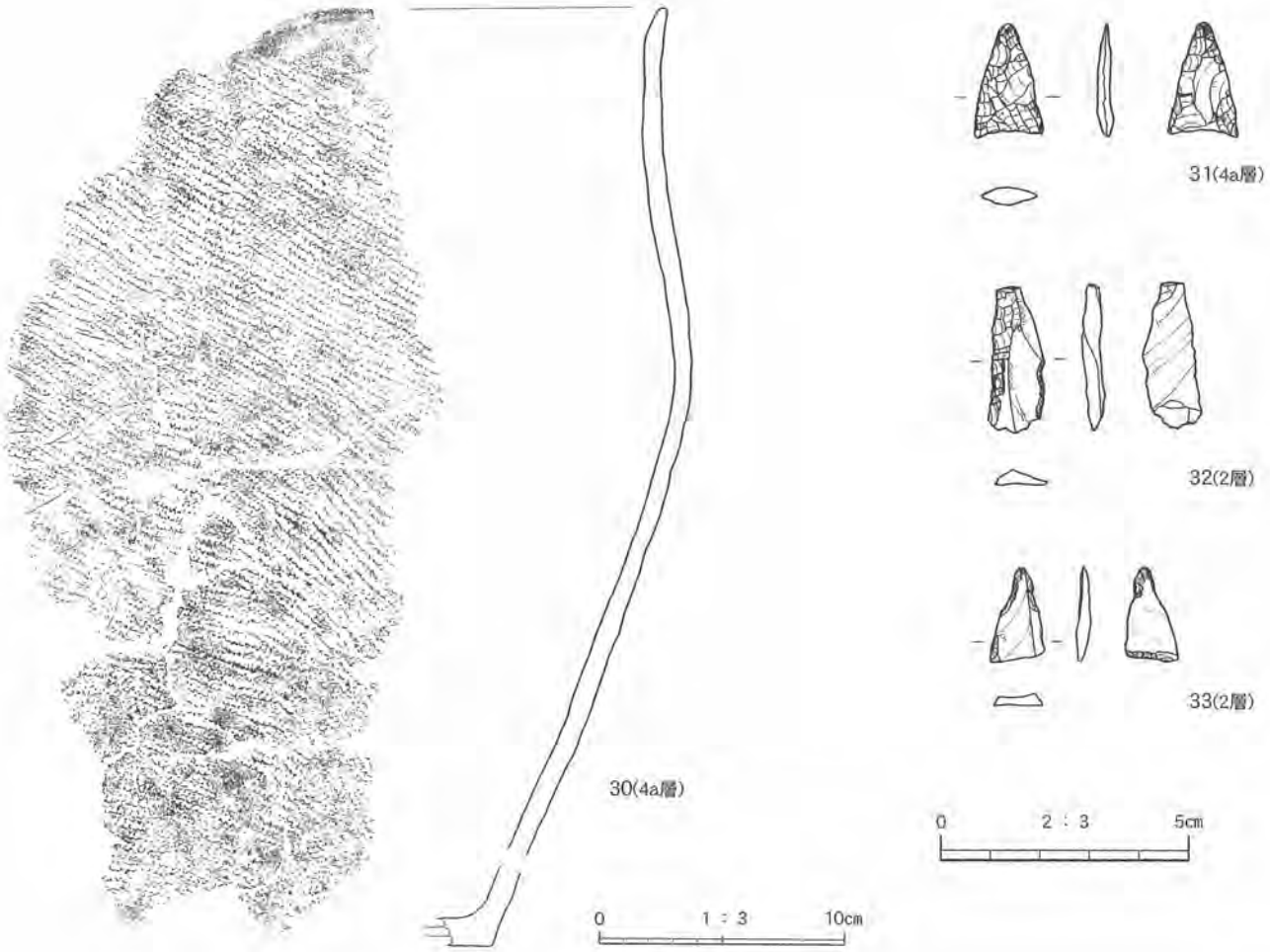
20～30は４ａ層から出土したものである。20～23は口縁部の破片で、20～22には沈線で区画された∩字形の縄文帯がみられる。23は緩やかに外反し、口唇部には棒状のもので付けたと思われる刻みが施され、口縁部下には不整撚糸文が横位にみられる。胎土に繊維は含まれていない。文様の特徴から縄文時代前期の大木２式と思われる。24～29は胴部の破片で、24・28には∩字形や縦位に沈線が施文され縄文帯を描出している。27には縦位に撚糸文がみられ、25・26・29にはＬＲ単節縄文が施されている。30は部分的ではあるが底部から口縁部まで残存している。胴部上半で最大径となり、口縁部は



第20図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（１）



第21図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（２）



第22図　第２号竪穴住居跡　出土遺物（３）

やや直線的に立ち上がり口唇部において緩やかに外反する。地文はＬＲ単節縄文である。

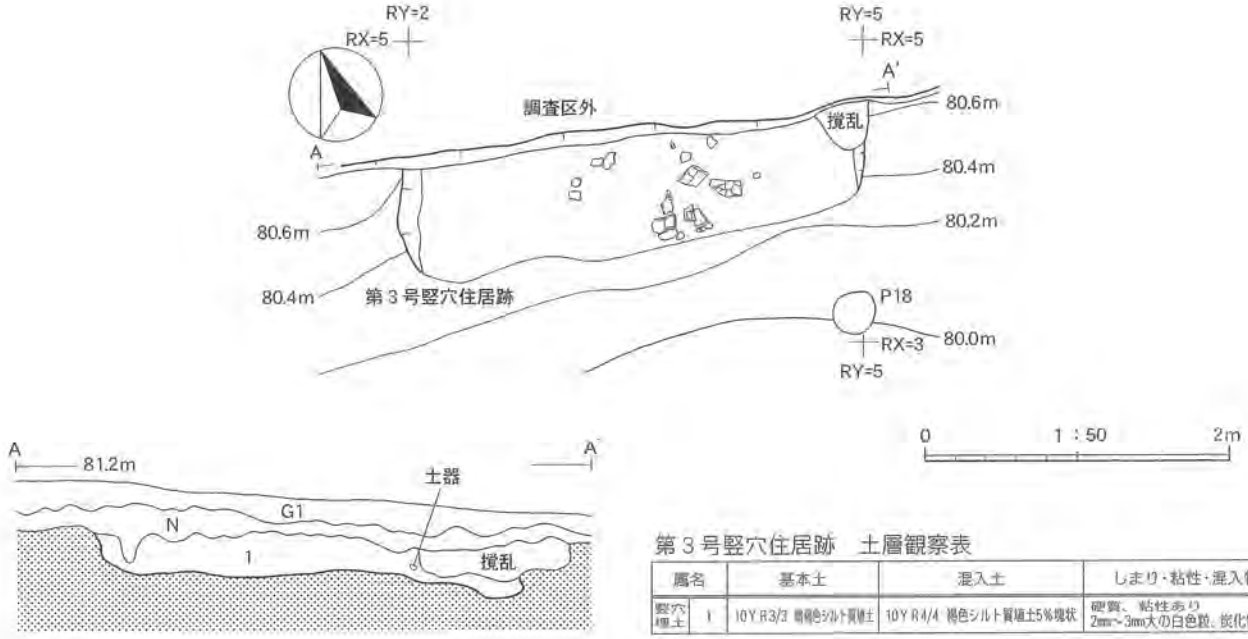
31～33は石器である。31は凹基無茎の石鏃で、両面の縁辺部には丁寧な調整剥離が施されている。背面には一次剥離面が残っている。32は側縁部に調整剥離がみられるもので、小形の削器と思われる。腹面の中央には一次剥離面が大きく残り縁辺部のみ細部調整されている。33は調整剥離によりつまみ状の突起を作り出しているもので用途は不明である。

第２号竪穴住居跡は部分的な検出であるため詳細は不明であるが、円形を呈し石囲炉を有する住居跡である。床面から縦位の縄文帯をもつ土器が出土し、さらに後述する大木８ｂ式期の第７号土坑と重複していることから、住居跡の時期は縄文時代中期末葉と考えられる。

第３号竪穴住居跡（ＳＩ３）（第23・24図、写真図版24～27・73・74）

第３号竪穴住居跡は調査区北西壁で確認されている。南壁と東壁・西壁の一部分のみを検出し、大部分は調査区外に延びている。調査区北西壁周辺は表土が薄いため、表土上面から約20cm掘り下げると地山面が確認され、この面で本住居跡を検出した。他の遺構との重複関係はない。

今回の調査で検出された部分について、**平面形**は東西方向に長い長方形を呈し、**規模**は長軸3.10m、短軸0.86m、検出面から床面までの深さは0.29mを測る。床面は平坦で、壁は西壁において約60°



第３号竪穴住居跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	1	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土	10YR4/4 褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm～3mm大の白色粒、炭化物5%

第23図　第３号竪穴住居跡　平面図・断面図

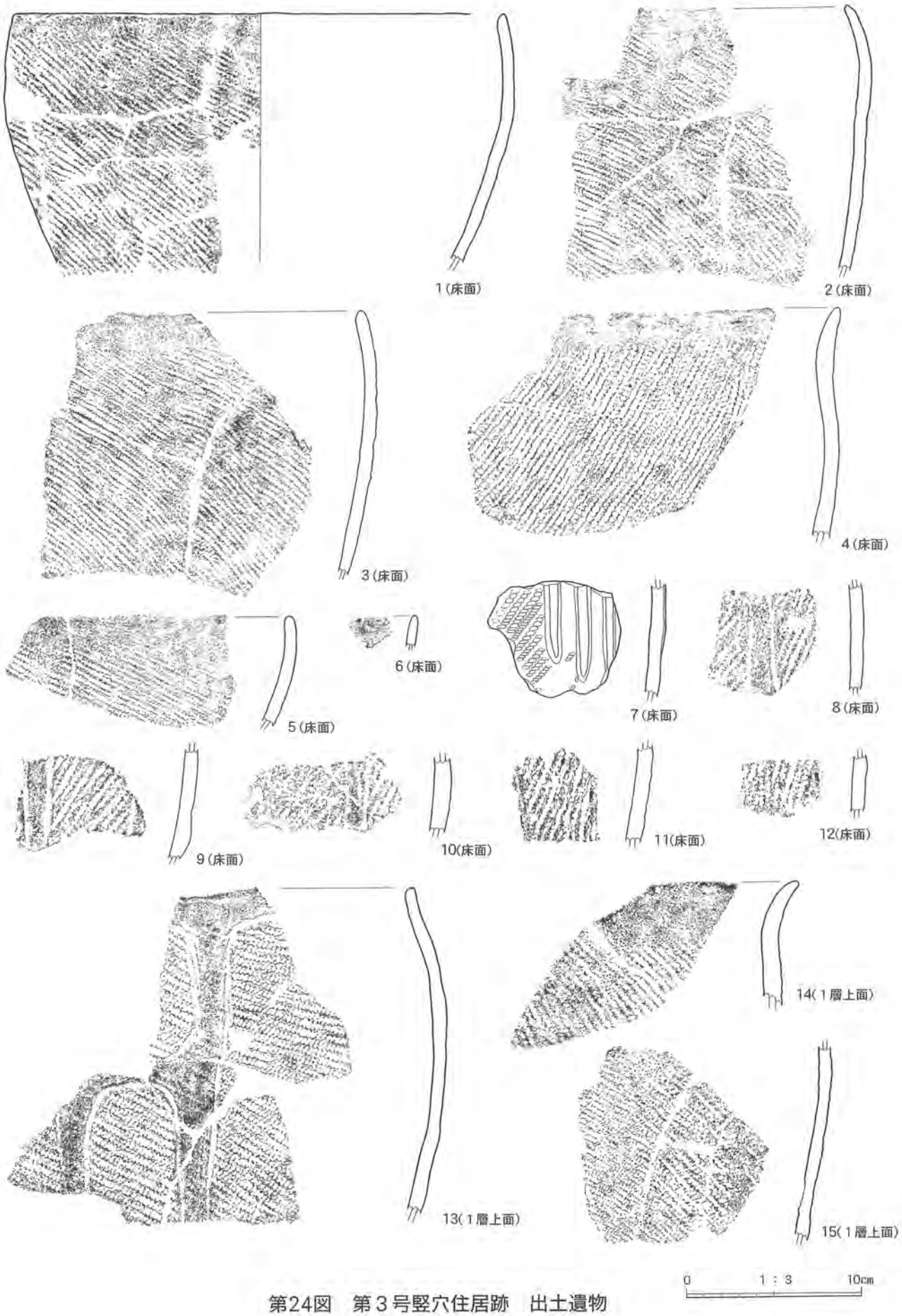
で立ち上がり、東壁は撹乱のために一部壊され立ち上がりは不明である。

堆積土は１層のみで、暗褐色を呈するシルト質埴土である。粘性・しまりともにあり、炭化物が少量含まれている。炉跡・柱穴・周溝などは検出されなかった。

遺物は縄文土器が出土している。縄文土器は21点出土し、その中で15点を図示した。１～12は床面から出土した土器である。１は胴部から口縁部が残存し、推定ではあるが口径28cmを測る。胴部上半に最大径をもち口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。ＬＲ単節縄文を地文とし口縁部周辺のみ横方向のナデ調整により磨り消されている。２～６は口縁部の破片で、２・３・５は１と同様に口縁部は内湾し、地文にはＬＲ単節縄文が施文されている。４の口縁部は緩やかに外反しＲＬ単節縄文が施文されている。６は小破片で文様はみられなかった。７はＲＬ単節縄文の地文に約１cm幅で縦位の隆帯が貼り付けられている。８～10は縦位の沈線によって区画された縄文帯が施文されており、胎土・文様が極めて類似していることから同一個体の可能性がある。11・12は胴部の破片でともにＲＬ単節縄文を地文とする。

13～15は１層上面から出土したもので、13は胴部から口縁部が残存している。大きく膨らんだ胴部から口縁部にかけてすぼまっていき口縁部はやや内湾したあと直線的に立ち上がる。胴部には楕円形や∩字形を呈する縄文帯がみられ、それらの縄文帯は地文であるＬＲ単節縄文を施文した後に沈線を引き、そして沈線で区画された周囲の縄文を磨り消すことで描出している。14は外反する口縁部の破片で、ＬＲ単節縄文を地文とする。15は胴部の破片でＬＲ単節縄文が施されているが器面は摩滅しており詳細は不明である。

第３号竪穴住居跡は東壁と西壁の一部分のみの検出であるため、炉跡や柱穴などは確認されなかった。住居跡の時期は床面から出土した土器に縦位の縄文帯が施文されていることから、縄文時代中期末葉と考えられる。



第24図　第3号竪穴住居跡　出土遺物

第４号竪穴住居跡（ＳＩ１）（第25・26図、写真図版28～33・74・75・93）

第４号竪穴住居跡は調査区東部、標高約79.2～78.8mの地点で検出され、**遺構検出面**は地山面である。Ｐ16と重複し、本住居跡の方が古い。本住居跡を検出した地山面は北から南へ18°傾斜しており、南に向かって壁の立ち上がりが薄くなり、南壁については一部分確認できなかった。

平面形は東西に長い楕円形を呈しており、**規模**は長径2.48m、短径（1.96m）、検出面から床面までの深さ0.17mを測る。短径は南壁未検出のために推定値である。床面は東西方向には平坦であるが南北方向は地山面の傾きに沿って南へ約10°傾斜している。壁は北壁で約75°と垂直気味に立ち上がるが、東西壁は50°～70°と立ち上がり角度にややばらつきがみられる。

堆積土は１層～３層に大別され、２層はさらに２ａ・２ｂ層に細別される。住居跡中央部には主に２ａ・２ｂ層が堆積し、３層は東壁及び北壁際に堆積しており壁及び住居跡周辺からの崩落土と考えられる。

炉跡は住居跡中央部に位置する**１号炉跡**とその南西約20cmのところに位置する**２号炉跡**の大小２基の炉跡が検出されている。１号炉跡は長さ65cm、幅45cmを測り、７個の石を用いて南北に長い冂字形に配する石囲炉である。南端の石だけが確認されず抜き取りの痕跡もみられなかった。掘方の規模は長さ84cm、幅70cmを測り、炉石を置くために掘られた小規模な穴も３箇所検出されている。

１号炉跡の堆積土はＡ・Ｂ層に分けられ、さらにＢ層はＢ１・Ｂ２層に細別される。Ａ層は炉内に堆積した土層で黒褐色を呈する埴壌土である。炭化物や焼土塊などは含まれていない。Ｂ１・Ｂ２層は炉の構築土で、Ｂ１層は主に北端の石周辺、Ｂ２層は東西端の石周辺に堆積し、炉石の周りに充填されている。炉の使用面であるＢ１層の上面には焼土塊や炭化物の混入などはみられず、焼土層も確認されなかったが、炉石表面の炉内側は被熱を受けぼろぼろになっていることから、炉として機能していたと考えられる。

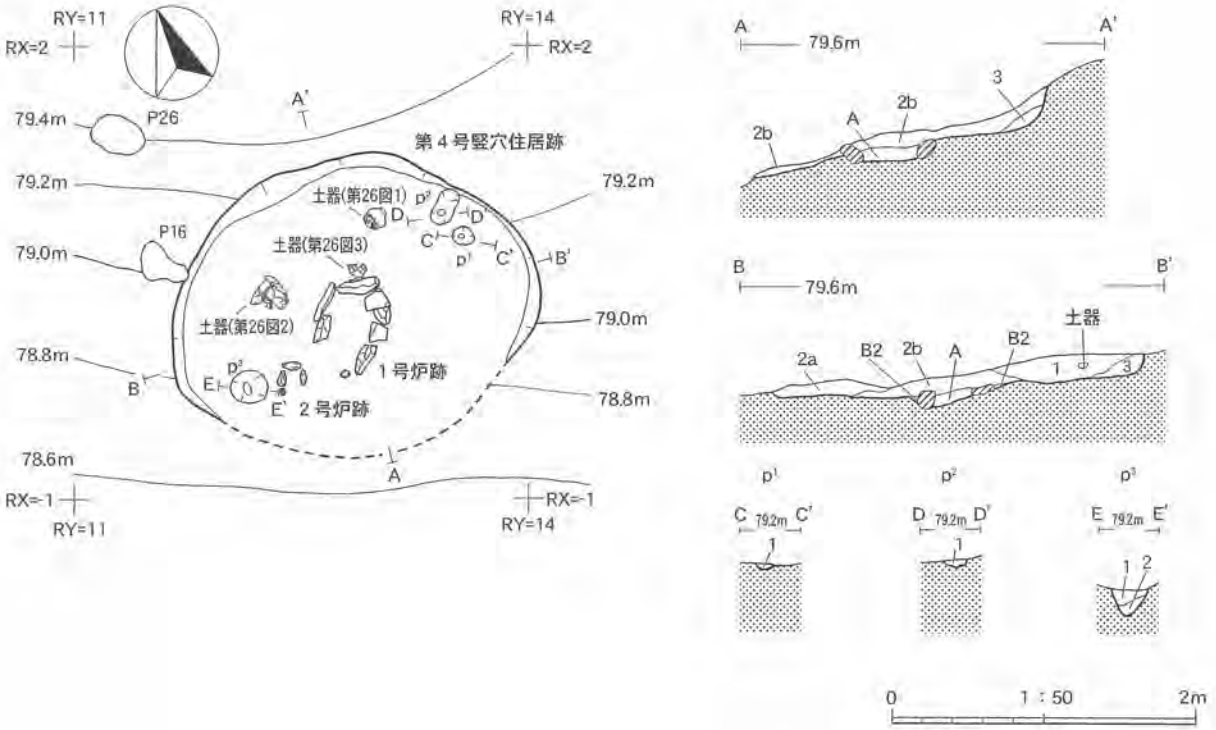
２号炉跡は長さ22cm、幅18cmを測り、３個の平板な石を冂字形に配し構築している。北側・東側・西側にそれぞれ１個ずつ石が据え置かれている。１号炉跡の規模と比べると小規模であるが、北端を区画している石の表面が被熱しているために炉跡として判断した。西側の炉石の南側に接したところには縄文土器（第26図４）が出土している。

２号炉跡の堆積土はＡ層のみで炉内の堆積土になる。黒褐色を呈する埴壌土で炭化物が少量含まれる。焼土や構築土は確認されなかった。

ピットは３基確認され、北東壁わきからｐ１・ｐ２、南壁わきからｐ３が検出されている。平面形はｐ１・ｐ３は不整な円形、ｐ２は楕円形を呈し、規模はｐ１：長径14cm、短径13cm、深さ３cm、ｐ２：長径24cm、短径12cm、深さ４cm、ｐ３：長径24cm、短径22cm、深さ16cmである。堆積土は１層または２層で柱痕跡などはみられず、さらに床面からピット底面までの深さも浅いことから柱穴とは異なる用途のピットと考えられる。

遺物は縄文土器と凹石が出土している。縄文土器は34点出土し、その中で10点を図示した。

１～３は床面から出土したものである。１は炉跡の北東約30cmの位置で出土し、器高16cm、底径5.9cmを測る。口縁部が欠損しているが胴部から底部にかけては全て残存している。胴部は大きく膨らみ球胴形を呈し、口縁部に向かって直線的に立ち上がる。胴部と口縁部との境には横方向の隆帯が巡り、その上には２対の吊り手状の突起がみられる。胴部には縦方向に長い楕円形を呈する沈線で区画されたＲＬ単節縄文を地文とする縄文帯がみられ、その周囲には平滑なナデが施されている。外面及び内

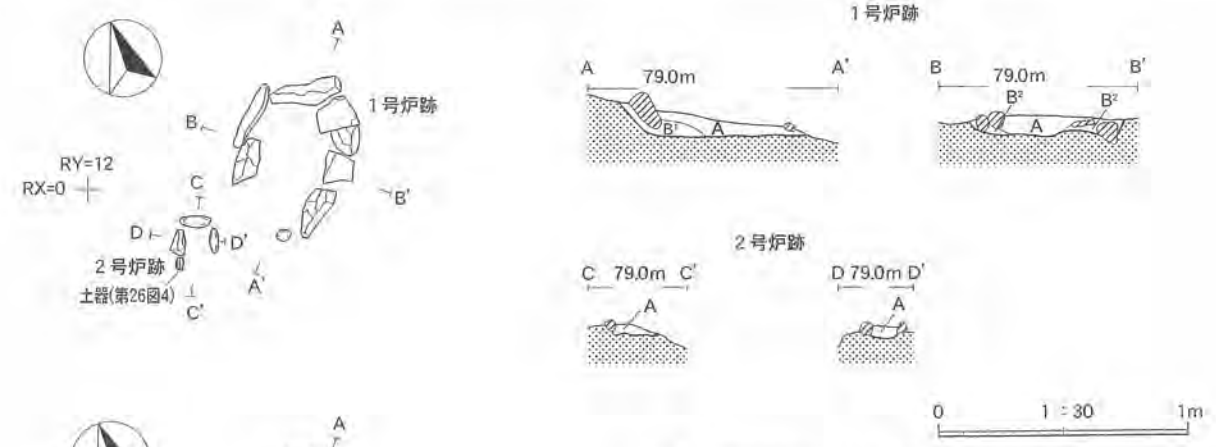


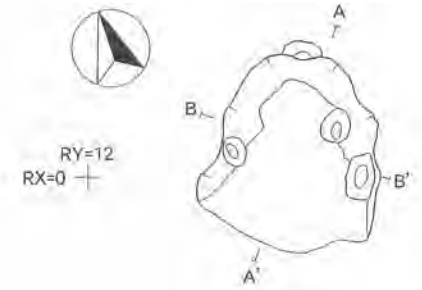
第４号竪穴住居跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%層状	やや硬質、粘性ややあり
	2a	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	2b	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	3	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり

第４号竪穴住居跡　ピット　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p1埋土	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR4/3 にぶい黄褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性ややあり
p2埋土	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR4/3 にぶい黄褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性ややあり
p3埋土	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性ややあり
	2	10YR4/3 にぶい黄褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性ややあり





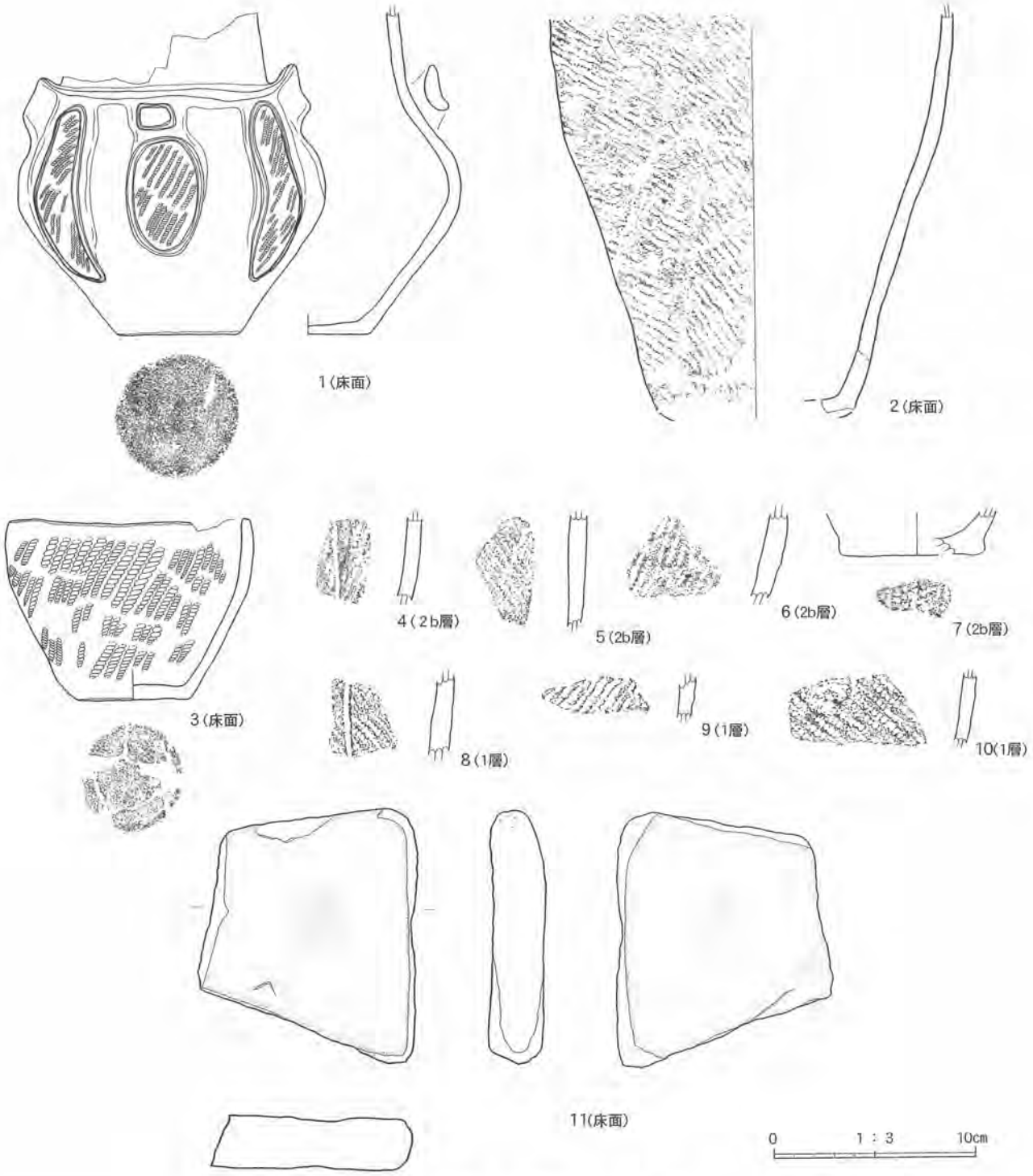
第４号竪穴住居跡　１号炉跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内埋土	A	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
炉側堆土	B1	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の炭
	B2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状 10YR4/4 褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量

第４号竪穴住居跡　２号炉跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内埋土	A	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量

第25図　第４号竪穴住居跡　平面図・断面図
１号炉跡・２号炉跡　平面図・断面図



第26図　第４号竪穴住居跡　出土遺物

面の口縁部周辺には赤彩の痕跡が観察される。２は炉跡の西約20cmの位置でつぶれた状態で出土した土器で、胴部から底部の一部が残存し器高は19.5cmを測る。外面にはＬ無節縄文が斜方向に施文されている。３は１号炉跡の北端を区画する石のすぐ北側から出土した土器でほぼ完形である。口径11.6cm、器高9.1cm、底径5.5cmを測り、小型で椀形を呈する。口縁部はやや内湾気味に立ち上がり器面全体にＲＬ単節縄文が施文されている。４は２号炉跡の西端を区画する石のすぐ南から出土したもので、

縦位の沈線に縄文が施されているが摩滅のため不明瞭である。

５～７は２ｂ層から出土したもので、５はＬＲ単節縄文、６はＲＬ単節縄文を地文とする胴部の破片である。７は底部の破片で網代痕が残っているが摩滅のため不明瞭である。

８～10は１層から出土した胴部の破片で、８にはＬＲ単節縄文の地文の上に縦位の沈線が引かれ、９にはＬ無節縄文、10にはＬＲ単節縄文が施されている。

11は両面の中央部に凹みをもつ凹石で、１号炉跡の炉石として転用されている。複数の凹みがあり、それには重複がみられる。

第４号竪穴住居跡は東西に長い楕円形を呈し石囲炉を有する住居跡である。住居跡の時期は床面から出土した１の土器にみられる縦位の縄文帯などの文様から縄文時代中期末葉と考えられる。

第５号竪穴住居跡（ＳＩ５）（第27・28図、写真図版34・35・75）

第５号竪穴住居跡は調査区中央部で検出されている。第１号・６号竪穴住居跡と重複し、両遺構よりも古い。そのため住居跡の大部分が掘削され、炉跡や北壁の一部のみ残存している。さらに当初は本遺構のプランも含め第１号竪穴住居跡として認識し掘り下げを行っており、石囲炉を検出した時点で第５号竪穴住居跡を確認したという経緯があるため本遺構の埋土として確認できた層厚は約６㎝と極めて薄い。

残存している部分からの推測であるが、北壁のプランから**平面形**は円形を呈していたと思われる。**規模**は残存値ではあるが、最も長いところで3.22ｍを測り、前述のとおり遺構検出面から床面までの深さは約６㎝である。北壁は約55°の角度で緩やかに立ち上がる。

堆積土は１・２層に分けられ、ともに粘性・しまりがある。

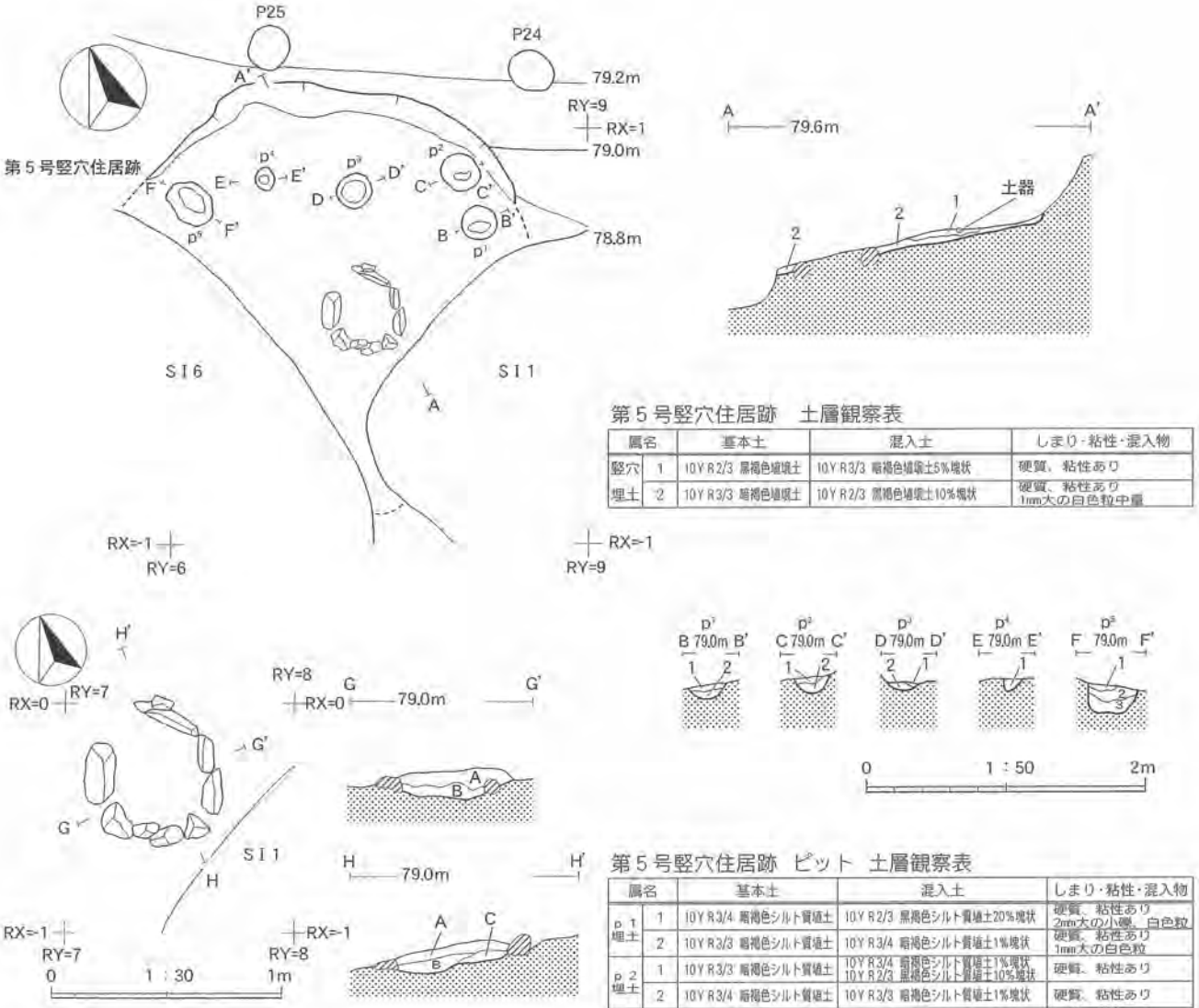
炉跡は９個の石が配されている石囲炉で、推定ではあるが住居跡の中央部に位置していると思われる。南北軸の長さ65㎝、幅57㎝を測り、北端の石が北側に張り出している他は東・南・西辺の形は正方形を呈している。北辺の一部には炉石がみられず、また抜き取りの痕跡なども確認できなかった。炉に使用されている石は全て花崗岩であり、被熱などによりぼろぼろになっている。

炉跡の堆積土はＡ～Ｃ層に分けられ、Ｃ層のみ北側に堆積している。Ｃ層には炭化物少量と焼土塊が含まれている。

ピットは５基確認されている。平面形は円形や楕円形と様々で、さらに規模においても長径16～36㎝、短径12～26㎝、床面からピット底面までの深さ６～20㎝とばらつきがみられる。炉跡の北側において北壁に沿って検出されており、柱穴の可能性も考えられるが明確に柱痕跡などの堆積状況はみられなかった。

遺物は縄文土器が出土している。縄文土器の破片は74点出土し、その中で21点を図示した。１・２は床面から出土したものである。１はＲＬ単節縄文の地文に縦位の沈線が引かれ、２はＲＬ単節縄文に幅２～３㎜を測る横位の隆線が２本施文されている。

３～９は２層から出土したもので、３・４は口縁部の破片である。３の口縁部はやや外反し∩字形の沈線で区画された中にＲＬ単節縄文がみられ、４の口縁部には表面に凹凸があり文様は施文されていない。５～９は胴部の破片である。５は縦位の沈線で区画された中にＬＲ単節縄文がみられる。６はＬＲ単節縄文を地文とし結節がみられる。７～９にはＲＬ単節縄文が施文され、９には結節がみられる。



第５号竪穴住居跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
埋土	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒中量

第５号竪穴住居跡　ピット　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ｐ１埋土	1	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の小礫、白色粒
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土1%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
ｐ２埋土	1	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土1%塊状 10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土1%塊状	硬質、粘性あり
ｐ３埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土1%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒
	2	10ＹＲ3/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
ｐ４埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
ｐ５埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 炭化物微量
	3	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり

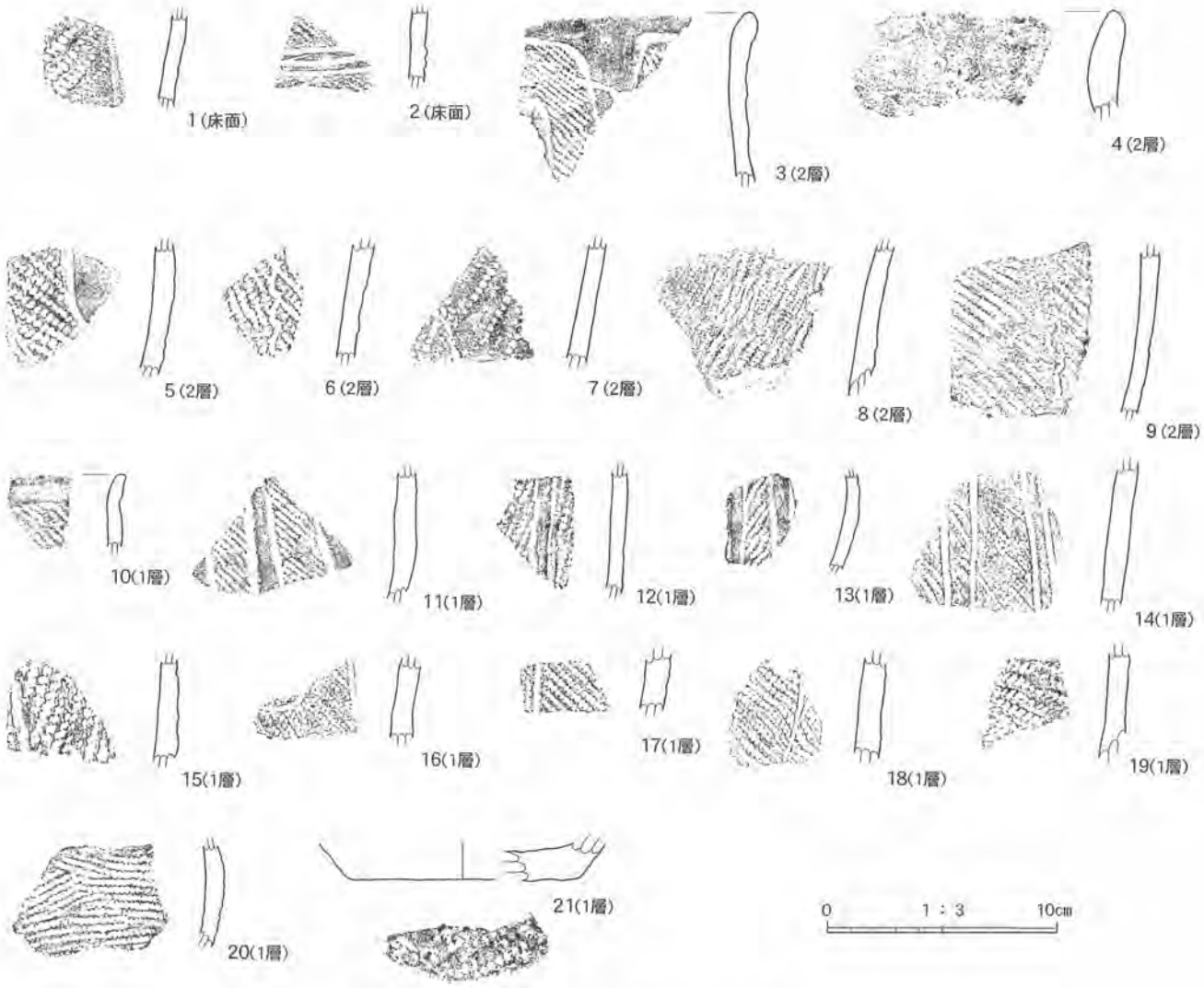
第５号竪穴住居跡　炉跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内堆積土	A	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒少量
	B	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒多量
	C	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量、焼土塊

第27図　第５号竪穴住居跡　平面図・断面図
炉跡　平面図・断面図

10～21は１層から出土したものである。10は口縁部の破片で、口縁部は緩やかに外反し、地文にはＬＲ単節縄文がみられるが摩滅しているため不明瞭である。11～18はＲＬ単節縄文（12～14・16～18）、ＬＲ単節斜縄文（11）及びＲＬＲ複節縄文（15）の施文後に縦位の沈線が引かれ、さらに沈線と沈線で区画された中が磨り消されている。19・20はともにＬＲ単節縄文を地文とし、20は小破片であるが大きく湾曲しているため、小形で球胴形を呈する土器の胴部破片であると思われる。21は底部の破片で、網代痕が残っているが摩滅がひどく不明瞭である。14・16～18の胎土は器面の色調（褐色2.5ＹＲ4/3）や１㎜大の砂礫の混入など極めて類似しており、同一個体の可能性がある。

第５号竪穴住居跡は大部分が他住居跡によって掘削され、北壁と炉跡のみが残存している。住居跡の時期は∩字形の沈線で区画された縄文帯や縦位の沈線が引かれる文様をもつ縄文土器が出土していることから、縄文時代中期末葉と考えられる。



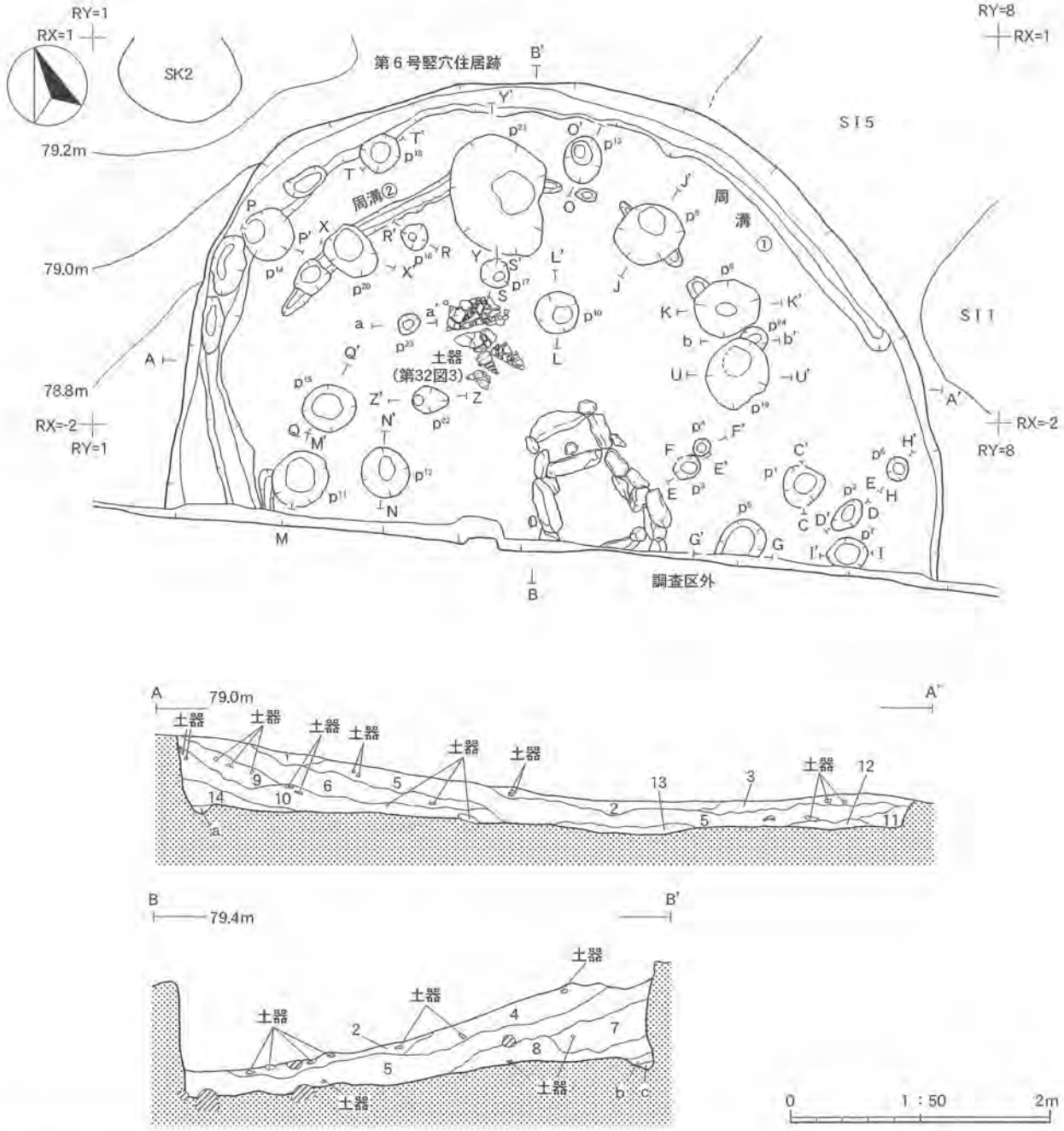
第28図　第５号竪穴住居跡　出土遺物

第６号竪穴住居跡（ＳＩ６）（第29～38図、写真図版36～42・76～82・93・94）

第６号竪穴住居跡は調査区南西部で検出され、**遺構検出面**は基本土層Ｍ層上面である。縄文時代後期の遺物包含層を全て掘り下げたあとに確認された住居跡で、遺物包含層よりも本住居跡の方が古い。さらに第５号竪穴住居跡とＰ27とも重複し、ともに本住居跡の方が新しい。住居跡の約半分は調査区外に延びており、全体の構造を知ることはできなかった。

平面形は南北にやや長い楕円形を呈し、検出値ではあるが**規模**は長径6.00m、短径3.62m、検出面から床面までの深さは最大で62cmを測る。北壁と西壁は垂直気味に立ち上がるのに対して、東壁は約55°と他の壁と比して緩やかに立ち上がる。床面は北から南に約８°傾斜し、比高差は約30cmである。

堆積土は14層に分けられる。１層～４層はそれぞれ検出面で確認された層で層厚は最大でも20cmと薄く堆積している。全て黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし硬質で粘性がある。５層は住居跡の広範囲に堆積している層で、黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし硬質で粘性がある。住居跡埋土の中で最もしまりがあるため少しずつしか掘り進むことができず、通常よりも掘り下げに時間を要した層になる。６層～14層は主に壁際において三角堆積の様相を呈しているため、壁及び住居跡周辺からの崩落土の可能性が考えられる。６層中には炭化物が少量含まれている。



第６号竪穴住居跡　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/1 黒色埴壌土20%塊状	硬質、粘性あり 3mm大の白色粒
	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
	3	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	4	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	5	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/2 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	6	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR2/2 黒褐色埴壌土20%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量、3mm大の白色粒
	7	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
	8	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり
	9	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
	10	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり

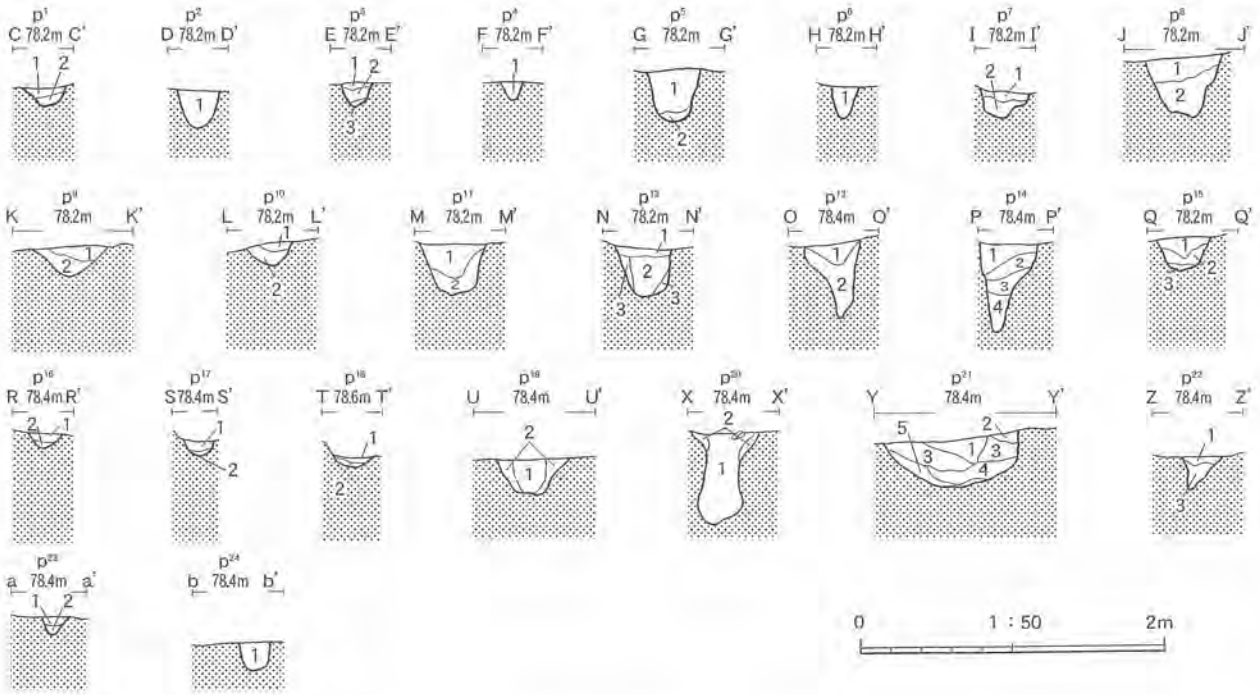
属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
竪穴埋土	11	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒
	12	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR5/4 にぶい黄褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	13	10YR3/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色砂壌土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	14	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒

第６号竪穴住居跡　周溝　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
周溝埋土	a	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	b	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	c	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量

第29図　第６号竪穴住居跡　平面図・断面図

炉跡は複式炉が確認されている。検出位置は住居跡中央部からやや南寄りのところと推測されるが、一部調査区外に延びているため明確な位置は不明である。検出値ではあるが、南北1.02m、東西0.89mを測る。複式炉の形態は石組炉が２つ南北方向に連結したもので、さらに調査区外に向かって南北方向に据えられた石も確認しているため、もう１つの石組炉かもしくは前庭部を囲んだ石組部の可能性がある。北側の石組炉は東西方向に長軸をもつ長方形を呈し、東西63cm、南北49cmを測る。北端と南端を区画する石は長さ40cmを越える長大な石を用いており、炉内側の表面には被熱の跡が観察され



第６号竪穴住居跡　ピット　土層観察表

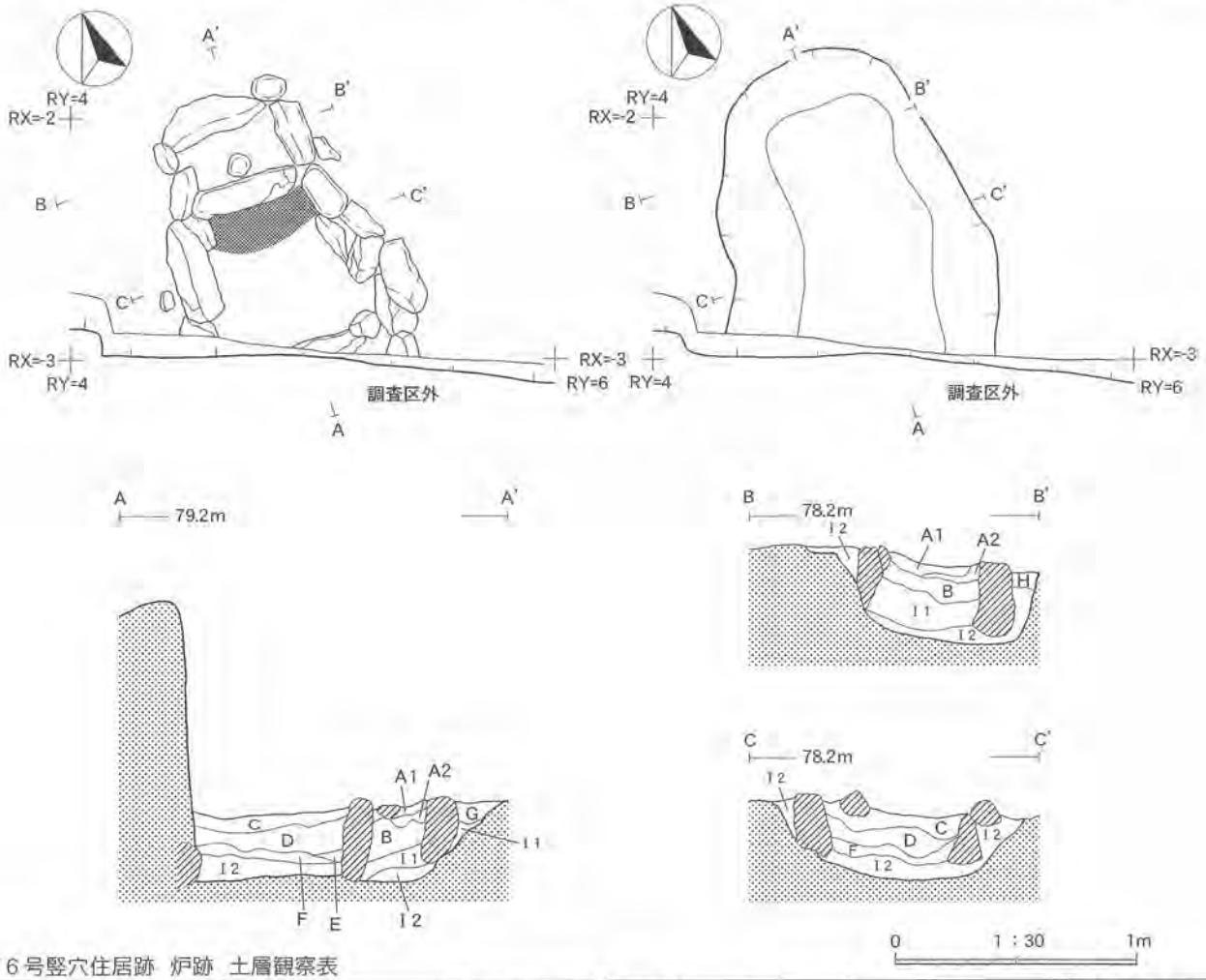
属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p 1 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量
	2	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 2 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
p 3 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	7.5ＹＲ4/4 褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 5mm大の白色粒
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒
	3	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 4 埋土	1	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	2	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 5 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/2 黒褐色埴壌土2%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 6 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 7 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ4/6 褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	2	10ＹＲ2/1 黒色埴壌土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 8 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量、1mm大の白色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ4/6 褐色埴壌土20%塊状	やや硬質、粘性ややあり
p 9 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
p10 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
p11 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 2mm大の赤色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
p12 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 2mm大の赤色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
	3	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
p13 埋土	1	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 炭化物微量、1mm大の白色粒少量
p14 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/4 褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	3	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
	4	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
p15 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 2mm大の赤色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
	3	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒
p16 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
p17 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
p18 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/4 褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
p19 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
p20 埋土	1	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	2	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒
p21 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/4 褐色シルト質埴土10%塊状 10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	2	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/1 黒色シルト質埴土1%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	3	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	4	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり
	5	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/6 褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
p22 埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 2mm大の赤色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 3mm大の赤色粒
p23 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	2	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒
p24 埋土	1	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量

第30図　第６号竪穴住居跡　ピット断面図

ている。南側の石組炉は南北方向に長軸をもつ長方形を呈し、南北53cm、東西89cmを測る。西辺には長さ44cmを測る石が１個置かれ区画されているが、一方、東辺は長さ約20cmを測り西辺と比較すると小さい石を６個用いて区画されている。複式炉を構成する石は合計19個で、前述のとおり細長く平板な石を用いる傾向がみられる。これらの石を取り除いた後には炉の掘方が確認され、規模は検出値ではあるが南北1.28m、東西1.05mを測る。

複式炉の堆積土はＡ～Ｉ層に大別され、Ａ層・Ｉ層はさらにＡ１・Ａ２層、Ｉ１・Ｉ２層に細別される。堆積状況や土性から大きく３つに分けられる。まず１つ目はＡ１・Ａ２～Ｄ層で、炉の使用が終了した後に堆積した層になる。北側の石組炉内にはＡ１・Ａ２・Ｂ層が堆積し、Ａ１層から炭化物が少量含まれているが焼土塊や焼土層などは確認されなかった。南側の石組炉にはＣ・Ｄ層が堆積し、ともに黒褐色を呈する埴壌土を基本土とし炭化物が少量含まれている。２つ目は焼土層のＥ層である。炉の使用時に形成された層で、褐色を呈する埴壌土を基本土とし、南側の石組炉と北側の石組炉を区画する東西に長い石の南面周辺にのみ堆積し、その分布範囲は東西45cm、南北20cmを測る。３つ目は



第６号竪穴住居跡　炉跡　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉内堆積土	A1	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量
	A2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	B	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	C	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト質埴土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量
	D	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量
焼土	E	10YR4/6 褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
炉構築土	F	10YR4/6 褐色軽質砂土	10YR3/4 暗褐色埴壌土40%塊状	軟質、粘性ややあり
	G	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	H	10YR4/4 褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	I1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	7.5YR3/4 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	I2	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒中量

第31図　第６号竪穴住居跡　炉跡　平面図・断面図

Ｆ～Ｉ２層で、炉の構築土である。石組炉の石を据えるために大きく掘り込み、その後石の周辺や炉内に充填された土層になる。Ｆ層は褐色を呈する壌質砂土を基本土としその層中には地山であるマサ土が塊状になったものが含まれている。南側の石組炉における炉使用面はＦ層上面であり層厚も約５cmと薄いことから、炉の使用面を構築することを目的に形成された土層と推測される。

周溝は２条確認されている。周溝①は東壁・北壁・西壁から検出されており、東壁の一部分にはみられない。周溝幅は最大で約55cm、深さは５～20cmを測る。周溝②は周溝①の内側、床面の壁際から約65～70cmの位置で確認され東壁から北壁、西壁と断続的に残存している。周溝幅は最大で約18cm、深さは約18cmを測る。これらの２条の周溝の検出位置や、後述するピット配置などから本住居跡は建て替えをしていると考えられ、最初に構築された住居跡よりも全ての壁において約70cm拡張させたと推測される。

ピットは24基確認されている。平面形は円形・不整円形・楕円形・不整楕円形を呈し、長径14cm～92cm、短径12cm～74cmを測る。断面観察による柱痕跡などからｐ２・６・８・11～14・19・20は柱穴と考えられる。ピット埋土による観察では建て替えの新旧を明確に区別することができなかったが、床面での平面分布状況から建て替え前の柱穴はｐ２・12・19と思われ複式炉を囲むように配されている。建て替え後の柱穴はｐ６・８・11・13・14・20と思われ壁際に沿って配されている。ｐ８・11・20については建て替え前の周溝を切って掘られている。この他ｐ21は長径92cm、短径74cmを測る規模の大きなピットであるがその構築目的については不明である。

遺物は縄文土器・石鏃・掻器・磨製石斧・磨石・凹石・石皿が出土している。

縄文土器は3,258点出土し、その中で167点を図示した。１～11は床面から出土したものである。１・２は口縁部の破片で、１はＬＲ単節縄文の地文、２はＲＬ単節縄文の地文の上に沈線が引かれている。３は床面中央でつぶれた状態で出土している。胴部から口縁部が残存し、口径（24.0cm）、器高（23.5cm）を測る。胴部は膨らまずに直線的に立ち上がり口縁部のみやや外側に開く。器面全体にＬＲ単節縄文が施文されている。４は底径４cm、器高（5.8cm）を測る小型の土器で底部から胴部の一部分が残存している。ＲＬ単節縄文を地文としＵ字形の沈線がみられる。５～11は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文（６・11）・ＬＲ単節縄文（５・９）・Ｌ無節縄文（８）・ＲＬＲ複節縄文（10）が施文されている。７は摩滅がひどく文様は不明である。10は胎土が密で器面は暗赤褐色（５ＹＲ3/6）を呈する。

12～28は住居跡内ピットから出土したものである。12～15はｐ８から出土し、12・13は２層、14・15は１層出土である。12は口縁部の破片で外側に向かって緩やかに開きＬＲ単節縄文を地文とする。13の地文はＲＬ単節縄文と思われるが摩滅がひどく不明である。14は横位の沈線とその上に棒状のものを用いたと思われる６～７mm×５mmの刺突痕が３箇所確認される。15はＬＲ単節縄文を地文とするものである。16・17はｐ12の１層から出土したもので、16はＲＬ単節縄文、17はＬＲ単節縄文を地文とする。18はｐ13の１層から出土し、摩滅のため文様などは不明である。19～22はｐ19の１層から出土し、ＲＬ単節縄文（19・22）及びＬＲ単節縄文（21）を地文とする胴部の破片である。22には結節がみられ、20には文様はみられない。23～26はｐ20の１層から出土したものである。23は縦方向の沈線によって区画された中の地文が磨り消されている。24～26は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文（24・26・27）を地文とする。25は摩滅のため不明である。27・28はｐ21の１層から出土している。27はＲＬ単節縄文を地文とし、28はＲＬＲ複節縄文の地文の上に縦位の沈線が引かれ、その間の地文が磨り消されている。

29・30は11層から出土している。29は胴部から口縁部が残存し、胴部は緩やかに膨らみ、口縁部は少し外反気味に立ち上がる。胴部にはＲＬ単節縄文が施文された縄文帯が縦位にみられ、区画する沈線の外側はナデ調整により地文が磨り消されている。30は胴部の破片で、ＬＲ単節縄文を地文とし縦

位の沈線が２条施文されている。

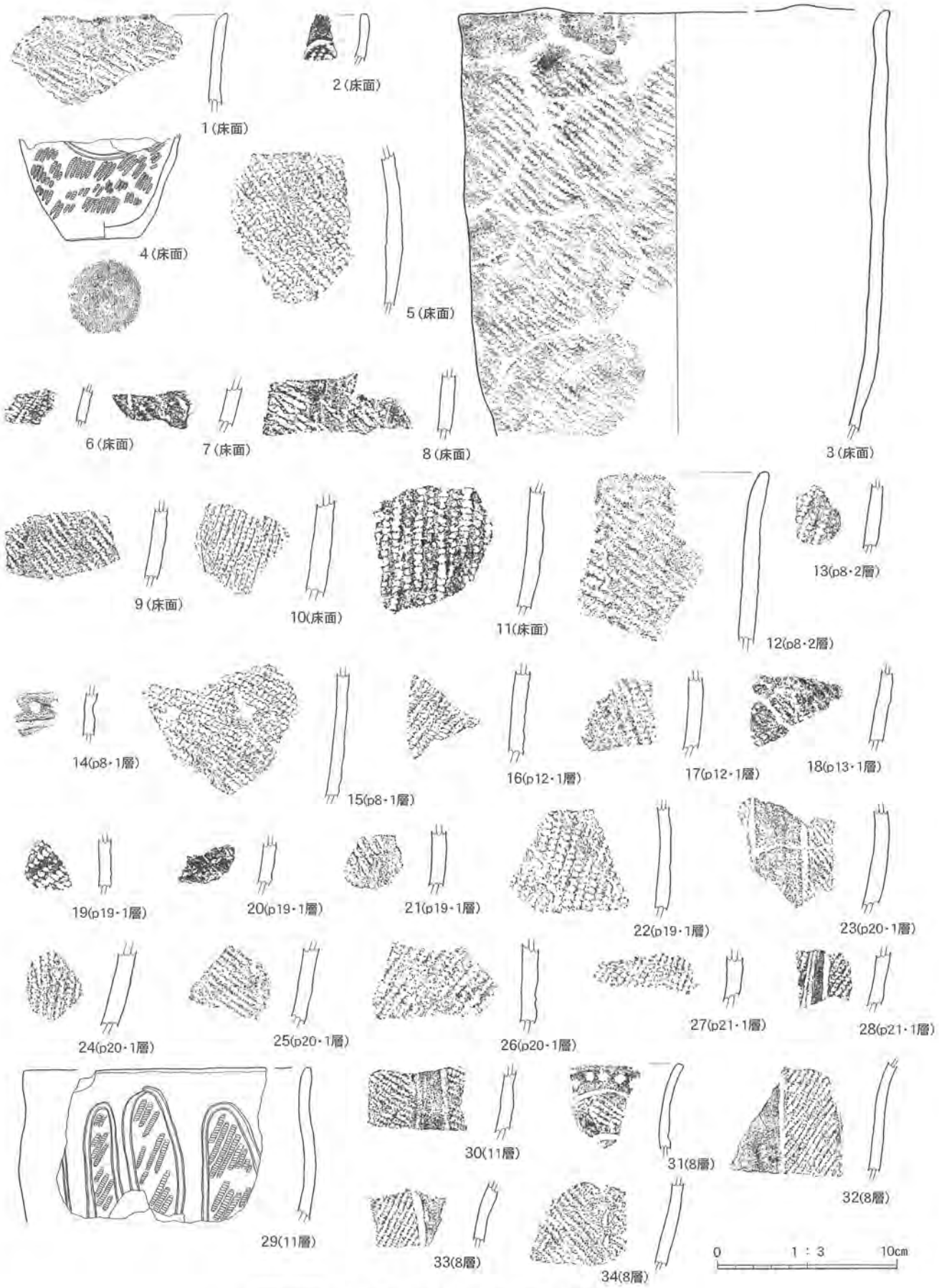
31～41は８層から出土したもので、31は口縁部の破片、32～40は胴部の破片、41は底部の破片である。31の口縁部は緩やかに外反し、地文である縄文の上に∩字形を呈する沈線が引かれている。その沈線の上には４㎜×４㎜の棒状のものを用いた刺突痕が４箇所観察される。32・33も同様に縦位の沈線によって区画された中は地文であるＲＬ単節縄文が磨り消されている。34～40はＲＬ単節縄文（37)、ＬＲ単節縄文（34～36・38・39)、ＲＬＲ複節縄文（40）を地文とする。34～36には結節がみられる。41は底径3.5㎝を測る小型の土器である。底部の木葉痕はナデ調整により消されている。

42～149は５層から出土したものである。42～82は口縁部の破片で、42～51には横方向の沈線が１条ないし２条引かれており、その沈線と沈線との間には径３～５㎜の刺突が施されている。刺突痕の底面は全て中央部が盛り上がったものであるため、刺突をした道具は真ん中がくり貫かれたもしくは中空で棒状のものを用いたと推測される。52～58は地文である縄文の上に沈線を引き区画された縦位の縄文帯が施文されている。52は地文を磨り消さずに沈線のみで楕円文を表現している。53には縄文帯以外のナデ調整されたところに刺突痕がみられる。59～82はＲＬ単節縄文（60・66・69・70・79)、ＬＲ単節縄文（59・61～65・68・71・73～76・78・80）を地文とするもので、71・72・76には結節がみられる。67・72・77は文様不明で、81・82は無文である。69は胴部から口縁部まで残存している土器で、胴部はあまり膨らまず口縁部にかけて緩やかに外反している。83は42～51と同様に横位の沈線と刺突が施文されている。84～101は地文である縄文が縦位や横位、∩字形などの沈線により区画され、その周囲が磨り消されている。88は沈線と沈線の間に1.5㎜×３㎜の刺突が施されている。102～144は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文（102・106・107・111・112・114・115・118・122・125・128・132～134・141・144)、ＬＲ単節縄文（104・105・108～110・113・116・117・119～121・124・127・129～131・135～140・143)、ＲＬＲ複節縄文（103・142)、Ｌ無節縄文（123・126）を地文とする。145～149は底部の破片で、網代痕（147・149)、木葉痕（148）が観察される。145・146はナデ調整され、底部中央部分がへこんでいる。

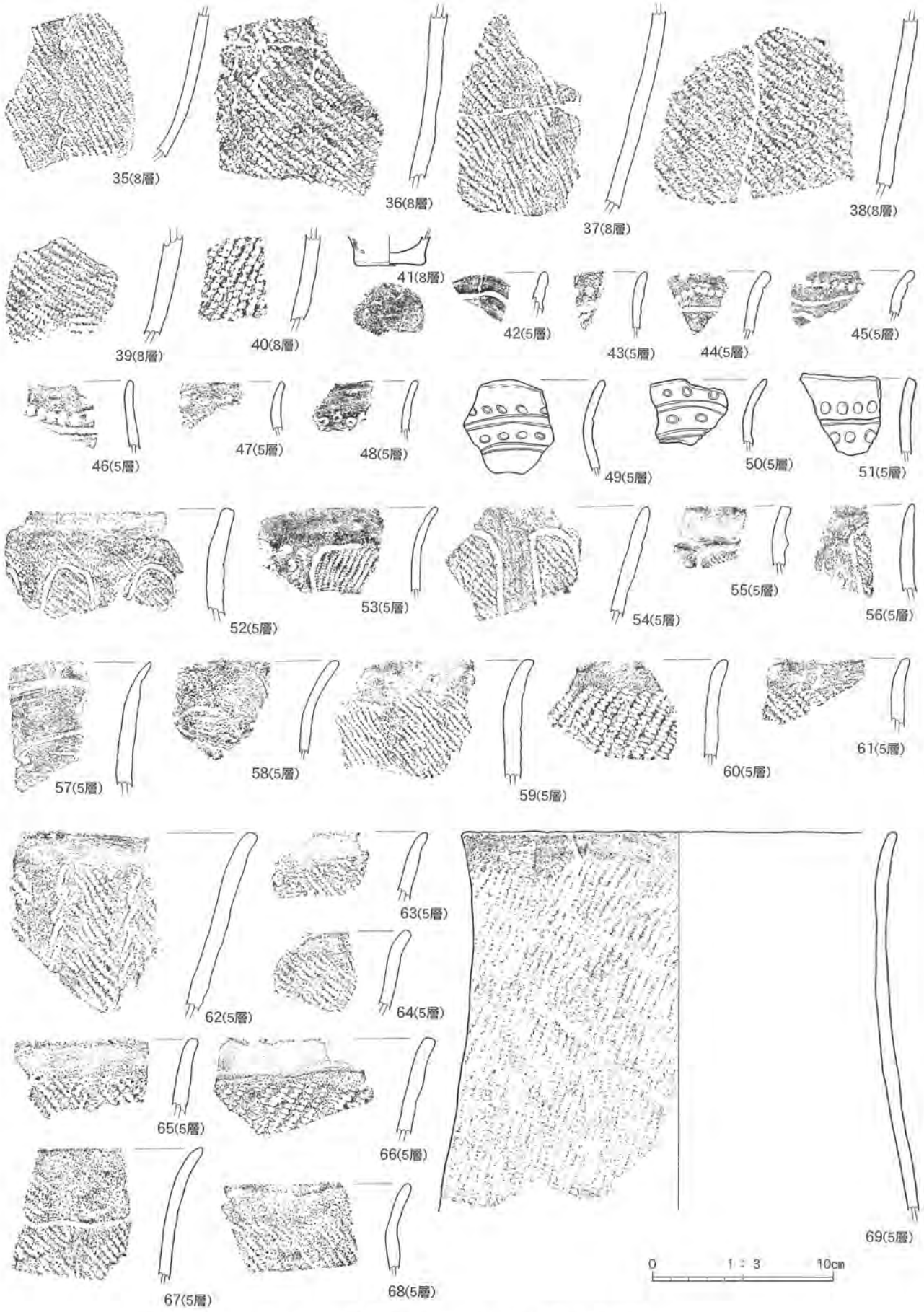
150～157は４層から出土し、150は口縁部の破片、151～155は胴部の破片、156・157は底部の破片である。150の口縁部は直線的に外側に向かって開くものでＬＲ単節縄文が矢羽根状にみられる。151・152は縦位の沈線と波状の沈線が施文されるもので器厚が薄く胎土や文様などから同一個体の可能性がある。153は横位の沈線とその中に地文であるＲＬ単節縄文がみられる。154・155はＲＬ単節縄文（154)、ＬＲ単節縄文（155）を地文とし、154には結節がみられる。156の底部には木葉痕が残り、157の底部は残存率が低く不明である。

158～167は２層から出土したもので、158・159は口縁部の破片、160～166は胴部の破片、167は底部の破片である。158の口縁部は直線的に立ち上がり、地文には結節がみられる。159は緩やかに外反するもので２条の隆帯が横方向に貼り付けられている。ＬＲ単節縄文を地文とする。160～164は横位及びＵ字形に沈線が引かれ縄文帯を描出するものである。165・166はＲＬ単節縄文を地文とするもので、165には結節がみられる。167は底径5.1㎝の小型の土器で、ＬＲ単節縄文を地文とし底部近くまで施文されている。

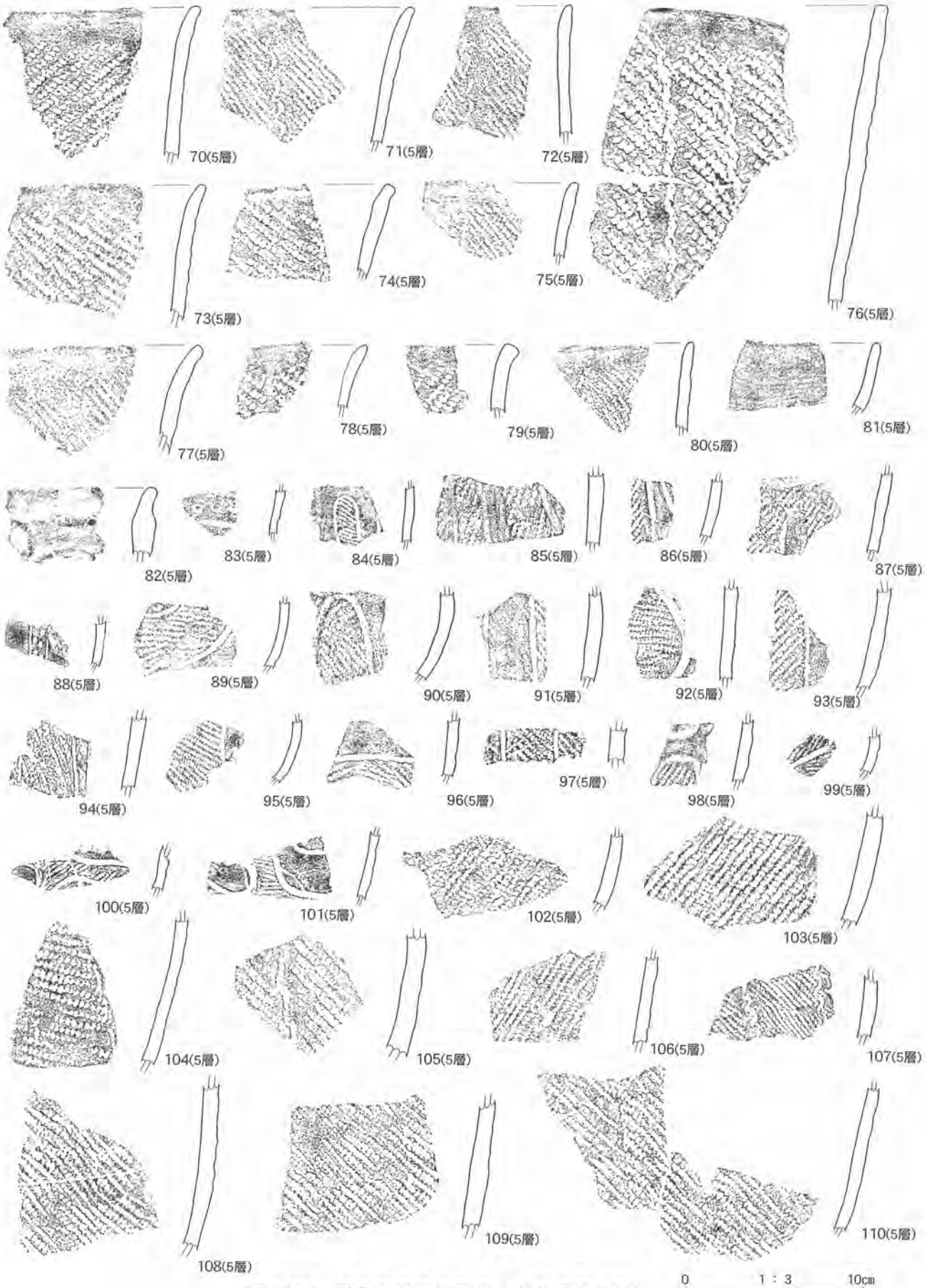
168～177は石器である。168は凹基無茎の石鏃で、摩滅がひどく細部調整の切り合いなどを観察できなかった。169は掻器で、側縁部に部分的な細部調整がみられる。断面形はＳ字状を呈している。170は磨製石斧の欠損品である。171は小形の磨製石斧で、ｐ２の１層から出土している。ほぼ完形



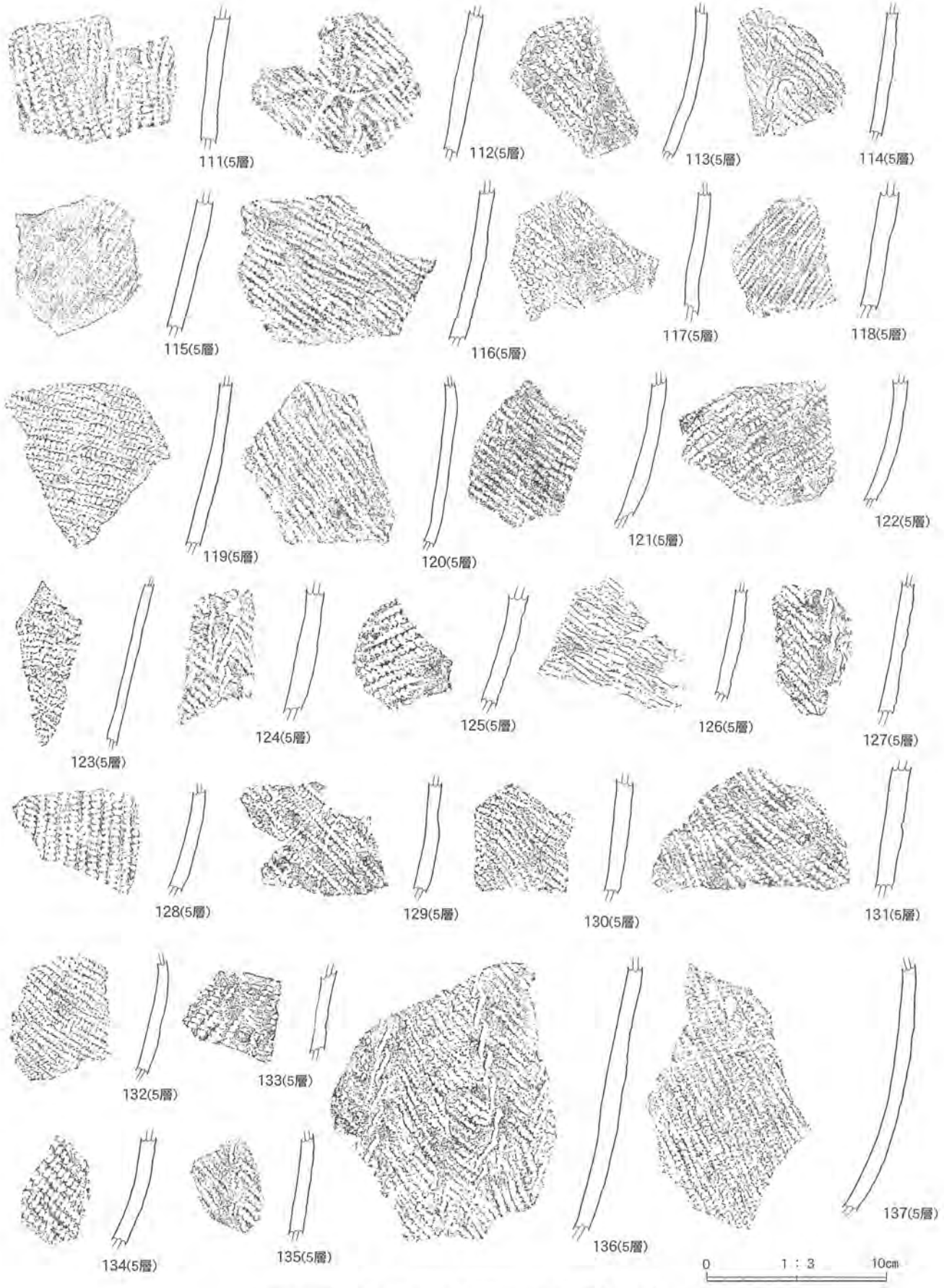
第32図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（１）



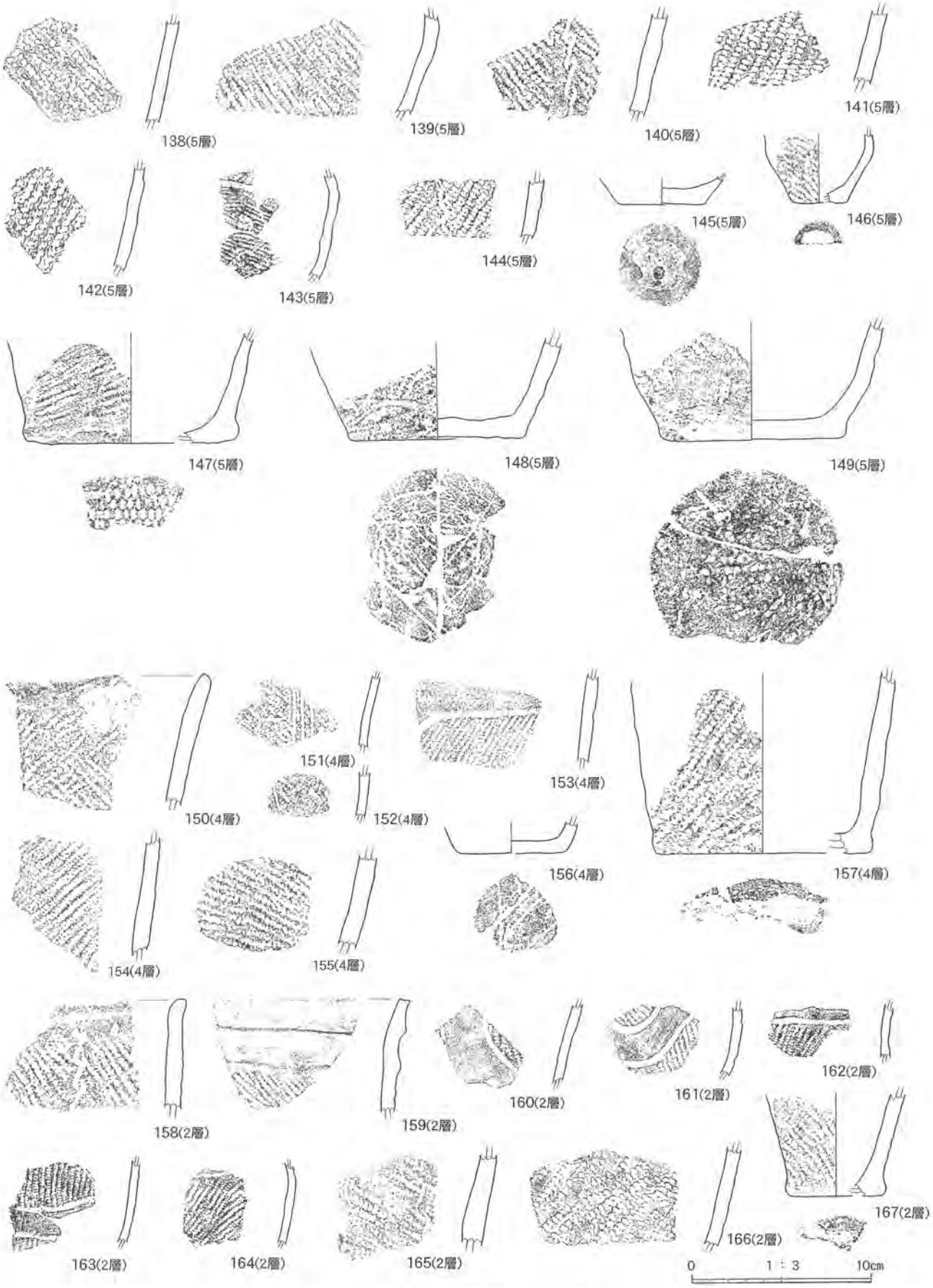
第33図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（２）



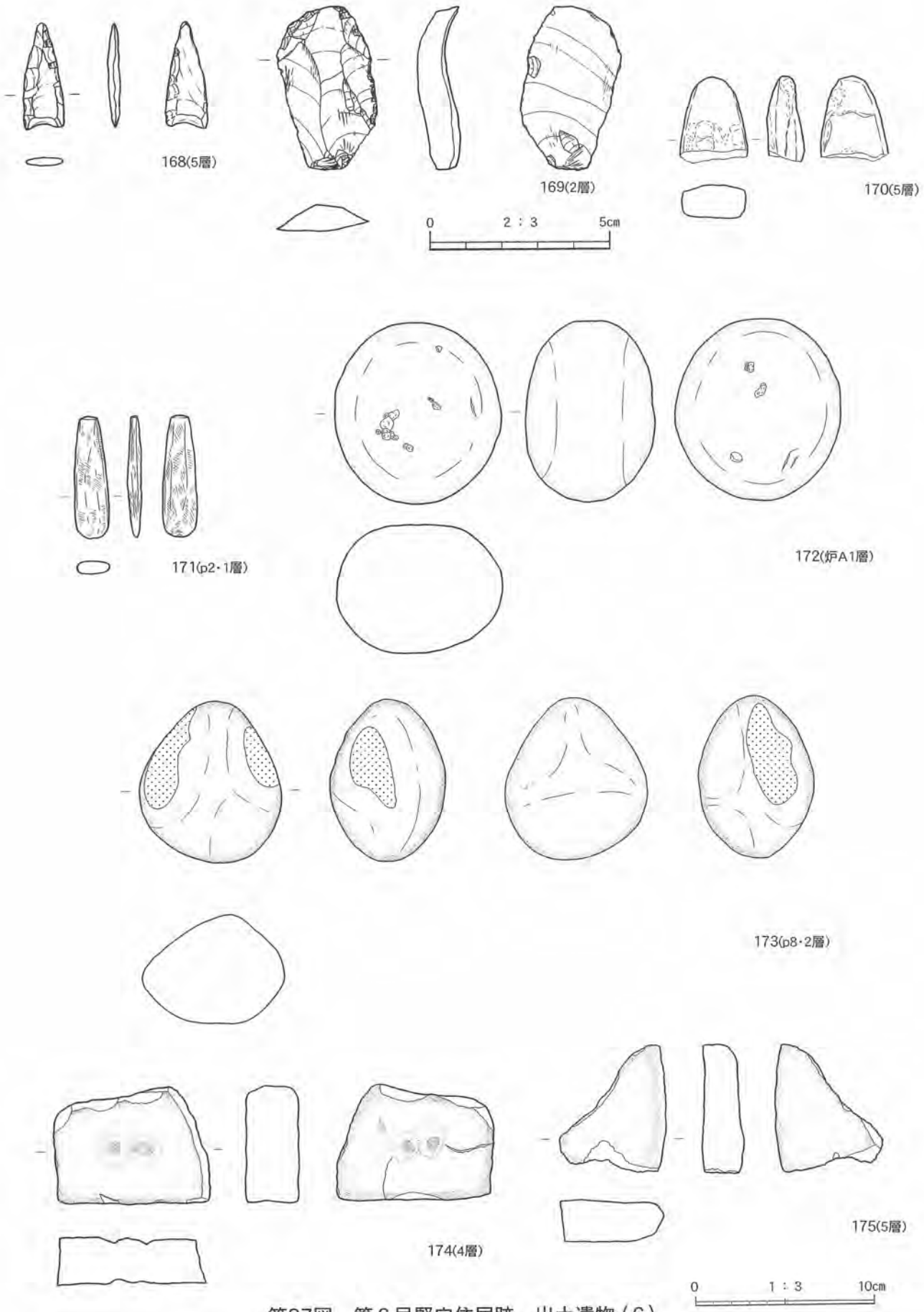
第34図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（３）



第35図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（４）



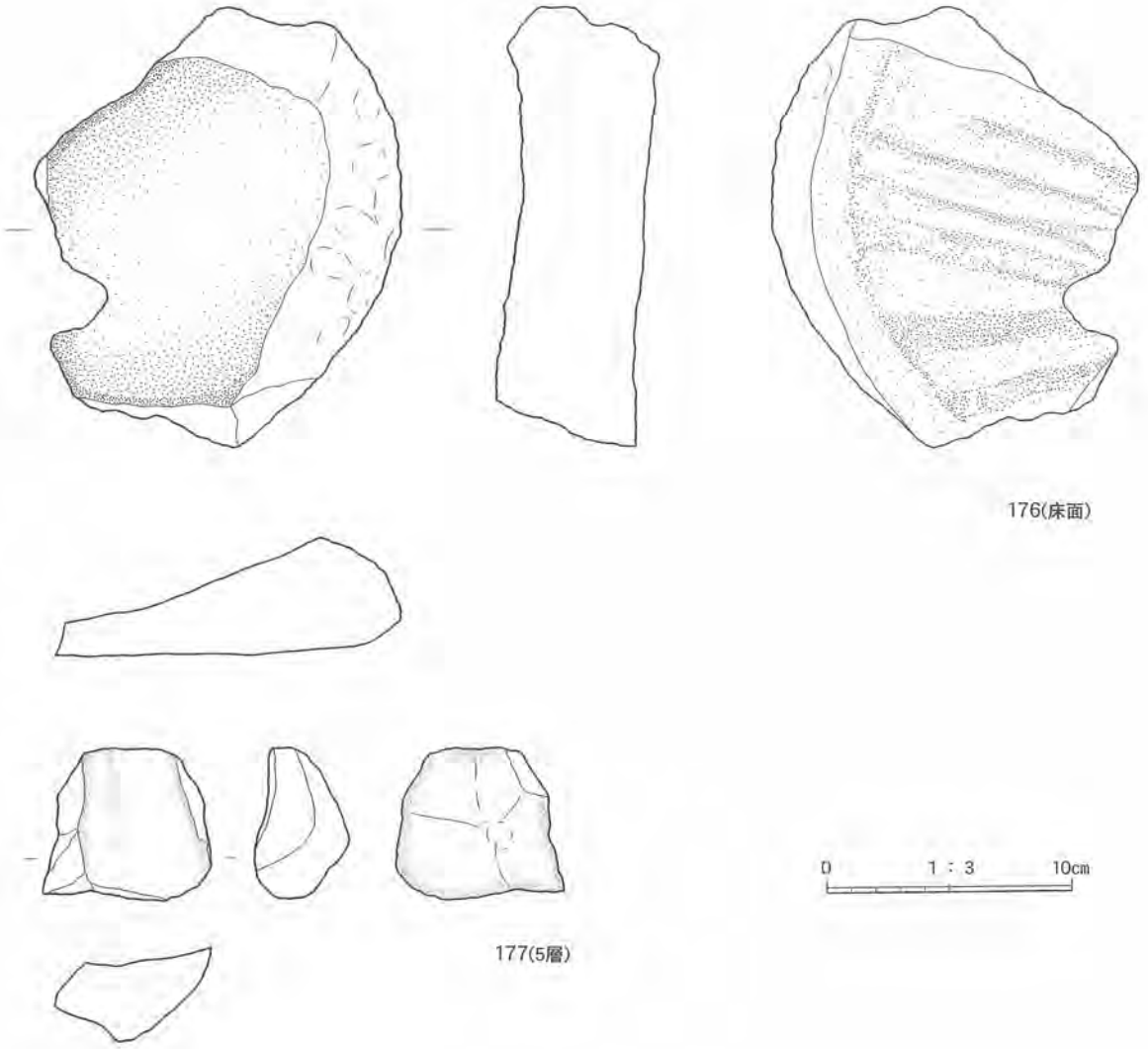
第36図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（５）



第37図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（６）

であるが先端部の一部が欠損している。擦痕が全面にみられる。172は複式炉の北側石組炉Ａ１層から出土している。石表面に人為的な痕跡がみられないため石器としては捉えられないが、炉跡内部から出土していることから炉廃棄後に意図的に置いたものと考えられ、特に図示した。球形を呈し最大長10.1cm、最大幅9.3cm、最大厚7.1cm、重さ827.7ｇを測る。173は両縁部に磨面をもつ磨石で、不定形の球形を呈している。174は凹石で、両面に２箇所ずつ凹みがみられる。175～177は石皿である。175は欠損品で片面にのみ機能面がある。176は大型の石皿で、両面に機能面がみられ使用した際にできた擦痕の単位が５条観察される。177は片面に機能面をもつ石皿である。

第６号竪穴住居跡は楕円形を呈し複式炉を有する住居跡で、柱穴や周溝の配置などから建て替えが行われたと考えられる。住居跡の時期は床面やピット内、床面直上層である11層から縦位の縄文帯が施文された土器が出土していることや重複関係から縄文時代中期末葉と考えられる。



第38図　第６号竪穴住居跡　出土遺物（７）

（2）土坑

土坑は７基検出されている。縄文時代中期後半の大木８ｂ式期のものが１基、中期末葉のものが５基、大きく縄文時代として捉えられるものが１基確認されている。

第１号土坑（ＳＫ１）（第39・41図、写真図版43・44・83）

第１号土坑は調査区中央部、第１号竪穴住居跡の北側で検出され、**遺構検出面**は地山面である。第１号竪穴住居跡と重複し、本土坑の方が新しい。本土坑及び第１号竪穴住居跡の上層には粗い砂が含まれるマサ土の二次堆積がみられ、第１号竪穴住居跡廃棄・埋没→本土坑廃棄・埋没→マサ土堆積の順に堆積したと考えられる。

平面形は不整な円形を呈し、**規模**は長径1.4m、短径1.3m、深さ0.54mを測る。底面はくぼんでいる。断面形は、底面が検出面上場よりも約20cm外側に広がる台形状を呈しており、いわゆるフラスコ状土坑といわれているものである。

堆積土は１・２層に大別され、さらに１ａ・１ｂ層、２ａ・２ｂ層に細別される。１ａ・１ｂ層は黒褐色を呈するシルト質埴土で、１～２㎜大の小礫が混入している。２ａ・２ｂ層は暗褐色を呈するシルト質埴土で地山と極めて類似した土色である。２ｂ層は土坑底面中央部にのみ堆積し、しまりがややある。各層の層理面は底面に対して平行にみられ、さらに壁や土坑周辺などからの崩落土の堆積がみられないため、人為的な埋土の可能性が考えられる。

遺物は縄文土器の破片が99点出土し、その中で14点を図示した。１・２は２ａ層から出土したもので、１は地文であるＬＲ単節縄文が縦位の沈線により区画されている。２は摩滅しているがＲＬ単節縄文を地文とする。３～13は１ｂ層から出土し、４は口縁部の破片で直線的に立ち上がりＲＬ単節縄文を地文とする。３・５～９は胴部の破片で、３は縦位の沈線によって区画された地文であるＬＲ単節縄文と刺突痕がみられる。刺突痕は上方から器面に押し付けたもので、痕跡から幅約２㎜の棒状のものを用いたと考えられる。５～９はＲＬ単節縄文（６～９）、ＬＲ単節縄文（５）を地文とする。４と８は胎土や地文の施文方法などから同一個体の可能性がある。ともに表面には剥離が観察される。10～13は底部の破片である。10・12・13の底部は中央部分がへこんでおりナデ調整されている。11には木葉痕がみられるが最終的にナデ調整したために不明瞭になっている。14は１ａ層から出土し、底部の破片である。小型の土器で底径は3.4cmを測り、器面には輪積痕が残る。

第１号土坑は、２ｂ層から縦位の沈線で区画された縄文帯をもつもの（１）、１ｂ層から同様の縄文帯とさらに刺突を伴うもの（３）が出土している。さらに縄文時代中期末葉の第１号竪穴住居跡と重複しており本土坑の方が新しい。これらの遺物出土状況から土坑の時期は縄文時代中期末葉と考えられ、その中でも第１号竪穴住居跡よりも新しい時期に位置付けられる。

第２号土坑（ＳＫ２）（第39・41図、写真図版45・83）

第２号土坑は調査区西部、第６号竪穴住居跡の北西約0.5m地点で検出され、他の遺構との重複関係はない。**遺構検出面**は地山面である。

平面形は楕円形を呈し、**規模**は長径0.94m、短径0.74m、深さ0.06mを測る。層厚は薄いが、底面に凹凸がみられ、壁は35°～40°と緩やかに立ち上がる。**堆積土**は１層で、黒褐色シルト質埴土を基本土とし炭化物が少量含まれる。堆積状況から自然堆積と思われる。

遺物は縄文土器の破片が４点出土し、その中で１点を図示した。15は１層から出土し、胴部の破片と思われる。表面は摩滅しているが、縦位の沈線がかすかに観察される。

第２号土坑は重複関係や時期を決定する遺物がないことから大きく縄文時代のものと捉えられる。

第３号土坑（ＳＫ３）（第39・41図、写真図版46・83・84・94）

第３号土坑は調査区北西部、第６号竪穴住居跡の北約１m地点で検出され、Ｐ17と重複し、本土坑の方が古い。**遺構検出面**は地山である。

平面形は不整な楕円形を呈し、**規模**は長径1.33m、短径0.84m、深さ0.16mを測る。底面は平坦で、北から南に向かって約15°で傾斜している。北壁では約65°と急激に立ち上がるが、南壁では約20°と緩やかに立ち上がる。**堆積土**は１・２層に大別され、１層はさらに１ａ・１ｂ層に細別される。１ａ・１ｂ層は硬質で粘性があり、２層はそれに比してやや柔らかく１㎜大の小礫が含まれている。堆積状況から自然堆積と思われる。

遺物は縄文土器・掻器が出土している。縄文土器は15点出土し、その中で６点を図示した。全て１ａ層から出土したものである。16・17は口縁部の破片でともに緩やかに外反する。胴部には沈線で区画された∩字形の縄文帯がみられる。18～21は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文（18・20・21）及びＬＲ単節縄文（19）を地文とする。18・20・21は同様の胎土・文様であるため同一個体である可能性が高い。

22は掻器で、細部調整は部分的に施されるにとどまり、大きな剥離面が残っている。腹面には自然面も残存している。

第３号土坑の時期は、２点のみであるが∩字形の沈線に区画されている縄文帯が施文される土器が出土していることから縄文時代中期末葉と考えられる。

第４号土坑（ＳＫ４）（第39・42図、写真図版47・84）

第４号土坑は調査区西部、第６号竪穴住居跡の北約0.5m地点で検出され、縄文時代後期の遺物包含層２層よりも下層で確認されている。

平面形は北壁がやや出張る不整な楕円形を呈し、**規模**は長径0.73m、短径0.54m、深さ0.07mを測る。底面は丸底状を呈し、壁は約50°と緩やかに立ち上がる。**堆積土**は１・２層に大別され、１層はさらに１ａ・１ｂ層に細別される。１ａ層には炭化物が多量に含まれ１ｂ層・２層にも少量ないし微量の炭化物がみられる。

遺物は縄文土器が出土している。縄文土器の破片は40点出土し、その中で７点を図示した。全て１ａ層から出土している。23～25は口縁部の破片で緩やかに外反する。23はＲＬ単節縄文を地文とし口縁部周辺は横方向のナデ調整がみられる。24・25は摩滅がひどく文様は不明である。26～28は胴部の破片で、26は破片の上方が緩やかに外側に向かって屈曲していることから口縁部近くの破片と思われる。∩字形を呈する縄文帯の一部が観察され、その中には地文であるＬＲ単節縄文がみられる。27・28はともにＬＲ単節縄文を地文とし結節がみられる。29は小型土器の底部破片で推定底径2.8㎝である。器面にはＬＲ単節縄文が施文され、節の大きさは約１㎜と小さい。

第４号土坑の時期は、遺物包含層との重複関係から縄文時代後期以前で、さらに∩字形の沈線に区画された縄文帯が施文されている土器が出土していることから縄文時代中期末葉と考えられる。

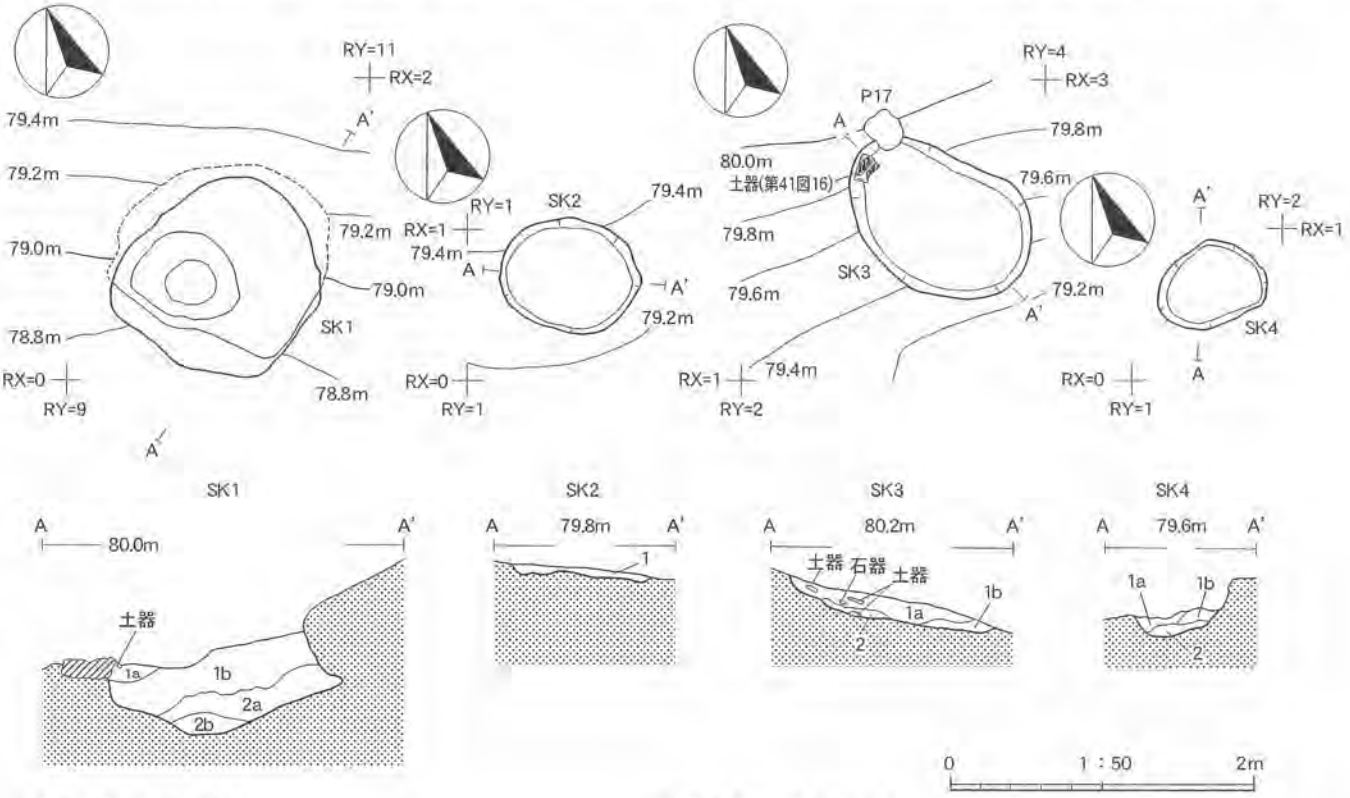
第５号土坑（ＳＫ５）（第40・42・43図、写真図版48～50・84・85・94）

第５号土坑は調査区西部、第６号竪穴住居跡内に構築された複式炉の北東側で検出されている。**遺構検出面**は第６号竪穴住居跡の床面である。複式炉と一部重複しており、本土坑の方が古い。

平面形は楕円形を呈し、**規模**は長径1.78m、短径1.38m、深さ1.84mを測る。底面は平坦で、断面形は底面ほど広くなり、壁の立ち上がりは内側に反るような撥形を呈しており、１号土坑と同様フラスコ状土坑といわれているものである。底面の長径は最大で2.16mを測る。

堆積土は１層から12層に大別され、９層はさらに９ａ層～９ｃ層に細別される。三角堆積などの自然に崩落した痕跡はみられず、人為的な堆積の可能性が考えられる。

遺物は縄文土器・石鏃・削器・掻器・箆状石器・磨石が出土している。縄文土器の破片は62点出土し、その中で19点を図示した。30～39は土坑の最下層である12層から出土している。30～32は口縁部の破片で、ともに緩やかに外反する。30には∩字形の沈線で区画された縄文帯、31には30と同様の縄文帯にさらに隆帯で表現された渦巻文がみられる。縄文帯の中はＲＬＲ複節縄文である。32は表面が明赤褐色（2.5ＹＲ5/6）を呈している。文様はみられない。33～39は胴部の破片である。33はＲＬ単



第１号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1 a	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の小礫
	1 b	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の小礫
	2 a	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/6 褐色シルト質埴土10%塊状・斑状	硬質、粘性あり
	2 b	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/4 褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性ややあり

第２号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量

第３号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1 a	10ＹＲ2/3 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ5/6 黄褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒
	1 b	10ＹＲ2/2 黒褐色シルト質埴土	10ＹＲ4/6 褐色シルト質埴土1%塊状	硬質、粘性あり
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の小礫

第４号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1 a	10ＹＲ2/2 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/3 暗褐色埴壌土30%塊状	硬質、粘性あり、炭化物多量 1mm大の白色粒少量
	1 b	10ＹＲ2/3 黒褐色埴壌土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり、炭化物多量 1mm大の白色粒少量
	2	10ＹＲ3/3 暗褐色シルト質埴土	10ＹＲ3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり、炭化物多量 1mm大の白色粒少量

第39図　第１号～４号土坑　平面図・断面図

節縄文を地文とし縦位の沈線が施文されている。34にはＲＬ単節縄文を地文とする縦位の縄文帯がみられるが、摩滅がひどく不明瞭である。35～39はＲＬ単節縄文（36・38）及びＬＲ単節縄文（37）を地文とし、35・39は摩滅がひどく文様は不明である。

41は８層から横倒しの状態で出土し、土器内部には土が混入していなかった。口縁部と底部の一部が欠損しているほかはほぼ完形で、口径11cm、器高13.5cm、底径（５cm）を測る。ＬＲ単節縄文を地文とし、表面の一部は剥離している。

40は５層から出土し、底部から胴部にかけて残存している。胴部上方で最大径となり、さらに緩やかに外反していることから口縁部近くまで残存していると考えられる。器高（17.8cm）、底径8.2cmを測る。胴部には∩字形及び縦位の直線的な沈線が引かれ、沈線で区画された中には地文であるＬＲ単節縄文がみられる。底部はナデ調整である。

42は２層から出土し、口縁部の破片である。立ち上がりは内湾し、口縁部下には∩字形の沈線が引かれ、その中にはＬＲ単節縄文がみられる。

43～48は１層から出土している胴部の破片である。43はＬＲ単節縄文、48はＲＬＲ複節縄文を地文とし、縦位の沈線が引かれ区画された中は地文が磨り消されている。44～47はＲＬ単節縄文（45）及びＬＲ単節縄文（44・46・47）を地文とする。45は器厚が最大で約1.2cmを測り下方には文様がみられないことから底部近くの破片と思われる。46・47は胎土や文様などから同一個体の可能性が高い。

49～54は石器である。49は凹基無茎の石鏃で、一部欠損している。両面縁部に丁寧な調整剥離が施されている。50は撥形を呈する掻器で、腹面の側縁部に細部調整が丁寧に施され刃部を作り出している。51は箆状石器で、腹面の側縁部には丁寧な細部調整が施され、背面には一次剥離面が大きく残っている。52は削器で、長方形を呈しているがやや反っている断面形は腹面の一次剥離面の稜がみられるため三角形を呈している。側縁部に細部調整が丁寧に施され刃部を作り出し、中央部には一次剥離面が大きく残っている。53・54は両側縁部に磨面がある磨石である。

第５号土坑の時期は、縄文時代中期末葉の第６号竪穴住居跡と重複し、さらに土坑底面からは縦位の縄文帯が施文されている土器が出土していることから、縄文時代中期末葉と考えられ、さらに第６号竪穴住居跡よりも古い時期に位置付けられる。

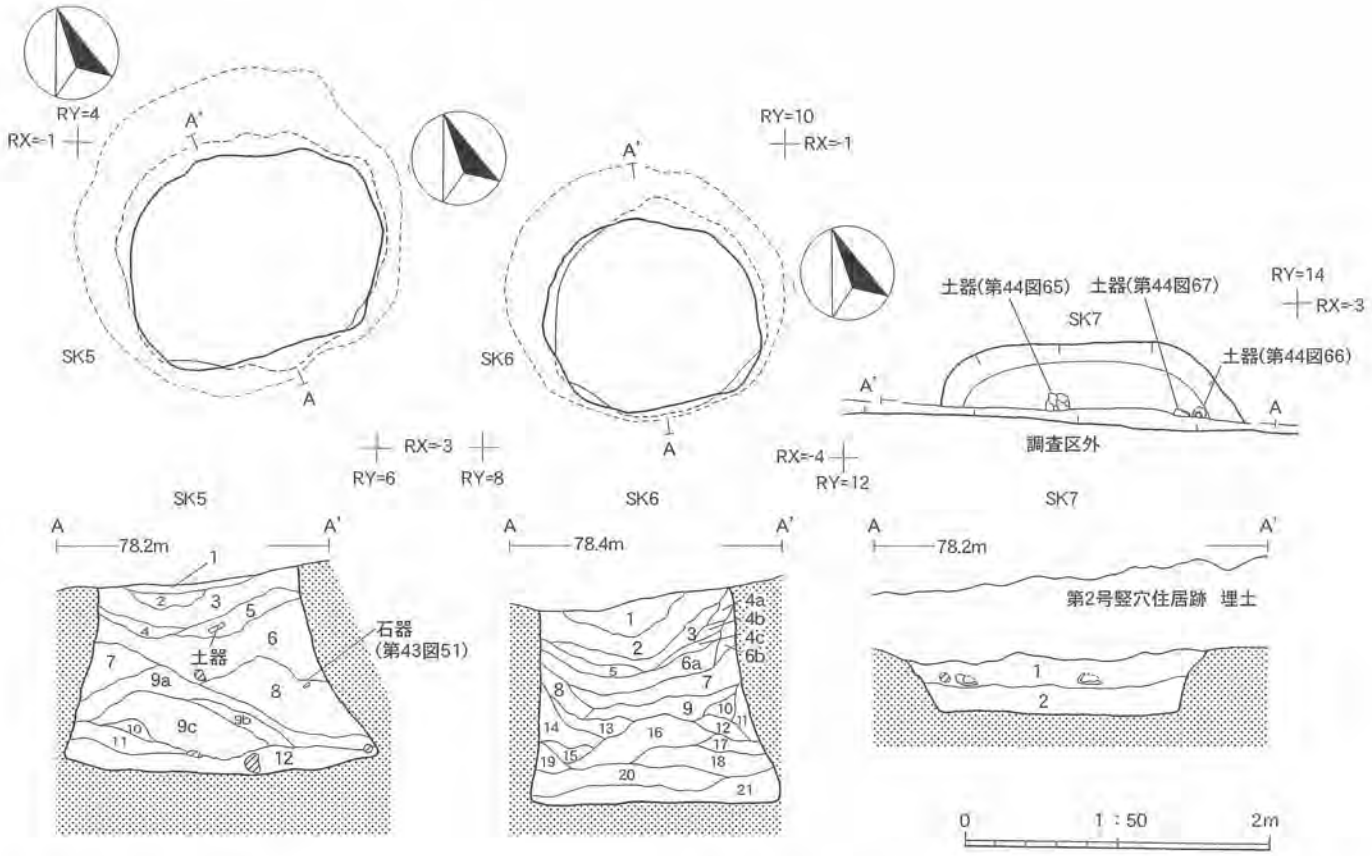
第６号土坑（ＳＫ６）（第40・44図、写真図版51・52・85）

第６号土坑は調査区中央部、第１号竪穴住居跡内に構築された炉の北西側で検出されている。**遺構検出面**は第１号竪穴住居跡の床面である。炉の一部と重複しており、本土坑の方が古い。

平面形は東西に長い不整な円形を呈し、**規模**は長径1.44m、短径1.26m、深さ1.39mを測る。底面は平坦で、断面形から第１号土坑・第５号土坑と同様にフラスコ状土坑といわれているものである。底面の長径は最大で1.83mを測る。

堆積土は１層～21層に大別され、その中で４層・６層はさらに４ａ層～４ｃ層、６ａ・６ｂ層に細別される。９層は褐色を呈する埴壌土で塊状のマサ土が多量に含まれている。

遺物は縄文土器の破片が27点出土し、その中で９点を図示した。全て土坑最下層である21層から出土している。55・56は口縁部の破片で、55は緩やかに外反し、56は内湾気味に立ち上がる。55はＬＲ単節縄文を地文とし、56は∩字形に引かれた沈線により区画された中にＲＬ単節縄文がみられる。57～61はＬＲ単節縄文（57・58・60・61）とＲＬＲ複節縄文（59）を地文とし、縦位及び∩字形に引か



第５号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土40%層状	硬質、粘性あり 炭化物少量、1mm大の白色粒少量
	2	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量
	3	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/8 黄褐色埴壌土20%塊状 10YR2/2 黒褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 炭化物微量、1mm大の白色粒少量
	4	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	5	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量、1mm大の白色粒少量
	6	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土30%塊状 10YR2/1 黒色埴壌土20%塊状	硬質、粘性あり 白色粒微量、礫、炭化物微量
	7	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	8	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状 10YR4/6 褐色埴壌土10%塊状 10YR2/1 黒色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 白色粒少量
	9a	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土20%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物微量
	9b	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり
	9c	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 礫、炭化物微量
	10	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	11	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり
	12	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 礫

第７号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1	10YR2/2 黒褐色砂質埴壌土	10YR2/3 黒褐色砂質埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	2	10YR2/3 黒褐色砂質埴壌土	10YR2/2 黒褐色砂質埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性なし

第６号土坑　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
土坑埋土	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒微量
	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性ややあり 炭化物微量、1mm大の白色粒微量
	3	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土20%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒微量
	4a	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	4b	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	4c	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	5	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量
	6a	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土20%塊状 10YR3/3 暗褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	6b	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量
	7	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土1%塊状 10YR3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	8	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	9	10YR4/4 褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土15%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	10	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土30%塊状	やや硬質、粘性なし
	11	10YR4/6 褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	12	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/1 黒色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	13	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性なし
	14	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	15	10YR5/6 黄褐色埴壌土	10YR2/1 黒色埴壌土30%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	16	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR4/4 褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	17	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	18	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/2 黒褐色埴壌土1%塊状	やや硬質、炭化物少量
	19	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 黄色粒少量
	20	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量
	21	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR5/6 黄褐色埴壌土3%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物少量

第40図　第５号～７号土坑　平面図・断面図

れた沈線により区画された中を磨り消して文様を作り出している。62・63はＬＲ単節縄文を地文とするものでともに摩滅がひどく文様は不明瞭である。

第６号土坑の時期は、縄文時代中期末葉の第１号竪穴住居跡と重複し、さらに土坑底面からは縦位の縄文帯が施文される土器が出土していることから、縄文時代中期末葉と考えられ、さらに第１号竪穴住居跡よりも古い時期に位置付けられる。

第７号土坑（ＳＫ７）（第40・44図、写真図版53・54・86・95）

第７号土坑は調査区南東部、第２号竪穴住居跡内に構築された石囲炉の南側で検出されている。**遺構検出面**は第２号竪穴住居跡の床面である。石囲炉の一部と重複しており、本土坑の方が古い。

本土坑は、第２号竪穴住居跡同様、壁際で検出され大半は調査区外に延びている。検出した範囲での**平面形**は東西に長い楕円形を呈している。**規模**は長径（2.00m）、短径（0.44m）、深さ（0.32m）を測る。底面は平坦で、壁は55°～70°で立ち上がる。**堆積土**は１・２層に分けられ、ともに黒褐色砂質埴壌土である。

遺物は縄文土器・磨石が出土している。縄文土器の破片は19点出土し、その中で４点を図示した。全て１層から出土している。64は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文を地文とし隆帯による渦巻文や縦方向に延びる波状の隆帯が施されている。また隆帯をなぞるように沈線が施文されている。65は器厚が約５㎜と薄く底部の一部が欠損している。口径13.1㎝、器高15.9㎝、底径6.0㎝を測る。胴部は膨らまずに口縁部に向かって緩やかに開く。ＬＲ単節縄文を地文とし、口縁部の地文はナデにより磨り消されている。口縁部と胴部との境には横方向の沈線が２条引かれ、その間には向かって右から左の方向へ棒状の道具による１～２㎜の刺突が施される。その下部には沈線で表現された渦巻文に連結するように横方向及び縦方向の沈線が３条を１単位として施文されている。66は器高8.4㎝、底径4.6㎝を測る小型の土器である。底部から胴部の一部が残存している。ＲＬ単節縄文を地文とし沈線により渦巻文が表現されている。また渦巻文を基点として縦方向の沈線もみられる。67は器高（13.3㎝）、底径6.2㎝を測り、口縁部が欠損している。胴部はＬＲ単節縄文を地文とし、その上面には３条１単位の縦方向の波状沈線や横方向の沈線が引かれている。

68は片側縁部に磨面をもつ磨石である。

第７号土坑の時期は、縄文時代中期末葉の第２号竪穴住居跡と重複し、さらに１層中からは渦巻文などをもつ大木８ｂ式の土器が出土していることから、縄文時代中期後半の大木８ｂ式期と考えられる。

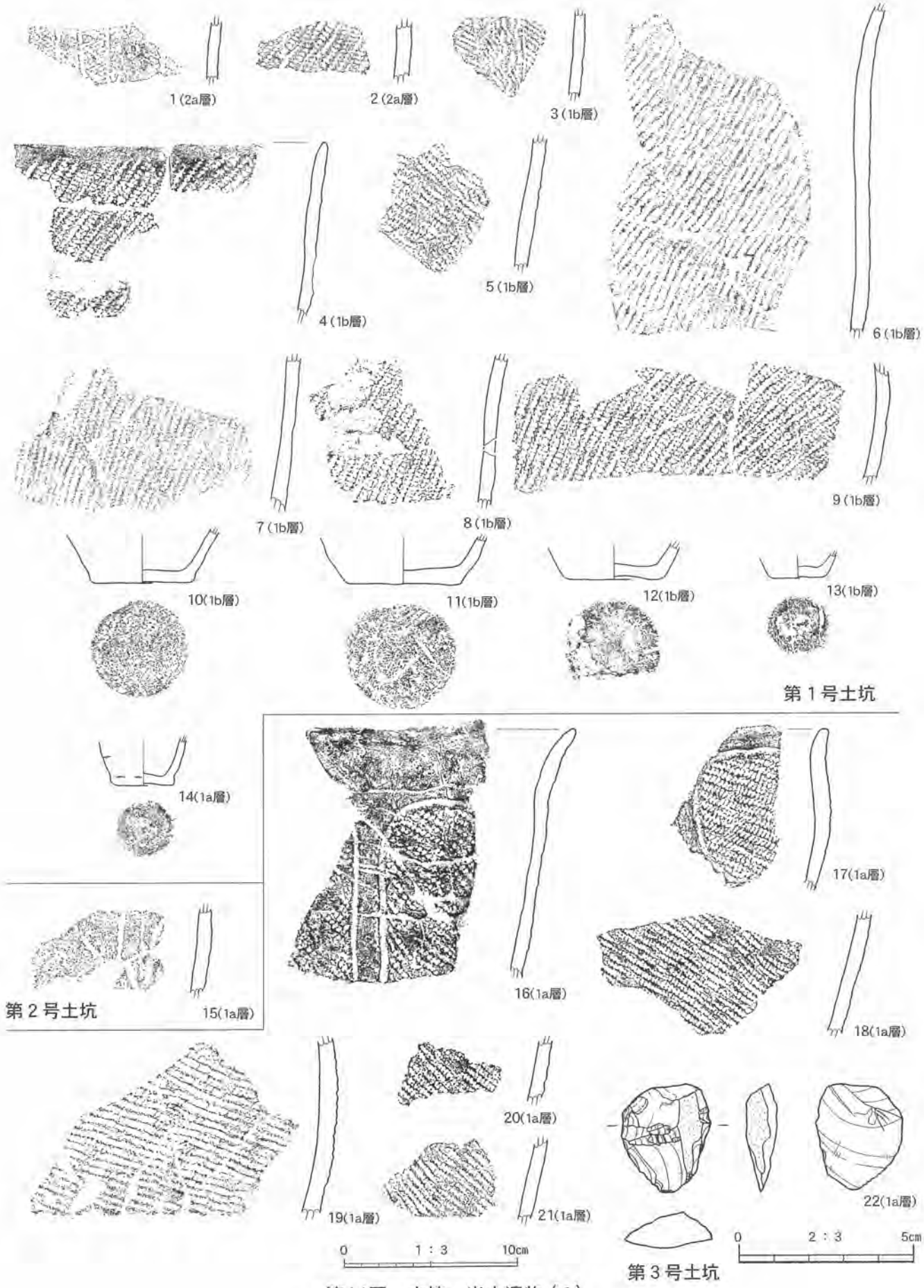
（３）焼土遺構

焼土遺構は２基検出されている。第１号焼土遺構は調査区中央部において第１号竪穴住居跡の検出段階で確認され、第２号焼土遺構は調査区東部、第１号ピット群の検出面と同一面で確認されている。

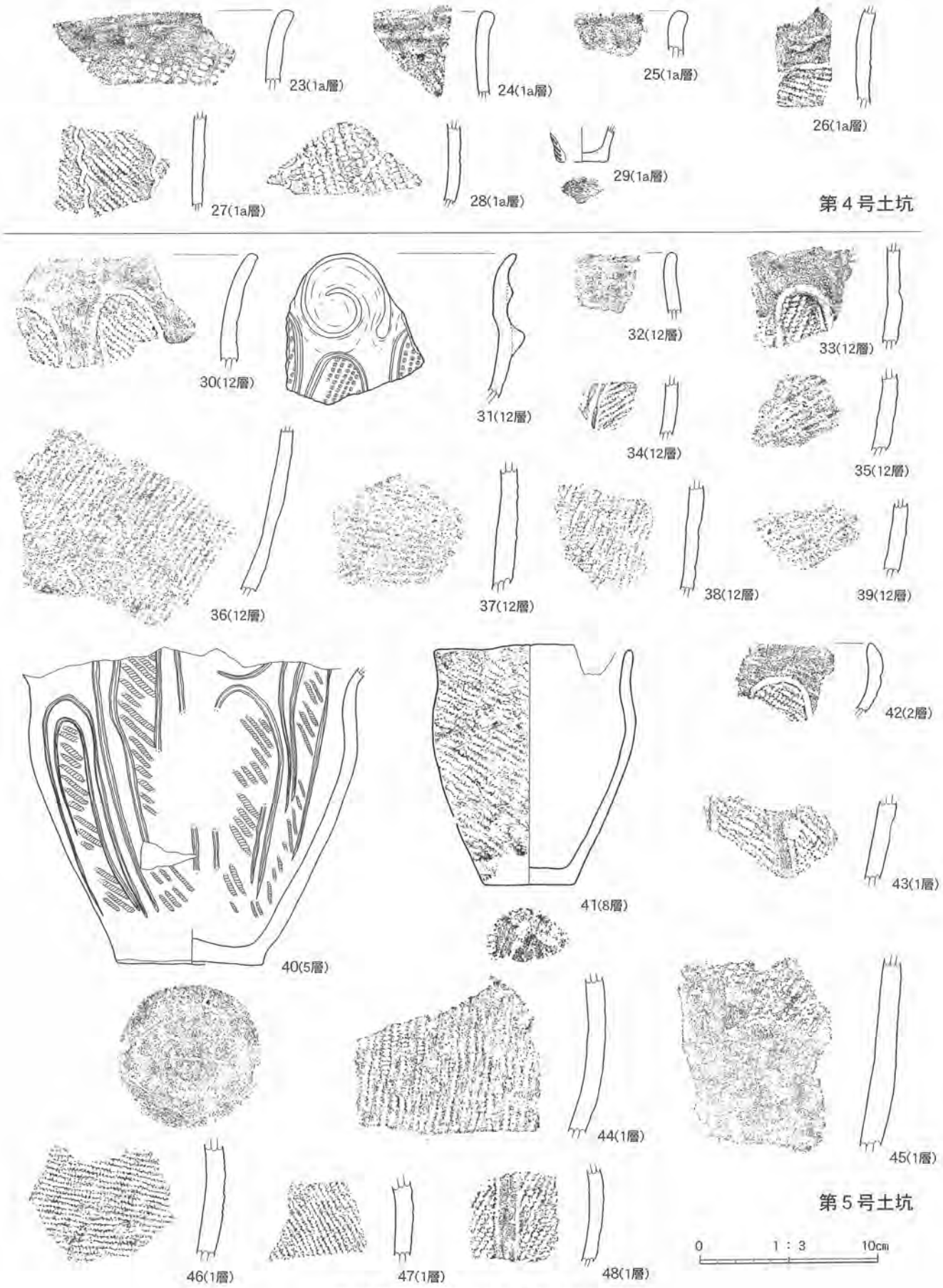
第１号焼土遺構（第45図、写真図版55・56）

第１号焼土遺構は調査区中央部のやや南側の位置で検出されている。**遺構検出面**は基本土層Ｋ層上面で、第１号竪穴住居跡の検出時に確認されている。そのため第１号竪穴住居跡と重複関係にあり、本遺構の方が新しい。

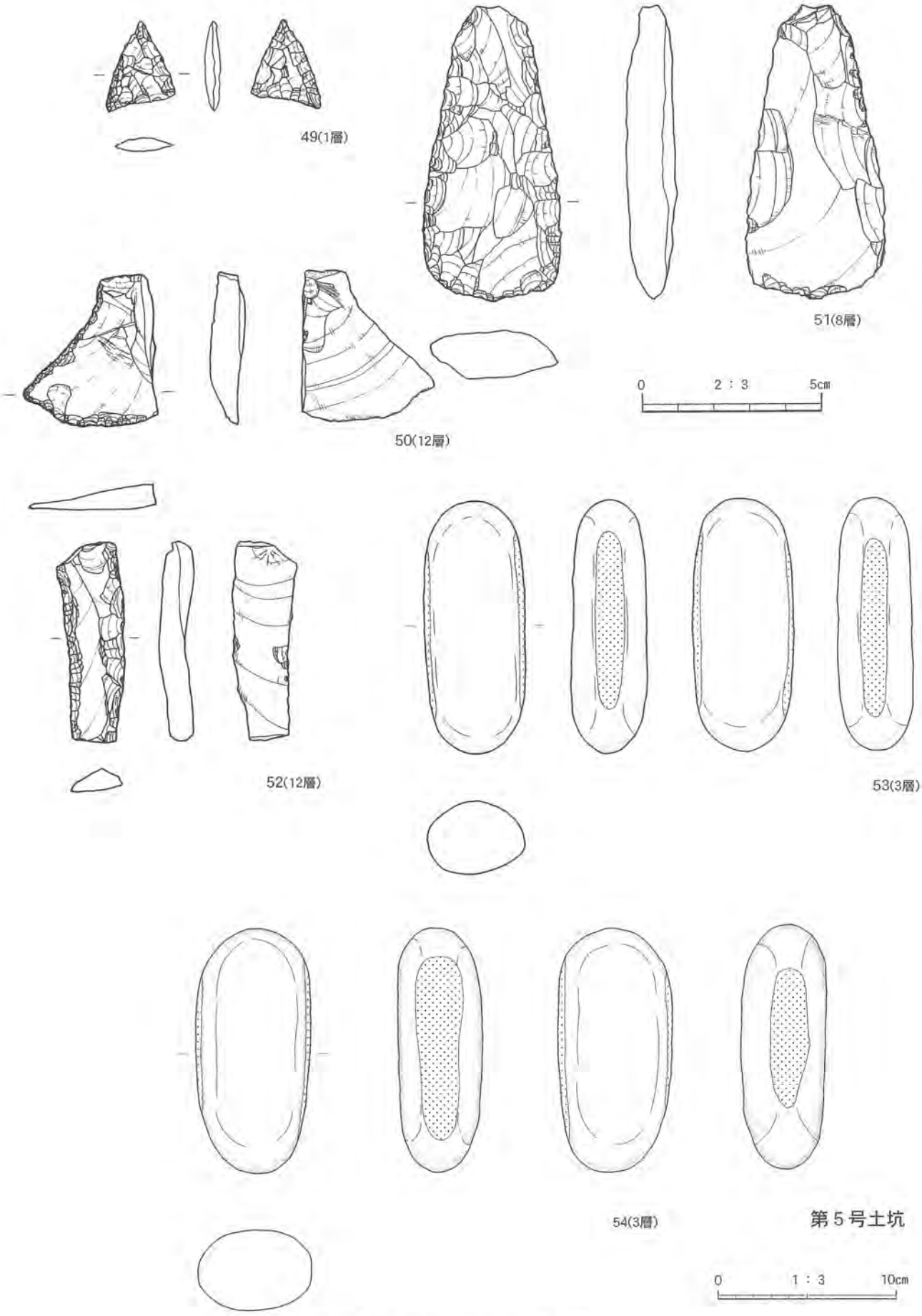
焼土範囲の**平面形**は、北側がくぼんだややいびつな楕円形を呈し、**規模**は長径0.74m、短径0.5m



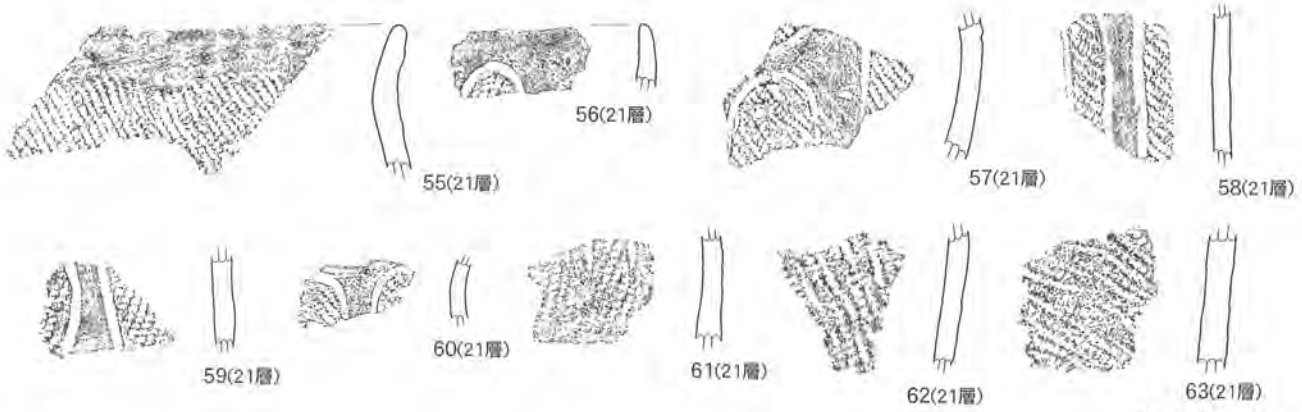
第41図　土坑　出土遺物（1）



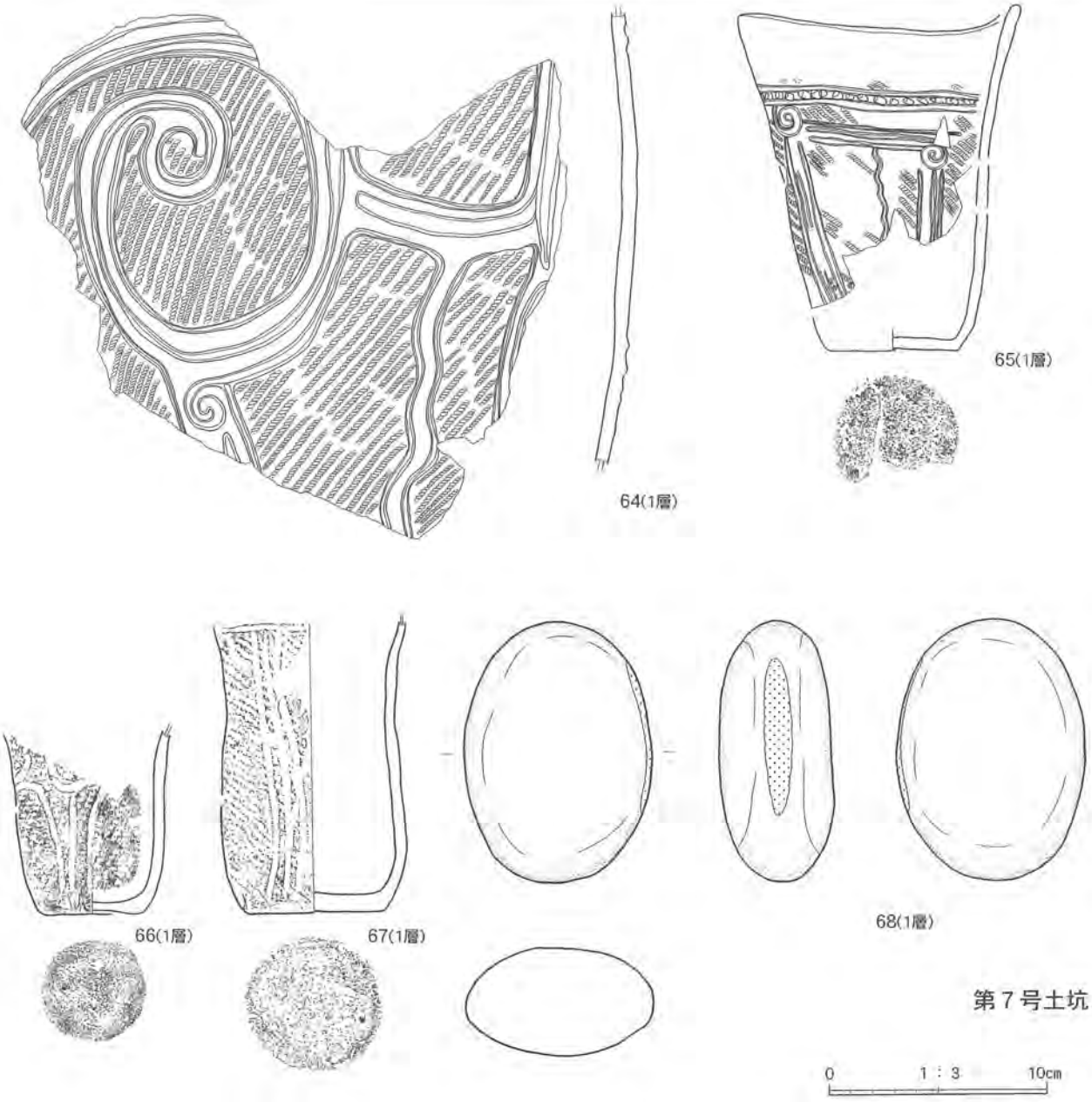
第42図　土坑　出土遺物（2）



第43図　土坑　出土遺物（3）

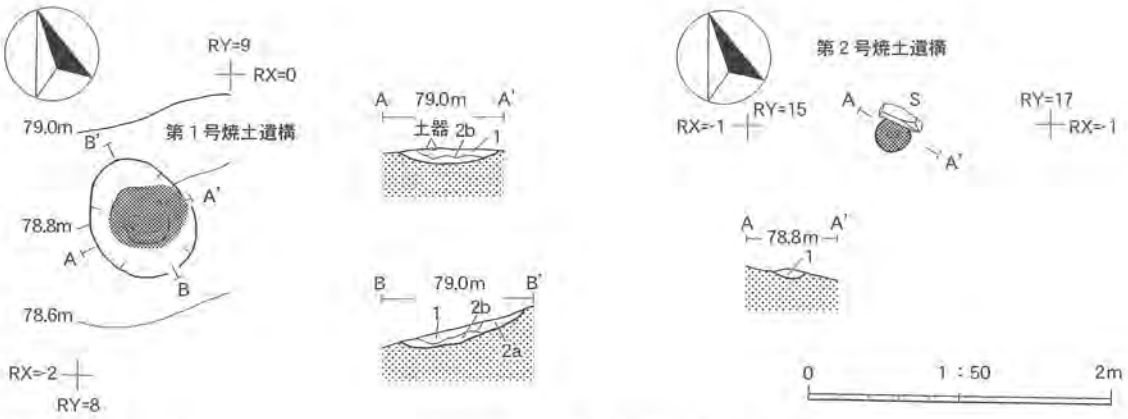


第６号土坑



第７号土坑

第44図　土坑　出土遺物（4）



第１号焼土遺構　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
焼土	1	10YR3/4 暗褐色シルト質埴壌土	7.5YR2/3 極暗褐色シルト質埴壌土5%焼状 7.5YR2/2 黒褐色シルト質埴壌土10%焼状	硬質、粘性あり
掘方埋土	2a	10YR2/3 黒褐色シルト質埴壌土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴壌土1%焼状	硬質、粘性あり
	2b	10YR2/3 黒褐色シルト質埴壌土	7.5YR3/4 暗褐色シルト質埴壌土10%焼状	硬質、粘性あり

第２号焼土遺構　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
焼土	1	5YR3/6 暗赤褐色シルト質埴土	7.5YR2/3 極暗褐色シルト質埴土10%焼状	硬質、粘性あり

第45図　第１号・２号焼土遺構　平面図・断面図

を測る。焼土層の厚さは約９cmで、焼土を取り除いた後には楕円形の落ち込みが検出された。落ち込みの規模は長径0.82m、短径0.65mを測る。壁は約20°～30°と緩やかに立ち上がる。

堆積土は１・２層に分けられ、さらに２層は２ａ・２ｂ層に細別される。１層は焼土層で、暗褐色を呈するシルト質埴壌土である。２ａ・２ｂ層は焼土遺構の掘方埋土でともに黒褐色を呈するシルト質埴壌土である。

遺物は出土していない。時期については重複関係から縄文時代中期末葉以降と考えられる。

第２号焼土遺構（第45図、写真図版57・58）

第２号焼土遺構は調査区東部で第１号ピット群範囲のほぼ中央部で検出されている。**遺構検出面**は基本土層Ｐ層上面で、第１号ピット群の検出面と同一面で確認されている。他の遺構との重複関係はない。

焼土範囲の**平面形**はほぼ円形で、北東脇には被熱された石が出土している。石の大きさは長さ31cm、幅10cmを測る。焼土範囲の**規模**は径38cmで焼土層の厚さは６cmである。

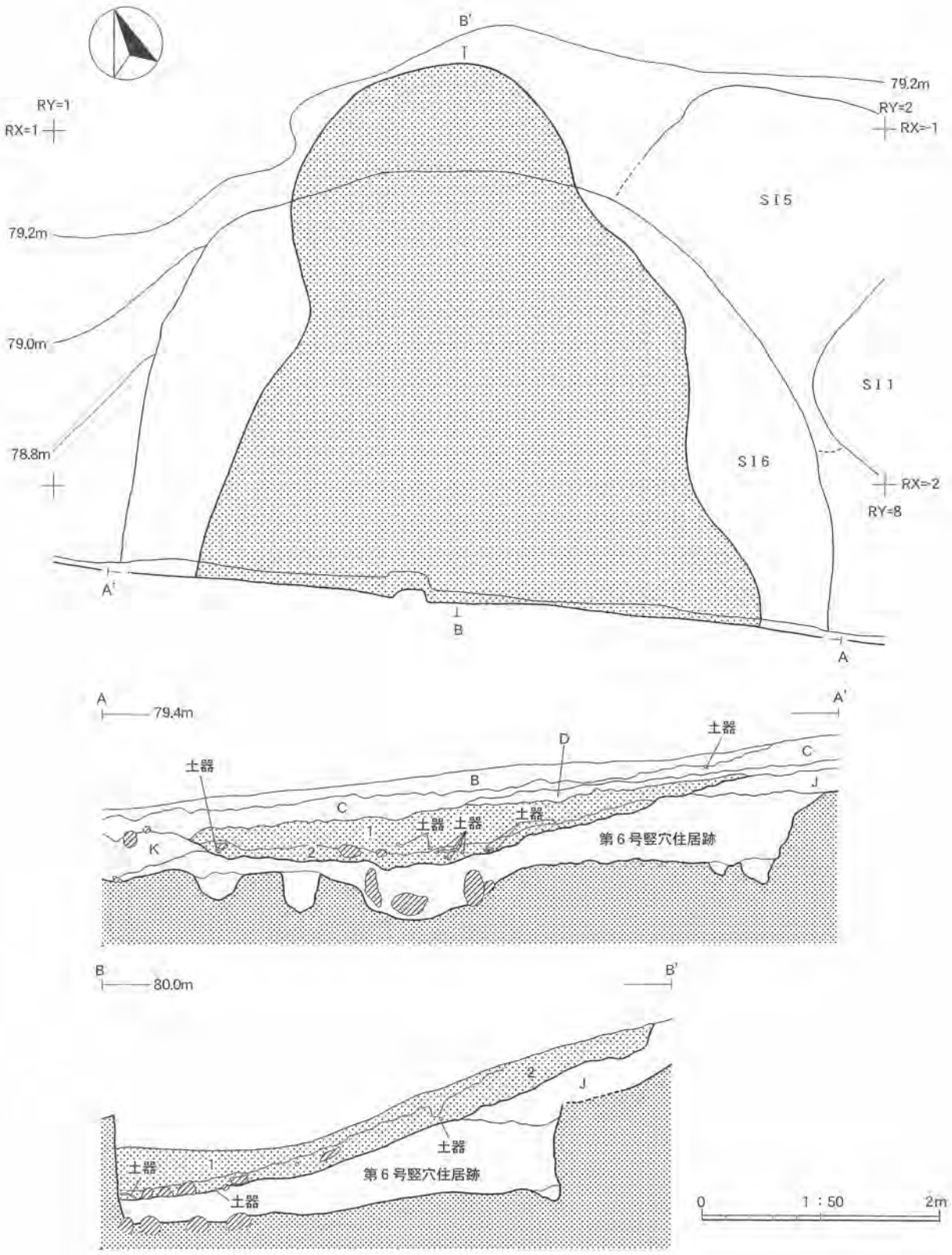
遺物は出土していない。時期については不明である。本遺構に伴い被熱された石が出土していることから、住居跡の炉跡の可能性も考えられるが、周辺において住居跡と明確に判断する要素は確認できなかった。

（４）遺物包含層（第46～50図、写真図版59・60・86～90・95）

遺物包含層は調査区西部で確認され、基本土層Ｃ層・Ｄ層を掘り下げた時点で検出されている。第１号竪穴住居跡と同様に調査開始当初から検出していたが、プランが捉えにくくサブトレンチなどを設定し各所で断面観察を行った結果、範囲を確定することができた。遺物包含層の**分布範囲**は南北4.44m、東西4.75mを測り、層厚は最大で45cmである。遺物包含層の南側は調査区外に延びているため、さらに分布範囲は広がっていると思われる。

堆積土は１・２層に分けられる。１層は黒色を呈する埴壌土を基本土とし硬質で粘性があり、２層は黒褐色を呈する埴壌土を基本土としやや硬質で粘性はややある。１層からは少量の縄文土器、２層からは多量の縄文土器及び礫が出土している。

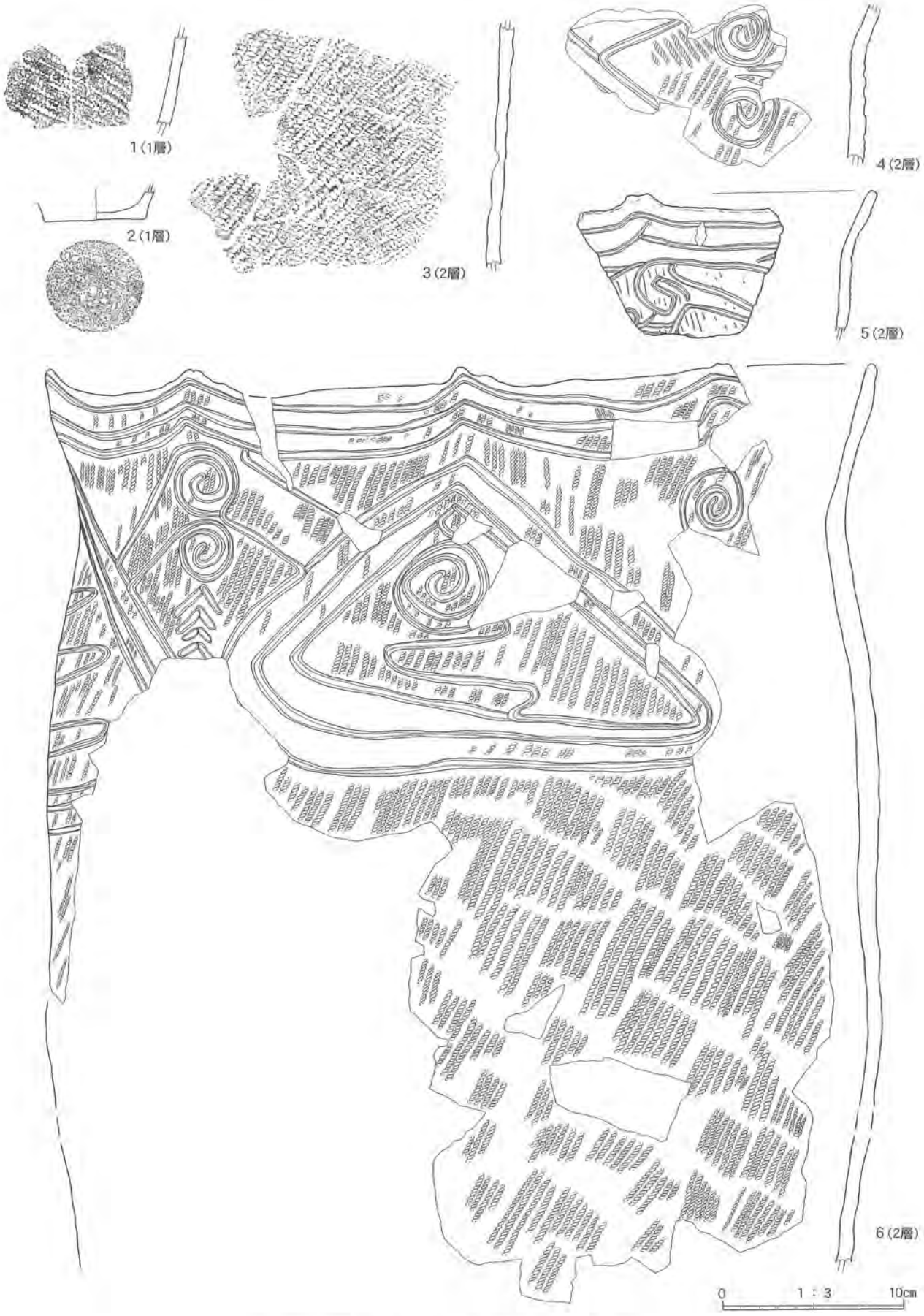
遺物は縄文土器・石鏃・削器・石匙・石皿が出土している。縄文土器は1,587点出土し、その中で55点を図示した。１・２は１層から出土している。１は胴部の破片でＬＲ単節縄文が施文されている。



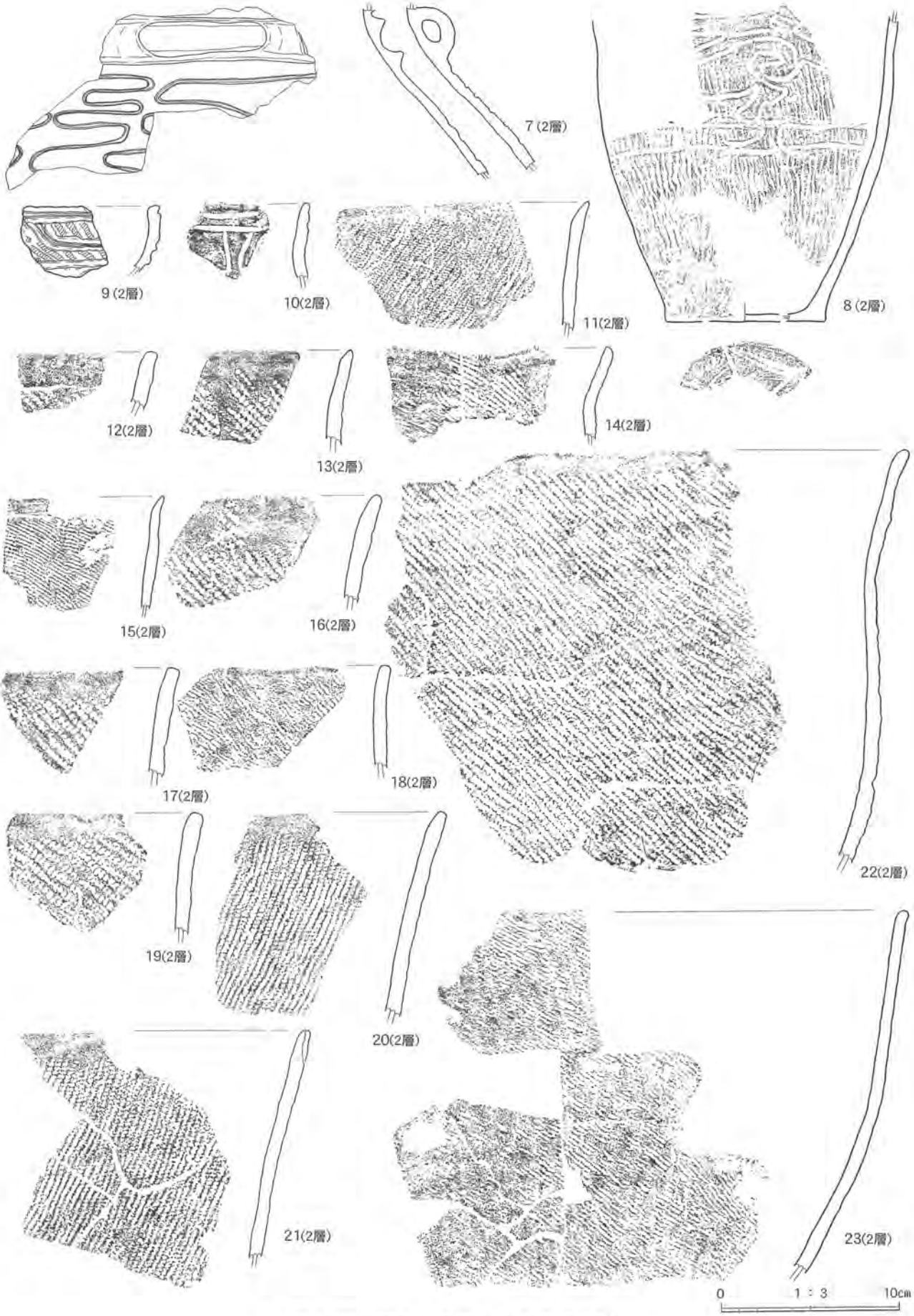
遺物包含層　土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
遺物包含層	1	10YR2/1 黒色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土1%塊状	硬質、粘性あり 1mm大白色粒ごく微量
堆積土	2	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/1 黒色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭

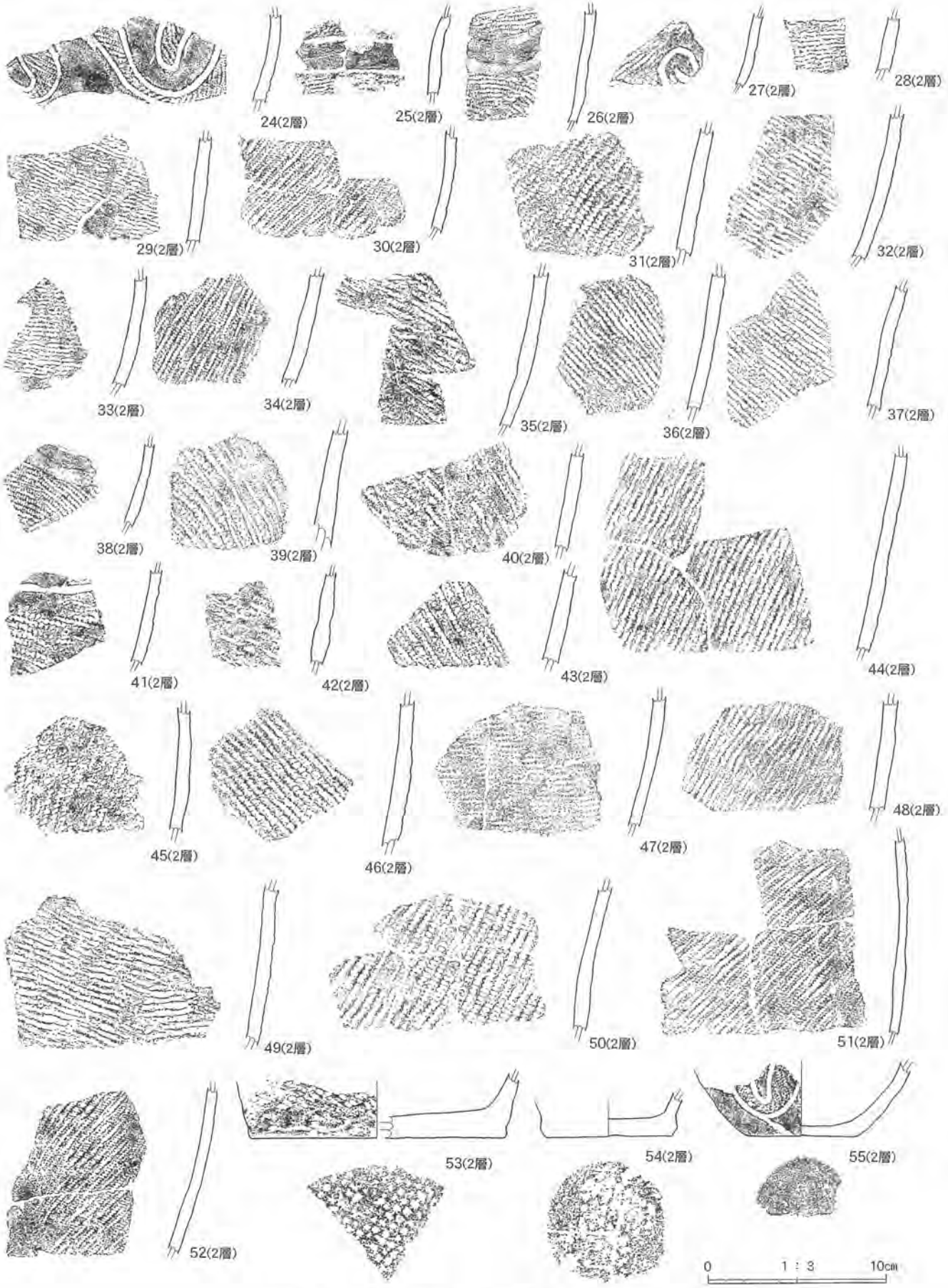
第46図　遺物包含層　分布範囲図・断面図



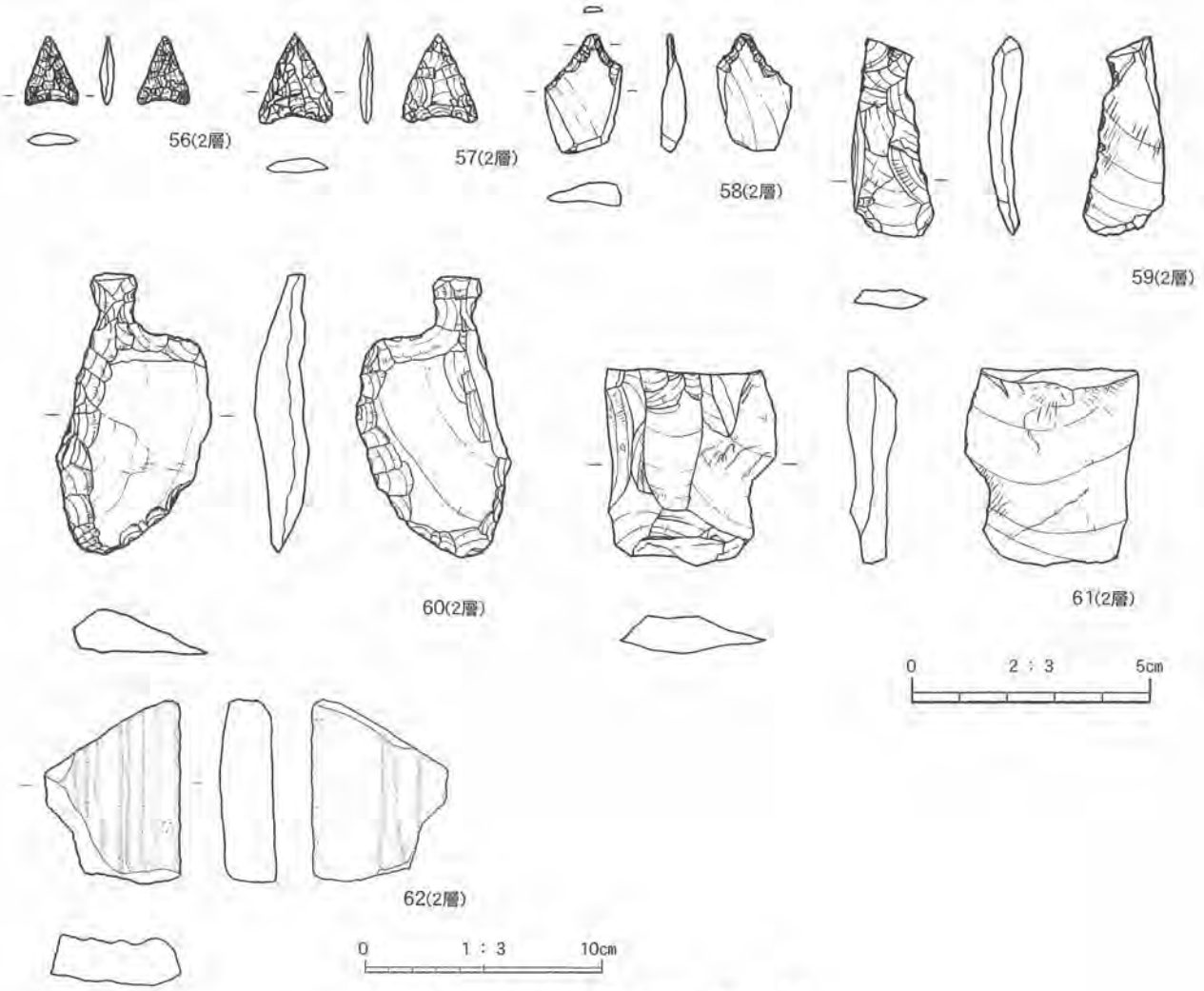
第47図　遺物包含層　出土遺物（1）



第48図　遺物包含層　出土遺物（2）



第49図　遺物包含層　出土遺物（3）



第50図　遺物包含層　出土遺物（4）

２は底部の破片で底径5.6cmを測り、底部はナデ調整されている。

３～55は２層から出土している。３・４・６は胎土や文様などから同一個体と考えられる。３は胴部の破片で、ＲＬ縄文が施文されている。４も胴部の破片で、地文であるＲＬ縄文の上から沈線により渦巻文や菱形のモチーフを描いている。６は胴部から口縁部まで残存しており、胴部はあまり膨らまず口縁部下で外側に屈曲し、口縁部は直線的に立ち上がる。ＲＬ縄文の地文の上に、胴部上半は渦巻状と三角形状の沈線が組み合わさるモチーフと渦巻状と波状の沈線が組み合わさるモチーフがみられ、推定ではあるがそれぞれ交互に２単位ずつ展開していると思われる。５は口縁部の破片で胴部上半において外側に屈曲し、口縁部はそのまま直線的に立ち上がり口唇部には突起が１箇所みられる。Ｌ無節縄文が施文され、その上に横位の沈線や渦巻文の文様が描かれる。７は胴部の破片である。胴部は大きく膨らみ球胴形を呈すると思われ、口縁部に向かってすぼまる。胴部上半には横方向に環状の隆帯がめぐり、胴部には幅２㎜を測る波状の沈線が引かれている。８は底部から胴部が残存し、Ｌ無節縄文が縦位に施文されている。胴部には幅約２㎜の横方向の沈線や渦巻状の沈線が引かれている。底部には木葉痕がみられる。９～23は口縁部の破片である。９は内湾気味に立ち上がり、ＲＬ単節縄文が施文された上に幅約４㎜を測る横方向の粘土紐の貼り付けがみられる。10は外側に向かって緩やかに開き、横方向と縦方向の沈線が引かれる。11～21はＲＬ単節縄文（11・20・21）やＬＲ単節縄文（12～17・19）、Ｌ無節縄文（18）を地文とし、口縁部のみナデにより地文が消され無文となっている。22・23は胴部から口縁部が残存し、22の胴部は緩やかに膨らみ、胴部上半でややくびれ口縁部に向かって緩やかに開く。23の胴部は膨らまず直線的に外側に開き、口縁部は直線的に立ち上がる。24～27・38は胴部の破片で、地文の上に沈線が引かれ、沈線により区画された中の縄文が磨り消されているものである。25・26・38には横位の沈線が引かれ、24・27は渦巻状の縄文帯が施文されている。28～

37・39～52は胴部の破片でＲＬ単節縄文（30・31・34・44・45・48・50～52）、ＬＲ単節縄文（32・36・37・39・41・43・46・49）、Ｌ無節縄文（28・29・33・35・40・42）を地文とする。47は摩滅のため文様は不明である。31・45及び40・42はそれぞれ文様・胎土が極めて類似し、同一個体の可能性がある。53～55は底部の破片で、53・54には網代痕が残るがともに摩滅がひどく不明瞭である。55の底部側面には沈線と縄文で構成されたU字形の縄文帯が施文されている。

56～62は石器である。56は凹基無茎の石鏃で、両面に調整剥離が施されている。57は凹基無茎の石鏃で、腹面の縁部には丁寧な調整剥離がみられる。58はつまみ状の突起を作り出しているもので、その突起周辺のみ調整剥離が施されている。59は背面側縁部にのみ調整剥離がみられるもので削器と思われるが、欠損しているため全体の形などは不明である。60は縦形の石匙である。幅３cmを測り幅広で先端部は丸みを帯びている。両面に一次剥離面が大きく残り縁部のみ調整剥離が施され刃部を作り出している。61は長方形を呈し側縁に刃部がみられる。削器と思われる。62は石皿の欠損品で、両面に筋状の溝が残っている。

遺物包含層の２層からは、文様などから縄文時代後期前葉と考えられる土器が出土し、さらに遺物包含層の下層からはちょうど分布範囲に重なるように縄文時代中期末葉の第６号竪穴住居跡が検出されている。これらの遺物出土状況や重複関係から遺物包含層の形成された要因は住居跡廃絶後にみられた窪地を利用した土器の廃棄と推測される。

（5）ピット（第51・52図、第10表、写真図版61）

ピットは27基検出されている。主に調査区東部と北部に集中して分布しているため、ここでは調査区東部で検出されたピットを第１号ピット群、調査区北部のピットを第２号ピット群として記載する。なお、これらのピット群としてのまとまりは便宜的なもので、互いに有機的な関係にあるかは不明である。

第１号ピット群はＰ２～Ｐ15で構成され、**遺構検出面**は基本土層Ｐ層上面である。調査区東部の緩斜面に分布している。**平面形**は円形ないし不整な楕円形を呈しており、深さはＰ11が21cmと最も深いが、他のピットは概ね10cm前後である。Ｐ２とＰ10には柱痕跡と思われる土層の堆積がみられる。ピットの検出状況から、当初は竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えられたが、壁の立ち上がりや埋土などは確認されなかった。

第２号ピット群はＰ１・Ｐ16～27で構成され、**遺構検出面**は地山面である。調査区北部において広い範囲に分布している。**平面形**は円形ないし不整な楕円形を呈しており、深さはＰ27が38cmと最も深い。Ｐ27は第６号竪穴住居跡と重複しピットの半分以上は壊されていると思われる。Ｐ16も第１号竪穴住居跡と重複し、Ｐ16の方が新しい。柱痕跡と思われる堆積状況はみられなかった。

第１号・２号ピット群ともに**遺物**は出土していない。

（6）遺構外出土遺物（第53～55図、写真図版90～92・95）

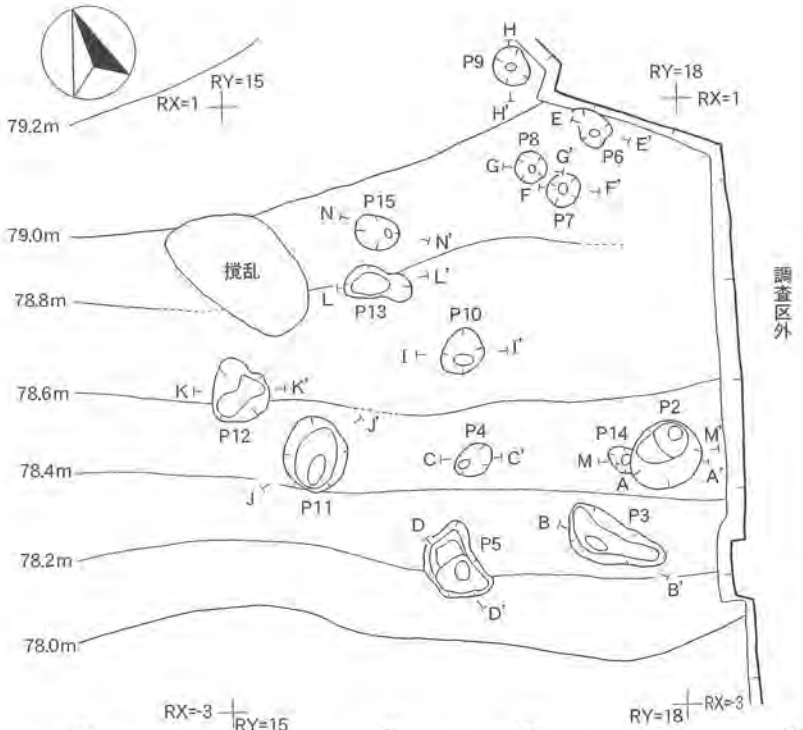
遺構外からは縄文土器・石鏃・掻器・磨石・凹石が出土している。遺構が集中している調査区中央部～南部での出土が多く、表土を掘り下げている段階ですでに縄文土器が多量に出土している。遺物図版は基本土層の層位ごとに掲載したが、ここでは時期別に分類し記載する。

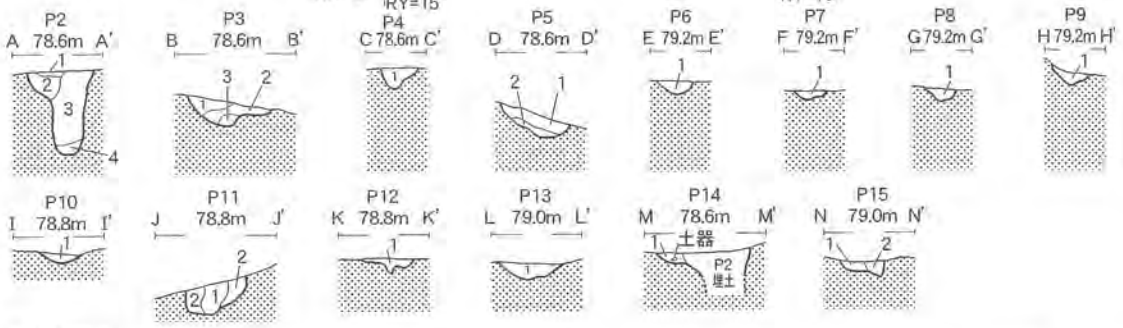
縄文土器（１～54）

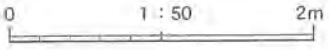
縄文土器は2,852点出土し、その中で54点を図示した。縄文時代前期・中期・後期のものが出土している。

前期

Ｇ１層から１点（16）とＫ層から１点（53）出土し、ともに口縁部の破片である。16には口唇部に横位の刻みがみられ、その下部には不整撚糸文が施文されている。胎土に繊維は含まれていない。大木２式と思われる。53は口縁部に斜縄文が施され、その下部には波状の沈線と直線的に垂下する沈線が２条みられる。胎土に繊維は含まれていない。







P 2　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性ややあり
	2	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土30%塊状 10YR4/6 褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり
	3	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性ややあり
	4	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり

P 3　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土10%塊状	やや硬質、粘性あり
	2	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり
	3	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり

P 4　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり 炭化物

P 5　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり
	2	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 5mm大の小礫

P 6　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色砂壌土	10YR4/4 褐色砂壌土10%塊状	軟質、粘性なし 5mm大の小礫

P 7　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色砂壌土	10YR4/4 褐色砂壌土10%塊状	軟質、粘性なし 5mm大の小礫

P 8　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色砂壌土	10YR4/4 褐色砂壌土10%塊状	軟質、粘性なし 5mm大の小礫

P 9　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色砂壌土	10YR4/4 褐色砂壌土10%塊状	軟質、粘性なし 5mm大の小礫

P 10　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR4/4 褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性ややあり 炭化物少量

P 11　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/2 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり
	2	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土10%塊状・斑状	硬質、粘性あり 5mm大の小礫

P 12　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR4/4 褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性ややあり 炭化物少量

P 13　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/4 褐色埴壌土	10YR5/8 黄褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 5mm大の小礫

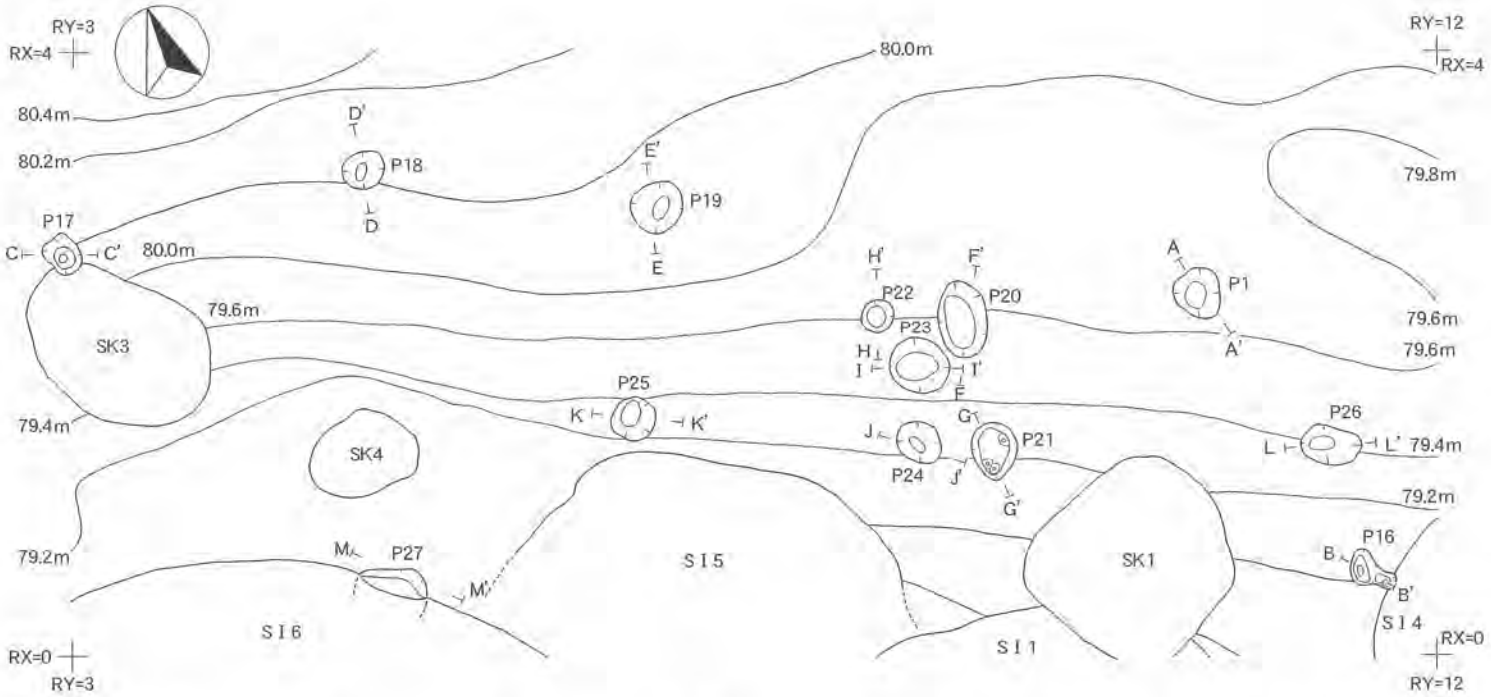
P 14　土層観察表

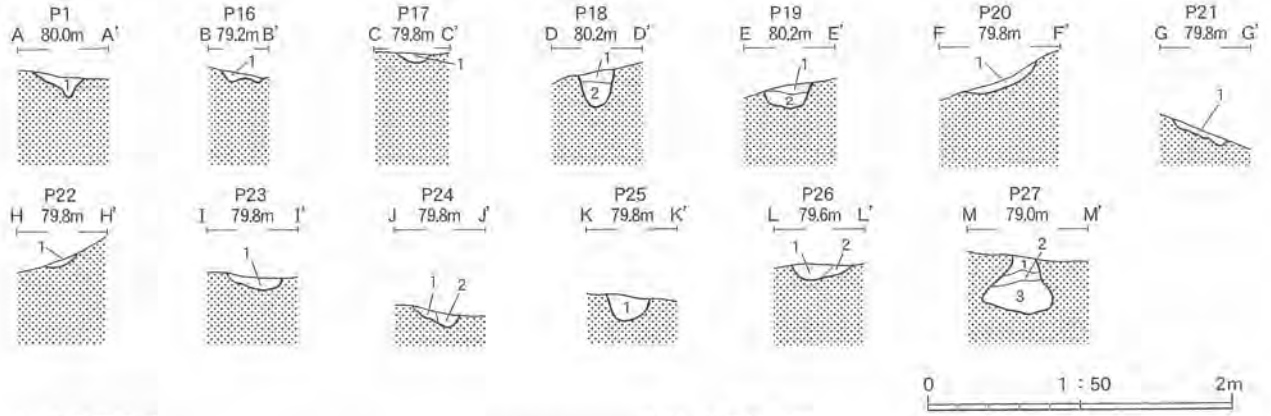
属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり

P 15　土層観察表

属名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR4/6 褐色埴壌土10%塊状	軟質、粘性なし
	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性なし

第51図　第１号ピット群　平面図・断面図





P 1 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/4 褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり

P 16 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土20%塊状	軟質、粘性なし 1mm大の小礫

P 17 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 炭化物中量

P 18 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土10%塊状・量状	硬質、粘性あり
	2	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色埴壌土30%塊状 10YR2/1 黒色埴壌土10%塊状	軟質、粘性なし

P 19 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土	10YR2/1 黒色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり
	2	10YR2/3 黒褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	やや硬質、粘性ややあり

P 20 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/4 褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒

P 21 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 炭化物少量

P 22 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/6 褐色シルト質埴土	10YR4/4 褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒

P 23 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/4 褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒、黄色粒

P 24 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR4/4 褐色埴壌土	10YR2/3 黒褐色埴壌土5%塊状	やや硬質、粘性ややあり 1mm大の白色粒少量
	2	10YR4/4 褐色埴壌土	10YR4/3 にぶい黄褐色埴壌土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量

P 25 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 1mm大の白色粒少量

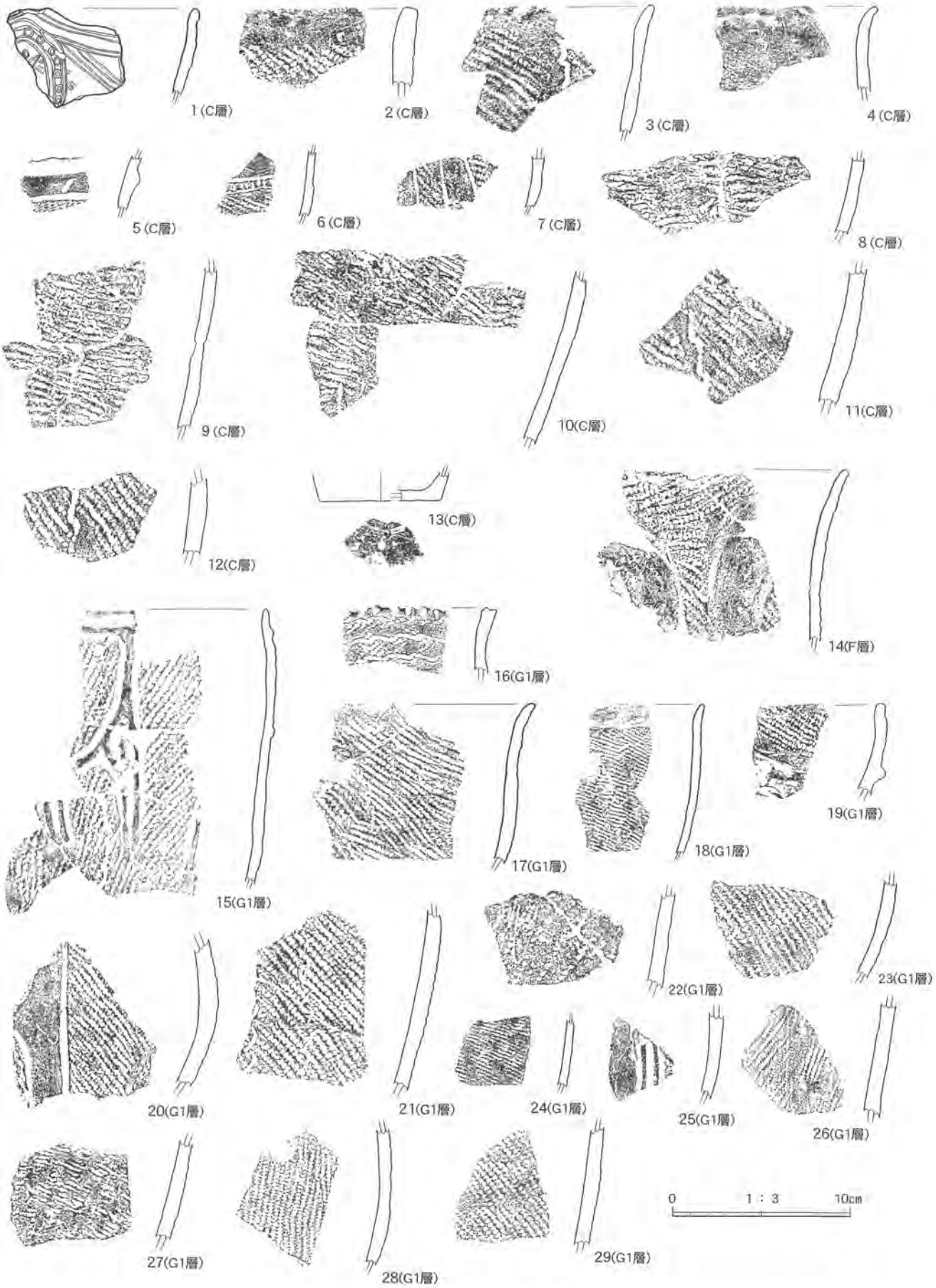
P 26 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/3 暗褐色埴壌土	10YR3/4 暗褐色埴壌土10%塊状	硬質、粘性ややあり 2mm大の白色粒少量
	2	10YR3/4 暗褐色埴壌土	10YR3/3 暗褐色埴壌土3%塊状	硬質、粘性ややあり 2mm大の白色粒少量

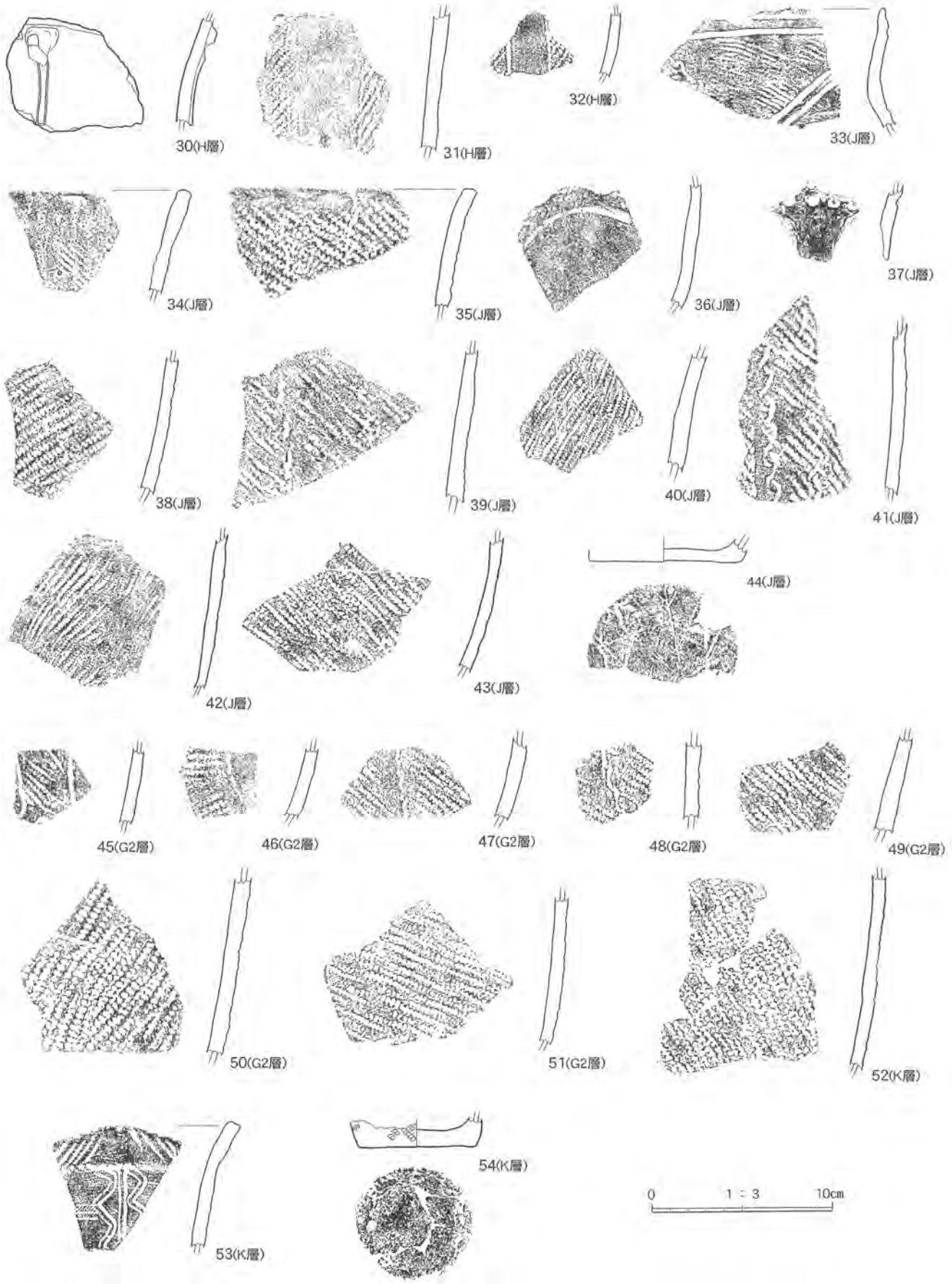
P 27 土層観察表

層名		基本土	混入土	しまり・粘性・混入物
ピット埋土	1	10YR3/3 暗褐色シルト質埴土	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土20%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒少量
	2	10YR3/4 暗褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土10%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒少量
	3	10YR2/2 黒褐色シルト質埴土	10YR2/3 黒褐色シルト質埴土5%塊状	硬質、粘性あり 2mm大の白色粒多量 赤色粒微量

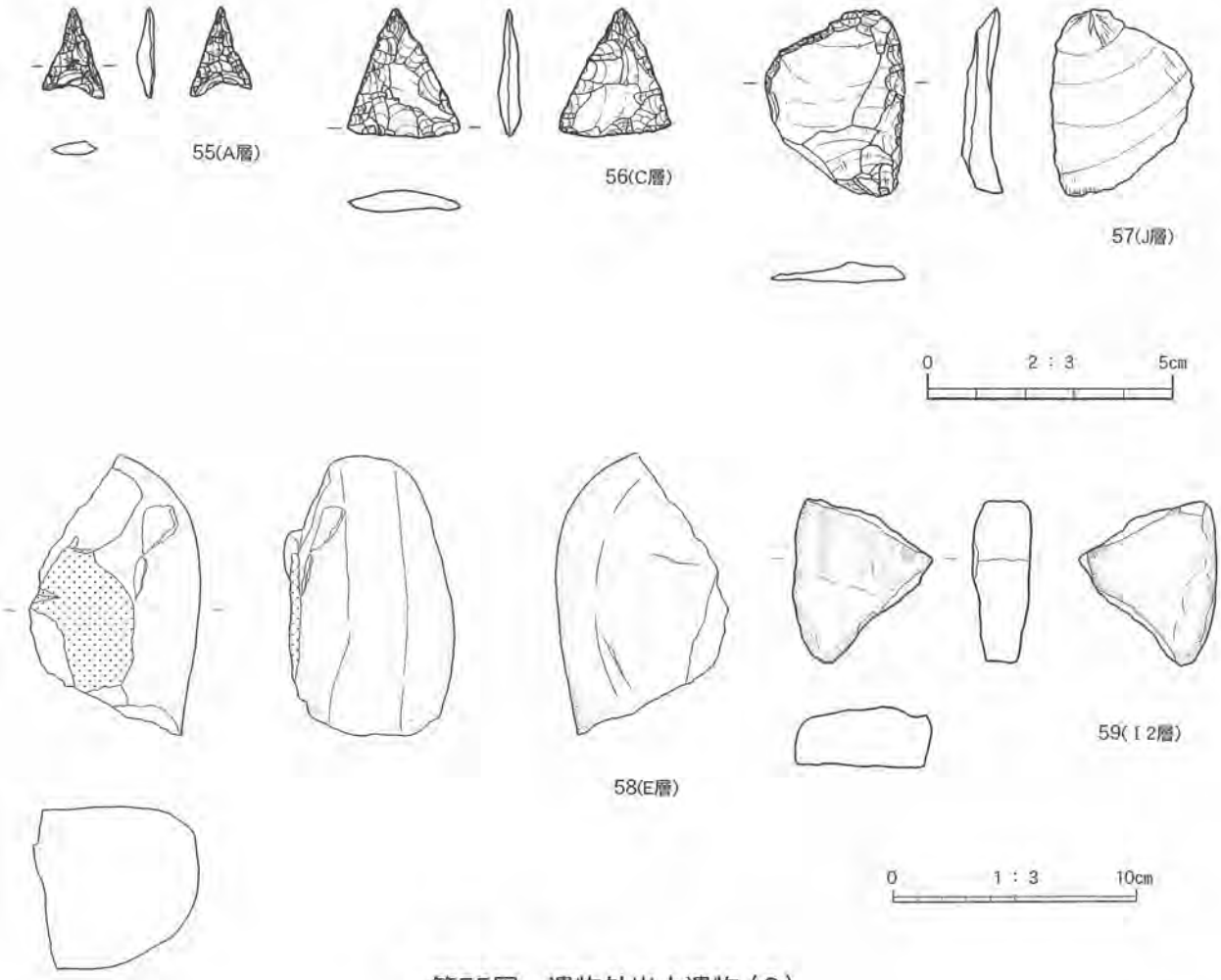
第52図　第２号ピット群　平面図・断面図



第53図　遺物外出土遺物（1）



第54図　遺物外出土遺物（2）



第55図　遺物外出土遺物（3）

中期

15は胴部から口縁部が残存し、口縁部は直線的に立ち上がる。ＲＬＲ複節縄文を地文とし隆帯による渦巻文が施されている。大木８ｂ式と思われる。５・７・14・19・20・25・26・31・32・33・36・45・46は地文である縄文の上に∩字形や垂下する沈線が引かれ、沈線と沈線の間を磨り消すものである。大木９式もしくは大木10式と思われる。１・６・37には刺突が施されている。

後期

30は口縁部下部の破片で、ナデによる無文帯に垂下する隆帯を貼り付けている。時期は後期前葉と思われる。

時期不明の土器・底部のみの土器など

２～４・８～12・17・18・21～24・27～29・34・35・38～43・47～52は胴部の破片で、ＲＬ単節縄文やＬＲ単節縄文、Ｌ無節縄文を地文とする。13・44・54は底部の破片で、44には木葉痕が残る。他の２点については摩滅のため不明である。

石器（55～59）

石器は５点出土している。55は凹基無茎の石鏃で、側縁の一部が屈曲しいびつな形態を有する。両面に調整剥離がみられ、一次剥離面はみられない。56は平基無茎の石鏃で、片側縁部が長くなっているため二等辺三角形状にはならずに先端部の軸がずれている。57は掻器で、側縁部に調整剥離がみられる。58は片側縁部に磨面をもつ磨石の欠損品である。59は凹石で、片面にのみ凹みがみられる。

第２表　牛沢遺跡　出土土器観察表（１）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
10	1	ＳＩ１	床面	口縁部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英	
10	2	ＳＩ１	床面	口縁部	隆帯、沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、金雲母	
10	3	ＳＩ１	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
10	4	ＳＩ１	床面	口縁部	ナデ	内面ナデ	砂粒	
10	5	ＳＩ１	床面	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
10	6	ＳＩ１	床面	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
10	7	ＳＩ１	床面	胴部	ＬＲ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒	７～10同一個体
10	8	ＳＩ１	床面	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	７～10同一個体、内面剥離
10	9	ＳＩ１	床面	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	７～10同一個体
10	10	ＳＩ１	床面	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	７～10同一個体
10	11	ＳＩ１	４ｃ層	口縁部	沈線→刺突	内面ナデ	砂粒	口径（17.0cm）
10	12	ＳＩ１	４ｃ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
10	13	ＳＩ１	４ｃ層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
10	14	ＳＩ１	４ｃ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	外面剥離
11	15	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	口径（26.0cm）　器高（20.6cm）
11	16	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径（26.0cm）　器高（18.6）cm
11	17	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径10.1cm、器高7.5cm、底径4.0cm
11	18	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径7.0cm、器高5.6cm、底径4.1cm
11	19	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	隆帯、ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
11	20	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
11	21	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
11	22	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	穿孔３箇所
11	23	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
11	24	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
11	25	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
11	26	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
11	27	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
11	28	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	29	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
12	30	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	31	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
12	32	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
12	33	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＲＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	34	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
12	35	ＳＩ１	３ｂ層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	36	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	
12	37	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
12	38	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	39	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	40	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
12	41	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	42	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
12	43	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
12	44	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒	
12	45	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	隆帯、縄文（不明）	内面ナデ	砂粒	
12	46	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
12	47	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
12	48	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
12	49	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
12	50	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
12	51	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
12	52	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
13	53	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	54	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	55	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	56	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	57	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
13	58	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	59	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
13	60	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	61	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	62	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
13	63	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	64	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	65	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、金雲母	
13	66	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	煤付着
13	67	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	68	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	不明	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
13	69	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ナデ	内面ナデ	砂粒	ミニチュア土器？
14	70	ＳＩ１	３ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
14	71	ＳＩ１	３ｂ層	胴部～底部	ＬＲ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	器高（7.8cm）底径5.8cm
14	72	ＳＩ１	３ｂ層	胴部～底部	ＬＲ縄文	―	砂粒、石英、礫	底部木葉痕、底径8.7cm
14	73	ＳＩ１	３ｂ層	胴部～底部	ＲＬ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、底径8.0cm
14	74	ＳＩ１	３ｂ層	底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	底径10.0cm
14	75	ＳＩ１	３ｂ層	底部	不明	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	底部木葉痕、底径8.7cm
14	76	ＳＩ１	３ｂ層	胴部～底部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	底部ナデ、底径10.6cm
14	77	ＳＩ１	３ａ層	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	

第３表　牛沢遺跡　出土土器観察表（２）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
14	78	ＳＩ１	１層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒	
14	79	ＳＩ１	１層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
14	80	ＳＩ１	１層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
14	81	ＳＩ１	１層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	輪積痕
14	82	ＳＩ１	１層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
14	83	ＳＩ１	１層	口縁部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
15	84	ＳＩ１	３ａ層	口縁部～底部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径24.6cm、器高43.1cm、底径11.7cm
15	85	ＳＩ１	１層	口縁部	沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	86	ＳＩ１	１層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	
15	87	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	88	ＳＩ１	１層	胴部	沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	89	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
15	90	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
15	91	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	92	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	93	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
15	94	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	95	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	煤付着
15	96	ＳＩ１	１層	胴部	縄文（不明）、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	97	ＳＩ１	１層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
15	98	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
15	99	ＳＩ１	１層	胴部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
15	100	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	101	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
15	102	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	
15	103	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	104	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	105	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
15	106	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	107	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
15	108	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
15	109	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
15	110	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
15	111	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
16	112	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
16	113	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
16	114	ＳＩ１	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
16	115	ＳＩ１	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
16	116	ＳＩ１	１層	底部	ＲＬ縄文	―	砂粒、石英、礫	底部網代痕、底径11.7cm
16	117	ＳＩ１	１層	底部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部網代痕→ナデ、底径13.7cm
20	1	ＳＩ２	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径24.0cm、器高（23.0cm）
20	2	ＳＩ２	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	口径（20.2cm）　器高（20.4cm）
20	3	ＳＩ２	床面	口縁部～胴部	ＲＬ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	器高（16.3cm）
20	4	ＳＩ２	床面	口縁部～底部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	口径23.3cm、器高23.0cm、底径7.1cm　底部網代痕→ナデ
20	5	ＳＩ２	床面	口縁部～胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径15.5cm、器高16.3cm
20	6	ＳＩ２	床面	口縁部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
20	7	ＳＩ２	床面	口縁部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
20	8	ＳＩ２	床面	口縁部	ＬＲ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
20	9	ＳＩ２	床面	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
20	10	ＳＩ２	床面	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	11	ＳＩ２	床面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
21	12	ＳＩ２	床面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	13	ＳＩ２	床面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
21	14	ＳＩ２	床面	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	15	ＳＩ２	床面	底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英	底部ナデ、底径（4.3cm）
21	16	ＳＩ２	床面	底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	底部網代痕、底径10.8cm
21	17	ＳＩ２	５層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
21	18	ＳＩ２	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	19	ＳＩ２	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	20	ＳＩ２	４ａ層	口縁部	ＬＲ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英	
21	21	ＳＩ２	４ａ層	口縁部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	22	ＳＩ２	４ａ層	口縁部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	23	ＳＩ２	４ａ層	口縁部	横位の刻み、不整撚糸文	内面ナデ	砂粒	
21	24	ＳＩ２	４ａ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	25	ＳＩ２	４ａ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
21	26	ＳＩ２	４ａ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	27	ＳＩ２	４ａ層	胴部	Ｌ撚糸文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
21	28	ＳＩ２	４ａ層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
21	29	ＳＩ２	４ａ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
22	30	ＳＩ２	４ａ層	口縁部～底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	器高（37.8cm）
24	1	ＳＩ３	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径（28.0cm）器高（14.2cm）
24	2	ＳＩ３	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	２・３・５は同一個体
24	3	ＳＩ３	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	２・３・５は同一個体
24	4	ＳＩ３	床面	口縁部～胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
24	5	ＳＩ３	床面	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	２・３・５は同一個体
24	6	ＳＩ３	床面	口縁部	ナデ	内面ナデ	砂粒	
24	7	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、金雲母	
24	8	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	８～10は同一個体か

第４表　牛沢遺跡　出土土器観察表（３）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
24	9	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	８～10は同一個体
24	10	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	８～10は同一個体
24	11	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、金雲母	
24	12	ＳＩ３	床面	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、金雲母	
24	13	ＳＩ３	検出面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
24	14	ＳＩ３	検出面	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
24	15	ＳＩ３	検出面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
26	1	ＳＩ４	床面	胴部～底部	ＲＬ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	赤彩、器高（16.0cm）底径5.9cm
26	2	ＳＩ４	床面	胴部～底部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底径（8.3cm）
26	3	ＳＩ４	床面	口縁部～底部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	口径11.6cm、器高9.1cm、底径5.5cm
26	4	ＳＩ４	２ｂ層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、礫	
26	5	ＳＩ４	２ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
26	6	ＳＩ４	２ｂ層	胴部	ＲＬ縄文？	内面ナデ	砂粒、礫	
26	7	ＳＩ４	２ｂ層	底部	ナデ	—	砂粒、礫	底部網代痕、底径（6.7cm）
26	8	ＳＩ４	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、金雲母	
26	9	ＳＩ４	１層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
26	10	ＳＩ４	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	1	ＳＩ５	床面	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	2	ＳＩ５	床面	胴部	ＲＬ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
28	3	ＳＩ５	２層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	4	ＳＩ５	２層	口縁部	ナデ	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
28	5	ＳＩ５	２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	6	ＳＩ５	２層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	7	ＳＩ５	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	8	ＳＩ５	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	9	ＳＩ５	２層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	10	ＳＩ５	１層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	11	ＳＩ５	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	12	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	13	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	14	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	14・16～18は同一個体
28	15	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	16	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	14・16～18は同一個体
28	17	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	14・16～18は同一個体
28	18	ＳＩ５	１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	14・16～18は同一個体
28	19	ＳＩ５	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	20	ＳＩ５	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
28	21	ＳＩ５	１層	底部	ナデ	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	底部網代痕、底径（9.8cm）
32	1	ＳＩ６	床面	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
32	2	ＳＩ６	床面	口縁部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
32	3	ＳＩ６	床面	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径（24.0cm）、器高（23.5cm）
32	4	ＳＩ６	床面	胴部～底部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	底部ナデ、底径4.0cm
32	5	ＳＩ６	床面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	6	ＳＩ６	床面	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	7	ＳＩ６	床面	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、礫	
32	8	ＳＩ６	床面	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	9	ＳＩ６	床面	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	煤付着
32	10	ＳＩ６	床面	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	11	ＳＩ６	床面	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	12	ＳＩ６	ｐ８	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	13	ＳＩ６	ｐ８	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	14	ＳＩ６	ｐ８	胴部	刺突、沈線	内面ナデ	砂粒	
32	15	ＳＩ６	ｐ８	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	外面一部剥離
32	16	ＳＩ６	ｐ12	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	17	ＳＩ６	ｐ12	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	18	ＳＩ６	ｐ13	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	19	ＳＩ６	ｐ19	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
32	20	ＳＩ６	ｐ19	胴部	ナデ	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	21	ＳＩ６	ｐ19	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	22	ＳＩ６	ｐ19	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	23	ＳＩ６	ｐ20	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	24	ＳＩ６	ｐ20	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	25	ＳＩ６	ｐ20	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
32	26	ＳＩ６	ｐ20	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	27	ＳＩ６	ｐ21	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	28	ＳＩ６	ｐ21	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
32	29	ＳＩ６	11層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	口径（16.2cm）、器高8.6cm
32	30	ＳＩ６	11層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	31	ＳＩ６	８層	口縁部	縄文（不明）→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
32	32	ＳＩ６	８層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
32	33	ＳＩ６	８層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
32	34	ＳＩ６	８層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	35	ＳＩ６	８層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	
33	36	ＳＩ６	８層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	37	ＳＩ６	８層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	38	ＳＩ６	８層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	39	ＳＩ６	８層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	40	ＳＩ６	８層	胴部	ＲＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	

第５表　牛沢遺跡　出土土器観察表（４）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
33	41	ＳＩ６	８層	底部	ＬＲ縄文	—	砂粒、石英、礫	底部木葉痕→ナデ　底径（3.5cm）
33	42	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒	
33	43	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	44	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	45	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	46	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	47	ＳＩ６	５層	口縁部	刺突	内面ナデ	砂粒	
33	48	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	49	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	50	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	51	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	52	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
33	53	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
33	54	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	55	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文、沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	56	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	57	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒	
33	58	ＳＩ６	５層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒	
33	59	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	60	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
33	61	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	62	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	63	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	64	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
33	65	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	66	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	67	ＳＩ６	５層	口縁部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	68	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
33	69	ＳＩ６	５層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径（124.2cm）、器高（121.0cm）
34	70	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
34	71	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
34	72	ＳＩ６	５層	口縁部	縄文（不明）、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	73	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	74	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	75	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	76	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	77	ＳＩ６	５層	口縁部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	78	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	79	ＳＩ６	５層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	80	ＳＩ６	５層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
34	81	ＳＩ６	５層	口縁部	ナデ	内面ナデ	砂粒	
34	82	ＳＩ６	５層	口縁部	隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	83	ＳＩ６	５層	胴部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	84	ＳＩ６	５層	胴部	縄文（不明）、沈線	内面ナデ	砂粒	
34	85	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	86	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文？→沈線	内面ナデ	砂粒	
34	87	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	88	ＳＩ６	５層	胴部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒	
34	89	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	90	ＳＩ６	５層	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	91	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	92	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	93	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	94	ＳＩ６	５層	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	95	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
34	96	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	97	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
34	98	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
34	99	ＳＩ６	５層	胴部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒	
34	100	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	100・101は同一個体か
34	101	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	100・101は同一個体か
34	102	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	103	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
34	104	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	105	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	106	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	107	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	108	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	109	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
34	110	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	111	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	112	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	113	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	114	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	115	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	116	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	117	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	118	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	119	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	120	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	121	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	

第6表　牛沢遺跡　出土土器観察表（5）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
35	122	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
35	123	ＳＩ６	５層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒	
35	124	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	125	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	126	ＳＩ６	５層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒	
35	127	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	128	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	129	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
35	130	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	131	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	132	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	133	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	
35	134	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
35	135	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	136	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
35	137	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
36	138	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
36	139	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	140	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	141	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	142	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	143	ＳＩ６	５層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
36	144	ＳＩ６	５層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒	
36	145	ＳＩ６	５層	底部	不明	—	砂粒、石英、礫	底部調整なし、底径（4.8cm）
36	146	ＳＩ６	５層	底部	縄文（不明）	—	砂粒、礫	底部ナデ、底径（2.7cm）
36	147	ＳＩ６	５層	底部	ＲＬ縄文	—	砂粒、石英、礫、金雲母	底部網代痕、底径（11.4cm）
36	148	ＳＩ６	５層	底部	ＲＬ縄文	—	砂粒、石英、礫	底木葉痕、底径（9.6cm）
36	149	ＳＩ６	５層	底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	網代痕→ナデ、底径（13.0cm）
36	150	ＳＩ６	４層	口縁部	ＬＲ縄文（矢羽根状）	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
36	151	ＳＩ６	４層	胴部	ＬＲ縄文、沈線	内面ナデ	砂粒	151・152は同一個体か
36	152	ＳＩ６	４層	胴部	ＬＲ縄文、沈線	内面ナデ	砂粒	151・152は同一個体か
36	153	ＳＩ６	４層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	
36	154	ＳＩ６	４層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	155	ＳＩ６	４層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	156	ＳＩ６	４層	底部	不明	—	砂粒、石英、礫	底部木葉痕、底径（5.4cm）
36	157	ＳＩ６	４層	底部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、底径（11.8cm）
36	158	ＳＩ６	２層	口縁部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	159	ＳＩ６	２層	口縁部	ＬＲ縄文、隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	160	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
36	161	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
36	162	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英	162～164は同一個体
36	163	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英	162～164は同一個体
36	164	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英	162～164は同一個体
36	165	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	166	ＳＩ６	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
36	167	ＳＩ６	２層	底部	ＬＲ縄文	—	砂粒	底部ナデ、底径（5.1cm）
41	1	ＳＫ１	２ａ層	胴部	沈線→ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
41	2	ＳＫ１	２ａ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	煤付着
41	3	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
41	4	ＳＫ１	１ｂ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
41	5	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
41	6	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	煤付着
41	7	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
41	8	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	外面一部剥離
41	9	ＳＫ１	１ｂ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
41	10	ＳＫ１	１ｂ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	底部ナデ、底径5.7cm
41	11	ＳＫ１	１ｂ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部木葉痕、底径6.6cm
41	12	ＳＫ１	１ｂ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	底部ナデ、底径5.5cm
41	13	ＳＫ１	１ｂ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、底径3.0cm
41	14	ＳＫ１	１ａ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、底径3.4cm、輪積痕
41	15	ＳＫ２	１ａ層	胴部	沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
41	16	ＳＫ３	１ａ層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
41	17	ＳＫ３	１ａ層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
41	18	ＳＫ３	１ａ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	18・20・21は同一個体か
41	19	ＳＫ３	１ａ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
41	20	ＳＫ３	１ａ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	18・20・21は同一個体か
41	21	ＳＫ３	１ａ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	18・20・21は同一個体か
42	23	ＳＫ４	１ａ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	24	ＳＫ４	１ａ層	口縁部	不明	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	25	ＳＫ４	１ａ層	口縁部	不明	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	26	ＳＫ４	１ａ層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
42	27	ＳＫ４	１ａ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	28	ＳＫ４	１ａ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	29	ＳＫ４	１ａ層	底部	ＬＲ縄文	—	砂粒、礫	ミニチュア土器、底径（2.8cm）
42	30	ＳＫ５	12層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
42	31	ＳＫ５	12層	口縁部	ＲＬＲ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	32	ＳＫ５	12層	口縁部	ナデ	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	34	ＳＫ５	12層	胴部	ＲＬ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	

第７表　牛沢遺跡　出土土器観察表（６）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
42	33	ＳＫ５	12層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	35	ＳＫ５	12層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	36	ＳＫ５	12層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	37	ＳＫ５	12層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	38	ＳＫ５	12層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	39	ＳＫ５	12層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
42	40	ＳＫ５	５層	胴部～底部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、器高（17.8cm）底径8.2cm
42	41	ＳＫ５	８層	口縁部～底部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	口径11.0cm、器高13.5cm、底径（5.0cm）、底部ナデ
42	42	ＳＫ５	２層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	43	ＳＫ５	１層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	44	ＳＫ５	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	45	ＳＫ５	１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
42	46	ＳＫ５	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
42	47	ＳＫ５	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
42	48	ＳＫ５	１層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	55	ＳＫ６	21層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	56	ＳＫ６	21層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
44	57	ＳＫ６	21層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	58	ＳＫ６	21層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
44	59	ＳＫ６	21層	胴部	ＲＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
44	60	ＳＫ６	21層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	61	ＳＫ６	21層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	62	ＳＫ６	21層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	63	ＳＫ６	21層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
44	64	ＳＫ７	１層	胴部	ＲＬ縄文→渦巻文、波状の隆帯	内面ナデ	砂粒	
44	65	ＳＫ７	１層	口縁部～底部	ＬＲ縄文→沈線、渦巻文、波状の沈線	内面ナデ	砂粒	口径13.1cm、器高15.9cm、底径6.0cm
44	66	ＳＫ７	１層	胴部～底部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、金雲母	底部ナデ、底径4.6cm
44	67	ＳＫ７	１層	胴部～底部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、器高（13.3cm）、底径6.2cm
47	1	遺物包含層	１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、金雲母	
47	2	遺物包含層	１層	底部	―	内面ナデ	砂粒、礫	底部ナデ、底径5.6cm
47	3	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	３・４・６は同一個体
47	4	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	３・４・６は同一個体
47	5	遺物包含層	２層	口縁部	Ｌ無節縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
47	6	遺物包含層	２層	口縁部～胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	口径（45.6cm）、器高（51.6cm）、３・４・６は同一個体
48	7	遺物包含層	２層	胴部	沈線、吊り手状突起	内面ナデ	砂粒	
48	8	遺物包含層	２層	胴部～底部	Ｌ無節縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	底部木葉痕、器高（17.0cm）、底径（9.0cm）
48	9	遺物包含層	２層	口縁部	ＲＬ縄文→隆帯貼付	内面ナデ	砂粒	
48	10	遺物包含層	２層	口縁部	沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	11	遺物包含層	２層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
48	12	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
48	13	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英	
48	14	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	15	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	16	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	17	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	18	遺物包含層	２層	口縁部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	19	遺物包含層	２層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
48	20	遺物包含層	２層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
48	21	遺物包含層	２層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒	
48	22	遺物包含層	２層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
48	23	遺物包含層	２層	口縁部～胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	24	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	25	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	26	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
49	27	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線（渦巻文）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	28	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	29	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	30	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	31	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	32	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、金雲母	
49	33	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	34	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
49	35	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	36	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	37	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	38	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
49	39	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	40	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	41	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	42	遺物包含層	２層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒	
49	43	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	44	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	45	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	46	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	47	遺物包含層	２層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
49	48	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	

第８表　牛沢遺跡　出土土器観察表（７）

挿図番号	番号	出土遺構	層位	器種・部位	文　　様	器面調整	胎　　土	備　　考
49	49	遺物包含層	２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	50	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	51	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	52	遺物包含層	２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
49	53	遺物包含層	２層	底部	ＲＬ縄文	—	砂粒、石英、礫	底部網代痕、底径（14.3cm）
49	54	遺物包含層	２層	底部	—	—	砂粒、石英、礫	底部網代痕、底径7.0cm
49	55	遺物包含層	２層	底部	縄文（不明）→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	底部ナデ、底径（6.0cm）
53	1	遺構外	Ｃ層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、金雲母	
53	2	遺構外	Ｃ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	3	遺構外	Ｃ層	口縁部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	4	遺構外	Ｃ層	口縁部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒	
53	5	遺構外	Ｃ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒	
53	6	遺構外	Ｃ層	胴部	ＬＲ縄文、刺突、沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	7	遺構外	Ｃ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒	
53	8	遺構外	Ｃ層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	9	遺構外	Ｃ層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	10	遺構外	Ｃ層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	11	遺構外	Ｃ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	12	遺構外	Ｃ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	
53	13	遺構外	Ｃ層	底部	—	—	砂粒、石英、礫、金雲母	底部ナデ、底径（6.8cm）
53	14	遺構外	Ｆ層	口縁部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	15	遺構外	Ｇ１層	口縁部～胴部	ＲＬＲ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒	補修孔あり
53	16	遺構外	Ｇ１層	口縁部	刻み、不整撚糸文	内面ナデ	砂粒	
53	17	遺構外	Ｇ１層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	補修孔あり
53	18	遺構外	Ｇ１層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒	
53	19	遺構外	Ｇ１層	口縁部	ＲＬ縄文→沈線、隆帯	内面ナデ	砂粒、礫	
53	20	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	
53	21	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
53	22	遺構外	Ｇ１層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	23	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	24	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	
53	25	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＲＬ縄文→隆帯	内面ナデ	砂粒、石英	
53	26	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、金雲母	
53	27	遺構外	Ｇ１層	胴部	Ｌ無節縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	28	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
53	29	遺構外	Ｇ１層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	30	遺構外	Ｈ層	胴部	垂下する隆帯	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	31	遺構外	Ｈ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英	
54	32	遺構外	Ｈ層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	33	遺構外	Ｊ層	口縁部	Ｌ無節縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
54	34	遺構外	Ｊ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、金雲母	
54	35	遺構外	Ｊ層	口縁部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
54	36	遺構外	Ｊ層	胴部	縄文（不明）	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	37	遺構外	Ｊ層	胴部	沈線、刺突	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	38	遺構外	Ｊ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
54	39	遺構外	Ｊ層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、礫	
54	40	遺構外	Ｊ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	煤付着
54	41	遺構外	Ｊ層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、礫	
54	42	遺構外	Ｊ層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫、金雲母	
54	43	遺構外	Ｊ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫	
54	44	遺構外	Ｊ層	底部	—	内面ナデ	砂粒、礫	底部木葉痕、底径8.4cm
54	45	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＬＲ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
54	46	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＲＬ縄文→沈線	内面ナデ	砂粒、礫	
54	47	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＬＲ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	48	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＲＬ縄文、結節	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	49	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	50	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＲＬ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	51	遺構外	Ｇ２層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、石英、礫	
54	52	遺構外	Ｋ層	胴部	ＬＲ縄文	内面ナデ	砂粒、礫、金雲母	
54	53	遺構外	Ｋ層	口縁部	—	内面ナデ	砂粒	
54	54	遺構外	Ｋ層	底部	ＬＲ縄文	—	砂粒、礫	底部ナデ、底径6.5cm

第９表　牛沢遺跡　出土石器観察表

挿図番号	番号	地　点	層位	器　種	現存する規模（cmまたはｇ）				備　考
					最大長	最大幅	最大厚	重　量	
16	118	ＳＩ１	１層	石鏃	1.8	1.0	0.2	0.4	基部欠損している
16	119	ＳＩ１	３ｂ層	石鏃	1.8	1.1	0.3	0.5	凹基無茎鏃
16	120	ＳＩ１	３ｂ層	石鏃	2.0	1.3	0.3	0.7	凹基無茎鏃
16	121	ＳＩ１	１層	石鏃	2.4	1.8	0.4	1.9	凸基無茎鏃
16	122	ＳＩ１	１層	石鏃	3.7	1.1	0.5	2.4	凸基有茎鏃
16	123	ＳＩ１	１層	石錐	2.5	1.4	0.6	2.0	先端部欠損している
16	124	ＳＩ１	３ｂ層	削器状石器	6.3	5.3	0.9	18.0	「く」字形に屈曲している
16	125	ＳＩ１	３ｂ層	石匙	3.9	1.5	0.7	3.2	縦形石匙、先端部欠損している
16	126	ＳＩ１	１層	掻器	4.8	2.5	0.8	11.7	
16	127	ＳＩ１	１層	掻器？	3.4	1.6	0.7	3.6	
17	128	ＳＩ１	３ｂ層	小形磨製石斧	2.0	2.4	1.4	8.2	先端部のみ残存している
17	129	ＳＩ１	１層	石皿	5.6	4.9	3.1	84.4	欠損品
17	130	ＳＩ１	床面	磨石	12.8	6.9	3.8	499.8	
17	131	ＳＩ１	３ｂ層	磨石	8.2	5.7	5.8	455.0	
17	132	ＳＩ１	床面	磨石	11.3	6.6	4.6	484.2	敲打痕あり
18	133	ＳＩ１	床面	磨石	7.7	7.0	5.3	442.3	
22	31	ＳＩ２	４ａ層	石鏃	2.3	1.4	0.2	0.9	凹基無茎鏃
22	32	ＳＩ２	２層	削器？	3.0	1.0	0.3	1.3	
22	33	ＳＩ２	２層	削器？	1.9	1.1	0.2	0.6	つまみ状突起
26	11	ＳＩ４	床面	凹石	12.6	10.8	2.7	474.2	炉石に転用されている
37	168	ＳＩ６	５層	石鏃	3.0	1.1	0.3	1.2	凹基無茎鏃
37	169	ＳＩ６	２層	掻器	4.6	2.6	0.9	1.9	
37	170	ＳＩ６	５層	磨製石斧	4.8	3.8	1.9	51.3	欠損品
37	171	ＳＩ６	p2･1層	小形磨製石斧	6.9	1.9	0.8	19.2	先端部の一部欠損している
37	172	ＳＩ６	炉A1層	円礫	10.1	9.3	7.1	827.7	炉跡内部から出土している
37	173	ＳＩ６	p8･2層	磨石	9.0	7.8	6.4	491.9	
37	174	ＳＩ６	４層	凹石	8.7	6.5	3.0	264.4	
37	175	ＳＩ６	５層	石皿	7.1	5.9	2.3	78.1	欠損品
38	176	ＳＩ６	床面	石皿	17.8	14.8	6.1	1322.6	
38	177	ＳＩ６	５層	石皿	6.2	6.6	3.7	94.6	欠損品
41	22	ＳＫ３	１ａ層	掻器	3.1	2.5	0.9	6.4	自然面が残存している
43	49	ＳＫ５	１層	石鏃	2.6	1.9	0.4	1.4	凹基無茎鏃
43	50	ＳＫ５	12層	掻器	4.2	3.7	0.9	11.0	撥形を呈する
43	51	ＳＫ５	８層	箆状石器	8.3	3.9	1.3	44.0	
43	52	ＳＫ５	12層	削器	5.6	1.7	0.8	9.4	
43	53	ＳＫ５	３層	磨石	14.2	5.6	4.1	542.1	
43	54	ＳＫ５	３層	磨石	13.7	6.4	4.7	672.4	
44	68	ＳＫ７	１層	磨石	12.0	8.6	5.1	791.5	
50	56	遺物包含層	２層	石鏃	1.9	1.1	0.3	0.5	凹基無茎鏃
50	57	遺物包含層	２層	石鏃	1.8	1.6	0.2	0.9	凹基無茎鏃
50	58	遺物包含層	２層	削器？	2.5	1.6	0.5	1.3	つまみ状の突起
50	59	遺物包含層	２層	削器？	4.2	1.6	0.6	3.6	
50	60	遺物包含層	２層	石匙	5.9	3.0	1.0	14.5	縦形石匙
50	61	遺物包含層	２層	削器？	4.1	3.5	1.1	16.9	
50	62	遺物包含層	２層	石皿	7.5	5.7	2.2	87.8	欠損品
55	55	遺構外	Ａ層	石鏃	1.9	1.3	0.4	0.5	凹基無茎鏃
55	56	遺構外	Ｃ層	石鏃	2.7	2.3	0.5	2.0	平基無茎鏃
55	57	遺構外	Ｊ層	掻器	3.7	2.8	0.6	6.7	
55	58	遺構外	Ｅ層	磨石	10.5	6.9	6.7	648.5	
55	59	遺構外	Ｉ２層	凹石	6.7	5.6	2.3	91.7	

第10表　ピット計測表

ピットNo.	平面形	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）
1	不整円形	34	32	13
2	円形	48	42	19
3	楕円形	70	34	18
4	楕円形	26	18	13
5	不整楕円形	54	34	15
6	不整楕円形	31	21	8
7	円形	24	22	6
8	円形	21	20	8
9	円形	26	23	7
10	楕円形	31	25	6
11	楕円形	48	42	21
12	不整楕円形	43	39	10
13	不整楕円形	46	22	10
14	楕円形	23	15	6
15	楕円形	31	21	10
16	不整楕円形	68	36	7
17	不整円形	28	24	5
18	円形	28	25	24
19	円形	36	30	16
20	楕円形	50	31	6
21	楕円形	40	30	6
22	円形	22	20	4
23	円形	39	36	7
24	楕円形	31	26	9
25	円形	30	28	18
26	楕円形	39	26	10
27	（楕円形）	47	17	38

第５節　まとめ

牛沢遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡６棟・土坑７基・焼土遺構２基・遺物包含層・ピット27基が検出された。竪穴住居跡は６棟全てが縄文時代中期末葉に属しており、特にその中の３棟においては互いに重複関係がみられ、さらに時期差が確認された。土坑は縄文時代中期後半に属するものが１基、縄文時代中期末葉に属するものが５基確認され、そのうち３基については縄文時代中期末葉の竪穴住居跡と重複関係を有している。遺物包含層は竪穴住居跡のプランと重なるように堆積しており、出土した土器の器形や文様などから縄文時代後期前葉に形成されたものと考えられる。このように、今回の調査範囲は決して広くはないが、遺構密度が高く、しかもその年代は縄文時代中期後半から後期前葉にかけての時期に限定されるのが今回の調査における最大の特徴である。ここでは、それらの遺構と遺物について概略を記述しまとめとしたい。

（１）遺構

遺構としては竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・遺物包含層・ピットが検出されている。特に他遺構と多くの重複関係を有している竪穴住居跡について主にみていきたい。竪穴住居跡は６棟検出され、前述のとおり全て縄文時代中期末葉に属している。これらの住居跡は調査区北端で検出された第３号竪穴住居跡を除き、標高78～79mの南面する緩斜面を選地し構築されている。平面形は円形または楕円形を呈し、規模は径３～４mを測るものが多数を占めるが、それに対し、第６号竪穴住居跡は部分的な検出であるとはいえ長径6.0m、短径3.62mを測り、突出して規模が大きい。

柱穴は第１号・６号竪穴住居跡で確認されている。第１号竪穴住居跡では８基の柱穴が検出され、複式炉の南北軸を基準にして東西を二分すると、その線上の北端に１基、住居北半部では長軸線を挟んで東西それぞれに２基確認され、線対称の配置となっている。しかし、住居南半部では複式炉を挟み東側に２基、西側に１基と、非対称の配置になっているという特徴をもつ。一方、第６号竪穴住居跡は柱穴配置や周溝の重複関係から建て替えにより規模が拡張されたと考えられ、建て替え前と思われる柱穴は３基、建て替え後と思われる柱穴は６基確認されている。しかし、今回は住居全体の2/3ほどの検出であり本来何本柱であったのかは即断できず、ただ建て替え前の柱穴が複式炉を囲み方形配置となっていることから４本柱と想定されるのみである。

複式炉と柱穴の関係は住居の上屋構造のみならず、複式炉の出現やその機能について考える上で特に重要であるとされ、２・４・６・８本などの偶数柱と３・５・７本などの奇数柱があることが分かっている。今回の調査で唯一全ての柱穴が確認された第１号竪穴住居跡は前述のとおり８本柱と考えられ、宮古市内では早稲栃Ⅱ遺跡第６号竪穴住居跡や白石遺跡第１号竪穴住居跡などで確認されている。特に早稲栃Ⅱ遺跡第６号竪穴住居跡では複式炉の長軸上に柱穴をもち、さらにその他の柱穴は長軸線を挟み線対称の配置を有するなど類似する点が多い。

炉跡については、石囲炉・複式炉の２種類が検出され、石囲炉を有する住居跡が３棟（第２・４・５号竪穴住居跡）、複式炉を有する住居跡が２棟（第１・６号竪穴住居跡）確認されている。第１号竪穴住居跡の炉は石組複式炉といわれる複式炉の１類型で、台形状を呈する石組炉＋前庭部で構成され、第６号竪穴住居跡の複式炉は一部調査区外に延びているが、石組炉＋石組炉＋（石組炉もしくは前庭部を囲む石組部）で構成されていたと推測される。

複式炉に関する先学の業績は膨大にあり、形態分類１つにしても一様ではない。そのためここでは、宮古市トロノ木Ⅰ遺跡の報告書中で言及している花巻市観音堂遺跡における形態分類に準拠してみていきたい。その分類では、Ａ類～Ｈ類に８分類され、Ｇ類のような南東北にみられる「上原型複式炉」といわれる典型的な複式炉のみならず、石組複式炉といわれているものも網羅している。これらの分類に沿うと、第１号竪穴住居跡の複式炉はＡ類に、第６号竪穴住居跡の複式炉はＢ類に相当すると考えられる。Ａ類は石組炉が１つしかない形態のため広義の複式炉として捉えられているが、第１号竪穴住居跡においても住居の壁際に炉が構築されており、一般的な複式炉の構築位置と同様であるといえる。Ｂ類は石組炉が複数みられるもので第６号竪穴住居跡においても２段もしくは３段の石組炉になると思われる。

ここで、宮古市内における類例をみてみると、現在、報告されたもので赤前Ⅳ八枚田遺跡１棟、上村貝塚１棟、小平Ⅰ遺跡４棟、崎山貝塚２棟、白石遺跡３棟、千鶏Ⅳ遺跡６棟、トロノ木Ⅰ遺跡２棟、早稲栃Ⅱ遺跡４棟、島田Ⅱ遺跡１棟の、９遺跡24棟が確認されている。これらを先程の分類にあてはめると次のようになる。

Ａ類：石組炉＋前庭部・・・９棟

Ｂ類：石組炉＋石組炉＋（前庭部、石組部）・・・11棟

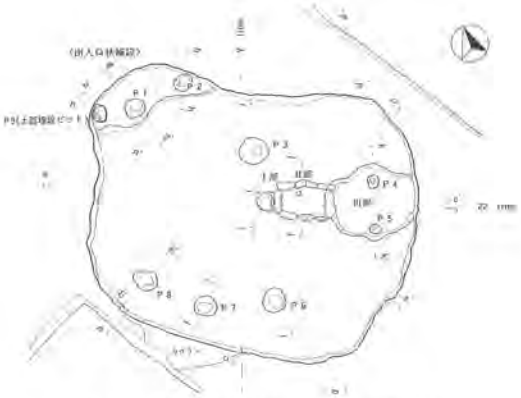
Ｄ類：土器埋設炉＋石組炉＋（掘り込み部、石組部、施設なし）・・・４棟

このように、牛沢遺跡を含め宮古市内においてはＢ類が最も多く、次いでＡ類となっている。このことは、埋設土器が少なく、石組炉を中心とする構造をもっていることが指摘され、県内では石組複式炉から土器埋設複式炉そして斜位土器埋設複式炉への変遷が考えられているが、こと宮古市内では大木８ｂ式期から大木10式期において安定的にＢ類が構築される傾向にあるといえる。

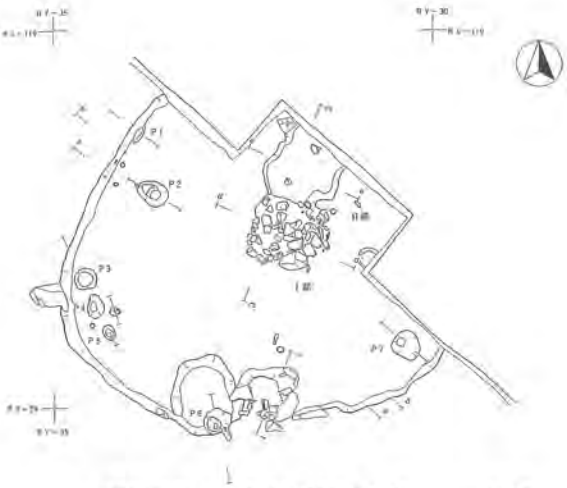
ところで、第１号竪穴住居跡では複式炉と並んで石囲炉が検出されている。この石囲炉は住居跡南端にある複式炉の西側約30cmのところに複式炉と近接し構築され、しかも複式炉と同一の面で構築されている。このことから、２つの炉跡は同一時期に併用していたものと推測される。このように複式炉と石囲炉が同時併存する例は宮古市内では早稲栃Ⅱ遺跡第３号竪穴住居跡で確認されているのみで類例は少なく、どのような機能をもっていたのか、今後の検討課題である。

次に、遺構の重複関係について確認しておきたい。図示すると下図のようになる。

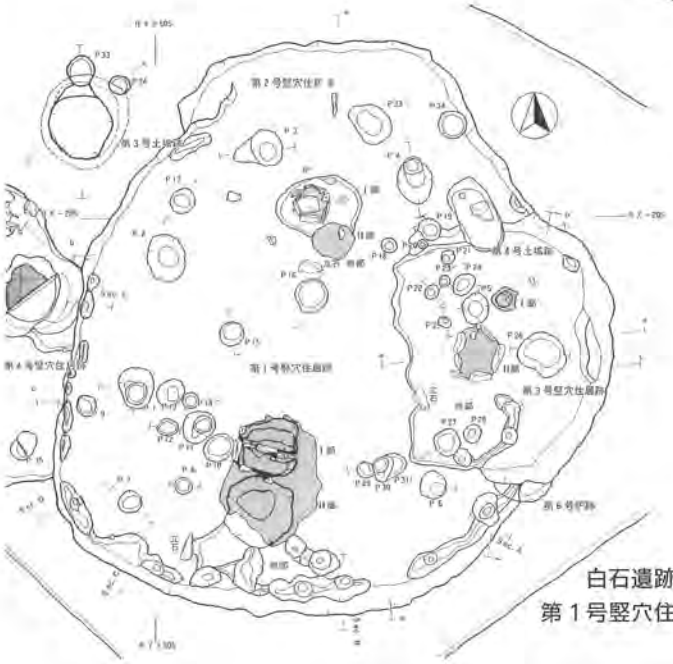
ここでは重複関係について２点付記しておきたい。まず、１つ目は第１号・２号竪穴住居跡と第６号竪穴住居跡との重複関係についてである。これらの住居跡は直接的な重複関係にはないが、第６号竪穴住居跡の検出面である基本土層Ｍ層上面と第１号竪穴住居跡の検出面である基本土層Ｋ層上面の間にはＫ層が層厚約20～30cmと厚く堆積しているため、第１号竪穴住居跡の方が新しい時期に構築されたといえる。第２号竪穴住居跡についても住居跡の一部は基本土層Ｋ層を検出面としており、同様の時期差を表している。全ての竪穴住居跡が縄文時代中期末葉に属していることは前述したが、これ



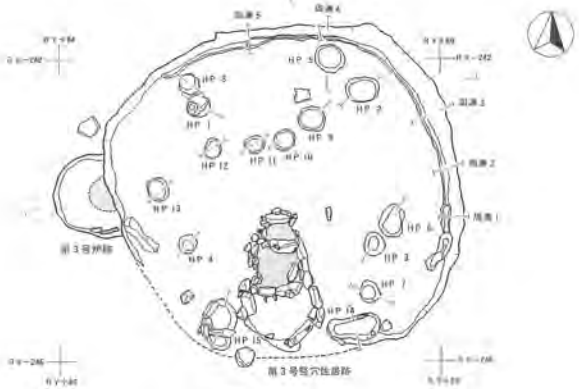
トロノ木Ⅰ遺跡　第１号竪穴住居跡



崎山貝塚　第12号竪穴住居跡　　A類

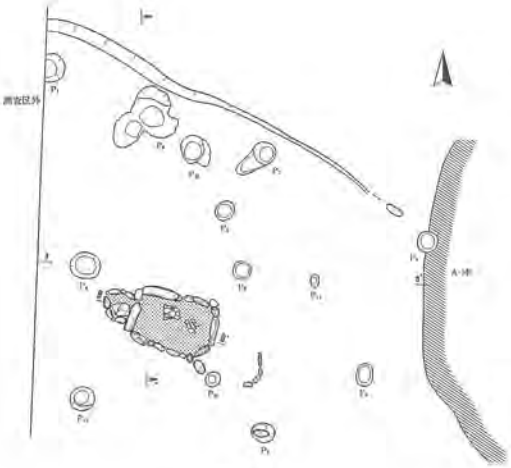


白石遺跡
第１号竪穴住居跡



早稲栃Ⅱ遺跡
第３号竪穴住居跡

千鶏Ⅳ遺跡
C－2号竪穴住居跡

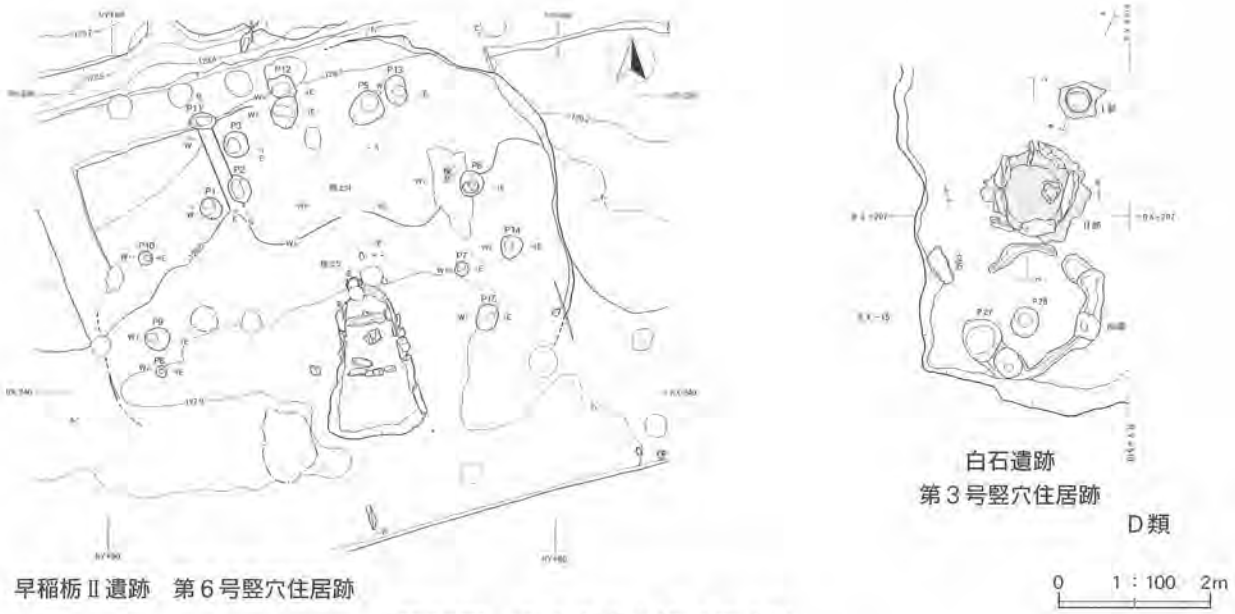


上村貝塚
A－8号住居跡

B類

0　1：100　2m

第56図　宮古市内の複式炉（1）



第57図　宮古市内の複式炉（２）

らの重複関係をみると３段階もしくは４段階の時期差が考えられ、同時期に存在していた可能性があるのは第１号・２号竪穴住居跡のみとなる。２つ目は第１号・２号・６号竪穴住居跡と重複する第５～７号土坑についてである。これらの土坑の検出面は竪穴住居の床面で、しかも炉の位置と必ず一部分重なっているという特徴を有している。このような竪穴住居跡と土坑との関係から、土坑廃絶後、竪穴住居を構築するにあたり、あえて土坑のあった地点を選地しているような意図がうかがわれる。しかし、現時点ではまだ推測の域を出ず、このような重複例の存在を指摘するにとどめる。

（２）遺物

遺物は縄文土器と石器が出土し、他の時代の遺物は皆無である。縄文土器は前期～後期のものがあり、なかでも縄文時代中期後半～末葉にかけてのものが最も多い。これらの土器は竪穴住居跡の床面や土坑の底面などからも少なからず出土しており、遺構の時期決定の重要な要素になっている。そのため、ここではこれらのいわゆる床直遺物について、前述した遺構の重複関係を加味しながら検討していきたい。竪穴住居跡の床面及び遺構底面から出土した土器は文様や器形から次の第１群土器～第３群土器に分類される。

第１群土器（第44図64～67）

第７号土坑１層出土土器の４点が相当する。第44図64は胴部破片で、隆帯による渦巻文と縦方向に延びる波状の隆帯が施され、第44図66・67も同様に沈線による渦巻文や波状の沈線がみられる。一方、第44図65は口縁部から底部まで残存し、口縁部は外側に向かって緩やかに開く器形で、口縁部と胴部との間に横位の沈線２条と刺突、そして胴部には渦巻文と縦方向に延びる波状の沈線が施されている。

これらの特徴から第１群土器は縄文時代中期後半の大木８ｂ式に比定される。宮古市内では重茂館遺跡群や上村貝塚などに類例がみられ、重茂館遺跡群では大木８ｂ式を層位的な出土状況から第Ⅵ群～第Ⅷ群に細別している。先ほどの第44図65は口縁部が無文帯となっており第Ⅶ群に相当すると思われるが、他の３点については胴部や底部周辺しか残存せず全体の文様構成が分からないために時期を限定することは難しく、ここでは大木８ｂ式期の土器群とのみ記しておく。

第２群土器

第１号～６号竪穴住居跡床面出土土器、第５号・６号土坑底面出土土器が相当する。その中でも文様の違いから以下のように細別される。

１類　地文の上に隆帯または沈線を引き縦位の縄文帯を作り出すもの（第10図１・２・５・６、第20図２・３・５、第24図７～10、第26図１、第28図１・２、第32図２・４、第42図30・31・33・34、第44図56～61）

２類　地文の上に沈線を引き「つ」形や曲線的な縄文帯を作り出すもの（第10図７～10、第20図６～８）

３類　地文のみ施文されているもの（第10図３・４、第20図１・４・９～16、第24図１～６・11・12、第26図２・３、第32図１・３・５～11、第42図32・35～39、第44図55・62・63）

１類は上記の全ての遺構から出土している。ＲＬ縄文やＬＲ縄文、ＲＬＲ縄文を器面の広範囲に施文し、その後沈線を引いたりまたは隆帯を貼り付けたりすることで縦位の楕円形や「H」字形を呈する文様を描き、さらにその中の地文のみを残し、それ以外の地文を磨り消すことで縄文帯を作り出しているのが特徴である。逆に沈線や隆帯で楕円形を描き、その中に縄文を充填する方法は全くといっていいほどみられなかった。なお、第42図31には縦位の縄文帯の上部にあたる口唇部の部分に隆帯による渦巻文がみられ、大木８ｂ式に近い古い段階のものと思われる。この他、第10図２では縦位の縄文帯の中に刺突が施され、さらに第20図２では縄文帯と縄文帯の間に刺突が施されている。このような刺突を併用するような文様は小平Ｉ遺跡や重茂館遺跡群、千鶏Ⅳ遺跡、高浜Ⅵ地神遺跡などで類例があり、該期において一般的にみられる手法といえる。

２類は、第１号・２号竪穴住居跡から少数ではあるが出土している。第10図７～10は文様・胎土などから同一個体と考えられ、第10図７にみられる円形を指向するような曲線的な縄文帯を作り出している。第20図６や第20図８では「つ」形の縄文帯が施され、第20図８では横位の刺突列がみられる。

３類は上記の全ての遺構から出土し、ＲＬ縄文やＬＲ縄文が施文されている。また、縦方向の結節がみられるものもある。

これらの文様の特徴や器形から第２群土器は大きく縄文時代中期末葉の大木９式・大木10式期に比定されよう。そして、さらに１類は大木９式、２類は大木10式にそれぞれ相当すると考えられる。現在、大木10式はさらに細別されているが、今回出土した第２群土器２類は曲線的な縄文帯のみを持つもので、口縁部下端を横位の隆帯などで区画し無文帯を作り出すものはみられないため、大木10式の中でも大木９式により近い段階の土器といえる。

第３群土器

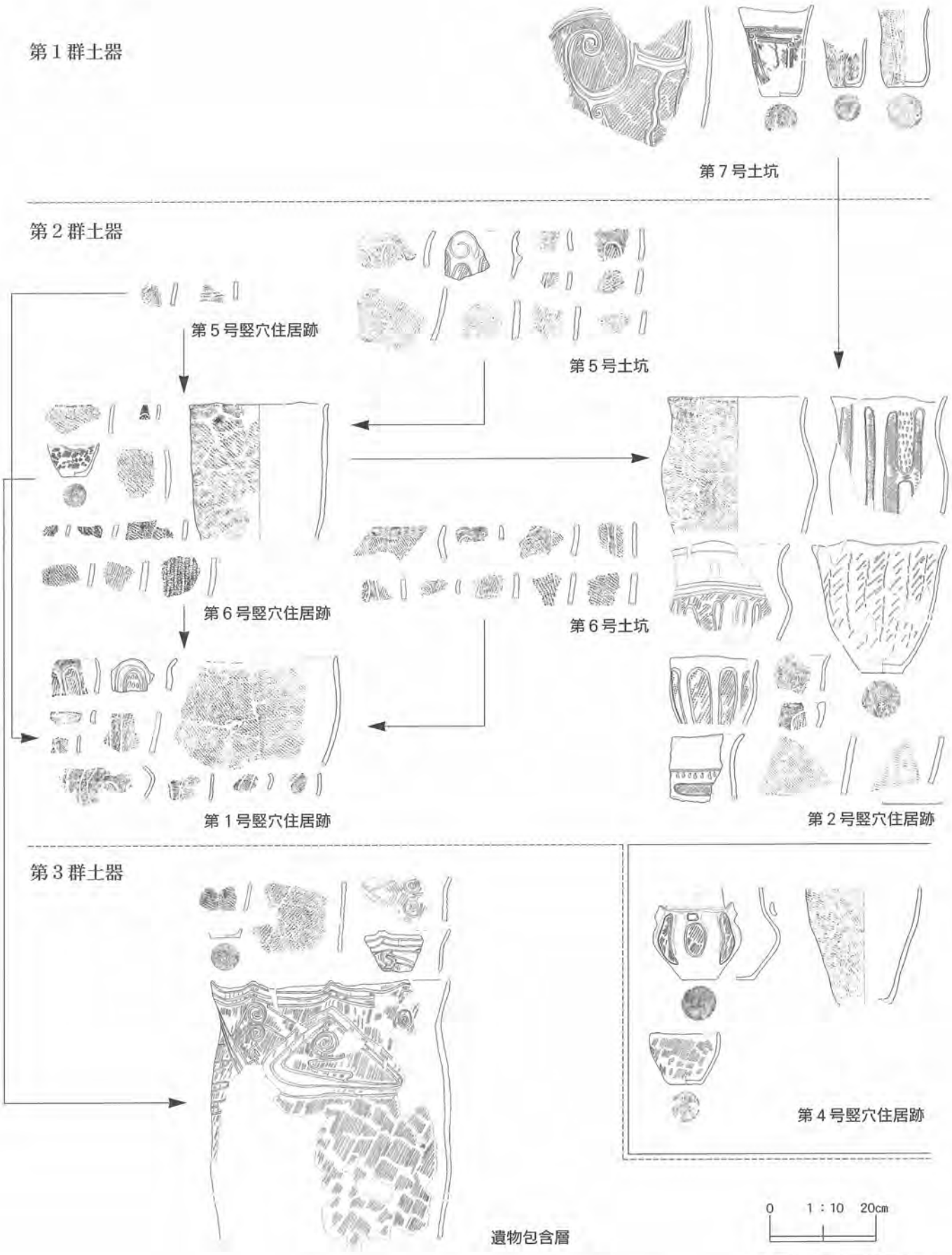
遺物包含層２層出土土器が相当する。さらに文様の特徴から以下のように細別される。

１類　口縁部、頸部、胴部に文様帯をもち、口縁部に波状の沈線、頸部から胴部にかけて渦巻状と三角形状の沈線が引かれているもの（第47図４～６・８、第49図27）

２類　波状の沈線を描き、頸部には環状の隆帯が巡るもの（第47図７）

３類　地文のみ施文されているもの（第47図３、第48図11～23、第49図28～54）

１類は胴部から口縁部まで残存し、胴部はあまり膨らまず、頸部でいったんすぼまったあと口縁部は外側に向かって直線的に広がっている。胴部上半の渦巻状と三角形状の沈線が組み合わさるモチーフと渦巻状と波状の沈線が組み合わさるモチーフが器面上で２単位ずつ展開され、胴部下半には地文



※矢印は重複関係を表す

第58図　牛沢遺跡　床面出土遺物集成図

のみ施文されている。文様帯は口縁部から胴部上半に限定される。２類は壺形を呈し、胴部には波状の沈線が施文されている。今回の調査では第47図７の１点のみ出土している。３類はＲＬ縄文やＬＲ縄文が施文されているもので、胴部の破片と思われる。この他、遺物包含層２層からは第２群土器２類の土器が出土しており、包含層形成の際に混入した可能性がある。

これらの文様の特徴から縄文時代後期前葉に属すると思われるが、該期の土器については様々な分類や型式設定がなされており、その位置付けについて確定しているとはいい難い。第３群土器についても滝沢村湯舟沢遺跡において沈線による渦巻文や三角形文などの類似する文様をもつ土器が出土しているが、今回はいたずらに型式名を述べて前後関係を論じるよりも資料を提示するにとどめたい。

このように竪穴住居跡床面出土土器及び遺構底面出土土器は第１群～第３群土器として捉えることができた。ここで再度、遺構の重複関係を確認し、土器の出土状況と照らし合わせてみたい。まず、第１群土器が出土している第７号土坑は、第２号竪穴住居跡と重複し第７号土坑の方が古い。第２号竪穴住居跡からは第２群土器が出土しているため、第１群土器→第２群土器の関係を表していると考えられる。

次に第２群土器が出土している第１号・２号・５号・６号竪穴住居跡の重複関係については、２類を除く１類・３類が出土している第５号・６号竪穴住居跡よりも１類～３類が出土している第１号・２号竪穴住居跡の方が新しい。これらの重複関係から第２群土器１類→第２群土器２類の新旧関係を指摘できる。また、第１号竪穴住居跡と第６号土坑との重複では第１号竪穴住居跡の方が新しく、第６号土坑は第２群土器１類・３類のみ出土しているが、第１号竪穴住居跡は前述のとおり第２群土器１類～３類まで出土しているため、同様の関係を表している。この他、第６号竪穴住居跡と第５号土坑の重複では第５号土坑の方が古く、ともに第２群土器１類・３類のみ出土しているが、第５号土坑からは前述したように口唇部に隆帯による渦巻文が施されているものが含まれている。この文様は、大木９式でも古手の様相をもつことから、重複関係においてもそれを追認しているといえる。

第６号竪穴住居跡埋土の上層で確認された遺物包含層は、その堆積状況から住居廃絶後にできた窪地を利用した土器捨て場と考えられ、第６号竪穴住居跡からは第２群土器１類・３類が、遺物包含層からは第３群土器が出土している。このようなことから、大木９式に比定されている第２群土器１類と縄文時代後期前葉に位置付けされる第３群土器との新旧関係を遺構と遺物の両面において確認したことになる。

（３）総括

今回の調査では、竪穴住居跡・土坑などの遺構が集中して検出され、縄文時代中期末葉に形成された集落の一端を確認することができた。調査区の南側に広がる畑の地表面からは縄文土器の破片が容易に表採されるため、この縄文集落は地中において良好に残っていると考えられる。なお、牛沢遺跡の周辺では縄文時代中期の集落跡である小平Ｉ遺跡と高根遺跡が発掘調査されている。小平Ｉ遺跡は南流する山口川を挟み牛沢遺跡の東約200mの所に位置し、縄文時代中期中葉～末葉にかけての住居跡が19棟検出されている。また、牛沢遺跡の南約600mの所にある高根遺跡は縄文時代中期初頭から前半にかけての住居跡や土坑、墓壙が検出されている。牛沢遺跡を含めたこれらの３遺跡はともに近接し、遺跡の立地状況も類似していることから、縄文時代中期における山口川流域では尾根先端部の狭小な平坦地を利用した集落が点在していたと推測される。